

地域交流センター年報

令和 4 年度

VOL.25



三重県立看護大学
地域交流センター

巻頭言

地域交流センター年報令和4年度第25号の発刊にあたりましてご挨拶申し上げます。

三重県立看護大学は、平成9年4月に初の四年制公立大学、看護の単科大学として開設され、令和4年4月に25周年を迎えました。附属機関として開学と同時に設置した地域交流センター（開設時は地域交流研究センター）も大学と同じく設置から25年を迎え、本学の教員の全員が地域交流センターの構成員となって展開される多種多様な地域貢献事業は、三重県公立大学法人評価委員会からも高い評価をいただいております。

本年度は、昨年度から新規開設準備を進めておりました認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」を、特定行為研修指定研修機関である三重大学医学部附属病院と共同して開設し、令和4年度は5月に16名の研修生を迎え、去る令和5年2月にその16名を修了生として送り出すことができましたこと、三重大学医学部附属病院の皆様、さらには本教育課程の講義や実習等でお世話になった皆様には、心より御礼申し上げますとともに、次年度は社会の要請に応じて定員を20名に増やし、本教育課程を運営して参りますので、関係の皆様には、相変わらずご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

「みかん大出前講座」、「みかん大リクエスト講座」については、本年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響が根強く残る中、ウィズコロナの生活様式の本学の教員や県民の皆様への浸透とともにオンライン対応にも積極的に取り組んだ結果、中止になる講座が少なくなるとともに、県民の皆様の満足度も高く、本学教員の専門分野を生かし、安定した地域貢献を展開することができました。

年三回開催される公開講座については、前年度には対面とオンラインのハイブリッド形式による開催を本格化することができ、本年度はそれをさらに進化・成熟させたことにより、新型コロナウイルス感染拡大に影響されることなく着実に開催できました。特に、第三回公開講座は開学25周年記念講演とし、同窓会にもご共催いただき、北京パラリンピックの金メダリストである伊藤智也さんをお招きし、「誇れる過去は、諦めない今がつくる」のタイトルでご講演いただき、とても好評でした。

令和4年度は第三期中期目標期間の2年目であり、本年度の実績と反省点を踏まえつつ、次年度も地域社会との連携・協働を深め、地域貢献活動の一層の充実を図ってまいりたいと存じますので、皆様には引き続きご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和5年3月

地域交流センター長
林 辰弥

目 次

・ 巻頭言

I. 教員提案事業

1. 看護職者に向けた取り組み(みえ保健・看護力向上支援事業)

1) Brush up! 急性期看護	1
2) 看護職者を支援する相談窓口事業	2
3) 心電図を読もう!	4
4) 看工連携ものづくりシーズ発掘	6
5) 医療施設に広げよう看工連携による 特許の輪(その2)	8
6) 実践につなげるフィジカルアセスメント	10
7) 障がい児の切れ目ない就学支援事業	11
8) シコウ Upgrade0ー医療機関の高齢者看護	12
9) 災害時における新任期保健師の公衆衛生看護活動支援事業	15

2. 県民に向けた取り組み(県民のヘルスリテラシー向上支援事業)

1) 社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業	17
2) みかん大「暮らしの保健室」	20
3) Re-mamma Café (リマンマ カフェ)	22
4) みかん大健康バドミントン教室 (中級編)	24
5) 手洗いチェックしてみませんか?	26
6) 医療的ケア児と家族のピアネット支援	27
7) 対話による探Qカフェ	30
8) みかん大バリスタ for 認知症カフェ	32
9) みかん大もの忘れ相談	34
10) 子どもたちに「たいせつなからだ」を伝えるプロジェクト	35
11) みかん大 よりみちカフェ	39
12) 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援	41
13) おいないさ、みかん大ミニ講座	44
14) 私たちに今できる災害の備え	45
15) 赤ちゃんをむかえるママとパパのための「みかん大ハッピーマタニティ教室」	48
16) みかん大ヘルシーウォーキング体験会	50

II. 卒業生支援事業

1. 卒業生支援プロジェクト	53
2. 卒業生のきずなプロジェクト	55

Ⅲ. 受託事業

1. 三重県新人助産師合同研修	59
2. 助産師（中堅者）研修	63
3. 三重県認知症対応力向上研修	67
4. 母子保健体制構築アドバイザー事業	71

Ⅳ. リカレント教育

1. 認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」	75
2. 認定看護師フォローアップ研修	77

Ⅴ. 地域交流センター企画事業

1. 講師派遣	
1) みかん大出前講座	79
2) みかん大リクエスト講座	83
2. 看護研究支援	
1) 看護研究S E E D	87
2) 看護研究エッセンス	93
3) ハウツー看護研究	96
4) その他の看護研究支援	100
3. 公開講座	103
4. 認知症多職種連携研修会	107

Ⅵ. 連携

1. 連携協力協定	109
2. 看護管理者意見交換会	110
3. 人事交流教員支援	114

Ⅶ. その他

1. 情報発信・広報活動	117
2. 各種講座案内と申込書	121

・編集後記

I．教員提案事業

1．看護職者に向けた取り組み

1) Brush UP！急性看護

担当者：岡根利津、玉田章

【事業要旨】

県内の認定看護師（集中ケア・救急看護）が協働し、急性期看護に関する知識やアセスメント力のブラッシュアップを目的とした研修会を開催する。県内における看護師の継続学習を支援し、三重県の急性期看護の質の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

三重県において、クリティカルケア領域に関する認定看護師や専門看護師などの熟練看護師は少なく、限られた施設に所属している状況である。本研修では、県内の熟練看護師が講師を務め、臨床の状況を考慮した研修を開催することで、標準的な知識を共有することができ、施設ごとの教育格差の解消、急性期看護の質の向上につながると考える。

【昨年度からの課題】

昨年度は開催できなかったため、一昨年度のアンケート結果より得られた研修への要望や臨床現場における課題等を考慮し、対象に見合った研修内容および分かりやすい研修テーマを設定していくことが課題であった。

I. 活動計画

＜数値目標＞参加人数：15名（オンラインの場合）、30名（対面の場合）

＜実施計画＞テーマや研修案内から研修内容がイメージしやすいように計画した。

テーマ：呼吸・循環・脳神経系のアセスメントのポイント～今すぐ使える考え方を学び、指導につなげよう～、日時：令和4年11月5日（土）、研修内容：呼吸・循環・脳神経系に関する講義、状態変化時のアセスメント（事例を用いてアセスメント）

II. 活動の結果と評価

＜結果および評価＞

参加者は17名（対面9名、オンライン8名）であった。設定した数値目標の到達には至っておらず、急性期病院の看護師を対象とする研修であったことから、COVID-19の影響を直接的に受けたものとする。研修評価としては、9割以上の方が、午前の講義と午後のGWともに高い満足度と評価しており、今後の実践に活かせると回答していた。また、研修テーマへの興味、関心を受講理由とした参加者が多く、さらに研修を通してアセスメントの難しさを再認識したり、より深く考えることができたという意見も散見され、ニーズに適した研修テーマおよび研修内容であったと考える。

III. 今後の課題

本事業は、今年で最終年度となるが、県内で開催される急性期看護に関する研修は少なく、今後も引き続き継続し、標準的な知識の共有、教育格差の解消、急性期看護の質の向上につなげていく。

2) 看護職者を支援する相談窓口事業

担当者：中西貴美子、小池敦、上田貴子、長谷川明子、永見桂子

【事業要旨】

三重県内の病院看護部の管理部門を対象に、キャリア・看護管理、教育・進学等に関する相談に対応して、組織の問題解決を支援する。また、病院・施設間での情報収集や意見交換の場を提供し相談に繋げる。

【地域貢献のポイント】

施設の看護部が抱えている問題・課題について支援する場が増えることによって、相談が容易となり早期解決につながる。また、大学という第三者の立場からの支援は新たな視点での取り組みとなり、必要な組織の変革を促進することができる。以上のことによって三重県内の施設の看護の質の向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

昨年度の地域交流センター事業「県内病院等看護管理者意見交換会」において依頼した調査の結果、「病院相互が意見交換をする時間が充分取れる機会をつくる」というニーズが明らかになった。それを受けて行った新年度直前企画「コロナ禍における看護職者の心理的支援について考える」をテーマとした話題提供と意見交換会は好評であり、企画の継続を示唆するものであった。

I. 活動計画

＜数値目標＞

看護部の組織ニーズに合った事業を1回以上実施する。

＜実施計画＞

1. 相談窓口事業を継続する。
 - ・ホームページに引き続き、事業概要を掲載し周知する。
 - ・関連イベントにおいて、事業紹介を実施する。
2. 病院施設相互の意見交換会を実施する。
 - ・今年度の医療状況等をもとに、看護部での関心が高いと思われる話題について検討し、イベントにおいて話題提供を行う。
 - ・これまでの調査結果から、参加しやすい方法・時期を検討し、意見交換会を実施する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 相談窓口事業

意見交換会でのアンケートでは事業に関心はあるものの、今現在相談したい事がないという結果であり、実際の相談件数は0件であった。

2. 意見交換会

1) テーマ：コロナ禍で看護職者を育てる

～コロナ禍で教育を受けた看護学生の特徴～

2) 開催日時：令和 5 年 2 月 14 日（火）13：30～15：00 Zoom 開催

3) プログラム

13：30～13：45 話題提供（担当：上田）

13：45～14：30 意見交換

14：30～15：00 意見共有・まとめ

4) 当日参加者数 2 施設 2 名

5) アンケート結果（回答数 2 件：回収率 100%）

（1）企画の内容

希望に沿った役に立つ内容であったが、参加者が少なく残念だったという意見であった。

（2）開催時期

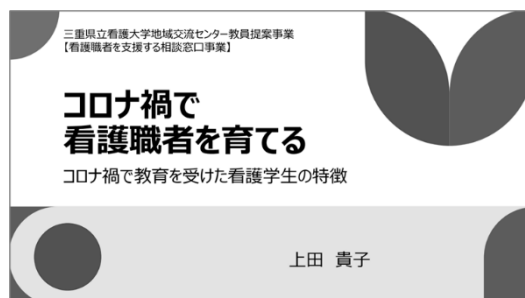
開催日（2 月 14 日）について、もっと早い時期が良い、年度末を避けた日程が望ましいという意見があった。

開催時期の希望は、7 月～9 月 1 名、10 月～12 月 1 名であった。

（3）企画に対する満足度：平均 4.2（5 点満点）

（4）その他

Zoom 開催については、対面の希望と両方の意見があった。また、今後について気づきのある看護職を育成する工夫などの研修や企画への希望が寄せられた。



< 評価 >

計画した事業をおおむね実施することができた。意見交換の企画は、開催時期があわず残念ながら参加施設は少なかったが、大学の事業メンバーを加えて活発な意見交換は行われた。病院相互の意見交換をできる場としては不十分であったため、開催時期を早めるなど参加者が増加する工夫が必要であった。また、相談窓口について、企画時にアンケートを実施しているが、昨年にかけて「関心はあるが相談したいことはない」という結果がほとんどであった。窓口事業の存在について認知はされつつあると思われる。県立看護大学には相談窓口があると認知がされていれば、必要となったときに活用してもらえるため、本事業を継続していくことが重要だと考える。

Ⅲ. 今後の課題

3 年間事業を展開した結果、県立看護大学として、何かあった時に対応できる相談窓口や意見交換の場を継続的に提供していくことには意義があると思われる。従来から地域交流センター事業として開催されている「病院等看護管理者意見交換会」と並行して、病院施設相互の意見交換を主とする本事業を継続し、県内施設に貢献していきたい。

3) 心電図を読もう！

担当者： 関根由紀、菅原啓太、大川明子

【事業要旨】

本事業は、心電図を少しでも身近に感じ判読する力をつけるために刺激伝導系の理解をはじめ、心電図波形の基本から臨床で遭遇する不整脈の判読、不整脈出現時の対応を理解し、日々の看護実践に活用できることを目的とする事業である。参加対象は、集中治療室や循環器病棟といった部署は問わず、心電図に興味あるいは苦手意識のある方とした。

【地域貢献のポイント】

県内の医療機関において日常的に心電図に触れる機会のある集中治療室や循環器病棟に勤務する看護師に限らず、心電図に興味・関心、苦手意識のある方が参加できる事業である。研修会では、心電図波形の正常と異常の判読のコツ、そして各不整脈における対応を知り、それらの知識を臨床で活用できるようになることで看護スキルの向上や臨床に還元することができ、地域貢献につながると考える。

I. 活動計画

＜数値目標＞

本年度は昨年度の参加者数および COVID-19 による開催の影響を加味し、参加目標数 10 名とした。広報活動は、県内の病院を対象に行った。

＜実施計画＞

企画運営の打ち合わせ：学内 2 回

日時：令和 5 年 1 月 21 日（土）13：00～16：00

場所：大講義室

プログラム内容：心電図の基本、基本波形を読む、基本的な不整脈を読む、リクエストのあった不整脈の判読

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 研修会参加者

10 月に県内医療施設 14 施設にチラシの送付を行い、参加者を募集した。研修会参加申込み者数は 21 名、当日参加者は 19 名（体調不良による欠席 2 名）、そのうち 11 名は卒業生であった。看護師経験年数は 1 年目～19 年目、平均看護師経験年数は 5 年であり、参加者の所属部署は、救命センターICU や内科病棟、外科病棟、産婦人科、市役所などであった。

2. 研修会の内容

大講義室に入室の際、非接触型体温計にて体温のチェックおよび当日の体調の確認を行った。グループは、経験年数を加味し同じ施設で偏らないように 4 人 1 組でグループピ

ングし、グループワークを行った。なお、グループワークを行う際はマスクの着用を必須とし、ソーシャルディスタンスおよび換気に留意した。研修会のプログラムは、研修会前に測定した参加者たちの3誘導心電図波形を用いた演習に加え、参加者たちの知りたい不整脈を含めた内容とした。

3. アンケート結果

研修会終了後に Microsoft Forms を用いてアンケート調査を行った。その結果、回収率および有効回答率は 89.5% であった。

研修会の満足度は、満足 76.5%、やや満足 23.5% であり、その理由は、「初歩から教えていただき、分からないところも対応してもらえて理解できたと思えた」「基本的なことから心電図を見ながら問題を解くことで応用できた」などであった。内容の理解は、理解できた 41.1%、あまり理解が出来なかった 5.9%、復習し理解を深めたい 53.0% であり、難しかった点は、「似ている心電図の見分け方をはっきり理解できなかった」であった。研修会内容の適切性では、適切であった 53.0%、難しかった 41.1%、簡単だった 5.9% であった。開催時期は、この時期でよい 88.2%、もう少し早い時期に開催して欲しい 11.8% であり、開催時間は全員がちょうど良いと回答した。

自由記述では、「ラウンドしてもらい、分からない部分は質問できたので良かったです。」「時間があっという間でした。基礎から教えていただき、私には良かったです。またこのような機会があれば、参加したいです。」「どうやったら、現場ですぐに判別できるか…。」などの声があった。またグルーピングについて、「4人グループのうち2人が同じ病院の方たちで、4人でのグループワークが出来てなかったのも、できたら4人別々の所属か1人で考える方が良かった」という意見があった。

< 評価 >

参加者数は本年度においても目標を大きく上回り、心電図の判読に対する関心の高さが伺えた。参加者の半数は本学の卒業生であり、昨年度よりも多く参加しており、卒業後も大学で学ぶ機会を提供することができた。

アンケート調査の結果から、今回の研修会の満足度は高く、開催時期や時間、内容も適切であったと思われる。研修会はグループワークとしたが、メンバーと相談できることで講義内容の振り返りや共有につながった。グルーピングは、自由記述にもあるように所属施設等を考慮する必要がある。また、「分かりやすく、今後に役立てたいと思います。」といった声からも、本事業の目的は達成できたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

アンケート調査の結果から、研修会の内容は理解できたが、難易度の回答で難しかったと回答されたうち自由記述に「もっと基礎からしっかり学びたいと思いました！とても勉強になりました！」という意見があった。参加者の看護師経験年数や所属部署は異なるためベースラインの設定が難しいところではあるが、本事業は初級編であることや参加者の傾向を捉え、心電図の基礎にもう少し時間を設ける必要があると考える。また、チラシの送付が昨年度よりも遅かったため、8月末には送付できるよう準備を行う必要がある。

4) 看護に役立つものづくりシーズ発掘

担当者：斎藤真、大西範和、大川明子、大平肇子、犬飼さゆり、ドライデンいづみ、
長谷川智之、市川陽子、田端真、竹村和誠

【事業要旨】

本事業は、看護ケア用品の開発およびその知的財産の取得を目的に本学教員が問題を提起し、ブレインストーミング形式の話し合いから解決策を提案する。さらに提案されたアイデアから試作品の製作や有用性の検証を行い、知財となり得る可能性がある場合は申請を行う。

本学は平成 27 年度から（独）工業所有権情報・研修館の産学連携知的財産アドバイザー派遣事業に採択され、平成 30 年度からは新たな事業制度の下、本事業を積極的に展開してきた。本年度は、本学教員および県内企業による「看工連携ブレインストーミング」の開催を目標にした。

【地域貢献のポイント】

本事業は、本学の教員の持つ知的財産のシーズ発掘や試作品から製品開発、販売に至るまでの地元企業との産学連携をすることを最終目的としている。したがって、知的財産のシーズ発掘は地方創生の観点からも有用性の高い地域貢献事業である。

県内の企業と共同で看護ケア用品についてシーズ発掘を行うため、「看工連携ブレインストーミング」を展開する。

【昨年度からの課題】

コロナ禍において「看工連携ブレインストーミング」も十分に開催できない状況であるが、できる限り開催する方向で進める。

I. 活動計画

＜重点課題＞「看工連携ブレインストーミング」を月 1 回開催し、シーズの発掘を行う。

＜実施計画＞県内企業との「看工連携ブレインストーミング」を開催する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

今年度の活動は、「県内企業との看工連携ブレインストーミング」を定期的に行う予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響のため、県内企業との調整がつかず開催できなかった。

＜評価＞

本学教員の発想からのニーズ、シーズを発掘し、さらにそれらを知的財産として特許出願にしていくことは他大学にはない取り組みである。

Ⅲ．今後の課題

「看工連携ブレインストーミング」により発掘され、知的財産となり得る案件は具体化させる。また、次年度以降は県内企業との積極的な交流を進める。

5) 医療施設に広げよう看工連携による特許の輪(その2)

担当者：齋藤真、大川明子、大西範和、大平肇子、犬飼さゆり、長谷川智之、市川陽子、岡根利津、菅原啓太

【事業要旨】

本事業は、地域の医療機関と連携して看護実践に役立つケア用品の開発を目的としている。本学教員がファシリテータとなり、県内の各医療施設のスタッフと看護における困りごとを話題に「発明ブレインストーミング」を行い、知的財産となり得るシーズ(解決策)を発掘する。

「発明ブレインストーミング」で取り上げられた内容は、知的財産として成立するようであれば試作を行うとともに、臨床への応用を想定した研究としてデータを収集する。

ここで行われた研究は、各医療機関の院内研究として活用することも視野に入れている点が特徴である。なお本事業は、前年度までに終了した事業を再度立ち上げたものである。

【地域貢献のポイント】

「医工連携」という名称の下に活動している例は多々あるが、「看工連携」としての活動は例がない。当然のことながら地域の医療施設の看護部が知財を保有し、それを有効に活用している例は皆無である。特に地方の医療機関を活性化する手段のひとつとして、知財発掘とその有効活用をすることが地域貢献である。

また看護系の県立大学として、県内の医療機関の発展に寄与できることは地域貢献として価値の高いことである。

【昨年度からの課題】

今年度も未だに続く新型コロナウイルス感染拡大のため、活動は停止している。新型コロナウイルス感染の影響がなくなり次第、各医療機関に出向いて「発明ブレインストーミング」を開催することができるよう準備を進める。

I. 活動計画

＜重点課題＞

地域の医療機関に「知的財産」の必要性を認識してもらう。また「看工連携」という概念を広める。

＜数値目標＞

年間5件程度の医療機関に参加してもらうことを目標とする。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

令和元年度に3病院を対象に「発明ブレインストーミング」を開催した。本学の教員が各病院で会のファシリテータを行い、多くの看護師の参加を得て活発な話し合いを行った。

各施設における看護業務の困りごとや悩みごとを全員で共有し、解決策を考えた。令和 2 年度以降は、新型コロナウイルス感染拡大のため、事業を停止している。感染の影響が落ち着いた時点で、各医療施設において「看工連携」における「発明ブレインストーミング」を再開する予定である。

＜評価＞

令和元年度の実施結果から、「難しい内容を想像していたがそうではなかった」、「現場の困りごとを共有していくことの重要性を認識した」、「知財への関心が高まった」などと前向きな意見が得られた。

さらに「発明ブレインストーミング」から出たアイデアについて各病院が「院内研究」へ発展させることを中期的な目標とし、参加意欲の向上を目指している。

Ⅲ．今後の課題

新型コロナウイルス感染拡大が収束し、各医療施設の許可が下りた時点で「発明ブレインストーミング」を再開することになっている。

6) 実践につなげるフィジカルアセスメント

担当者：岡根利津

【事業要旨】

県内の認定看護師や呼吸療法士が講師を担い、現場のニーズに沿った「呼吸ケア」に関する研修を企画・開催する。年度ごとにサブテーマを設定し、講義やグループワークなどを取り入れながら、実践につなげる知識を習得できることを目指す。

【地域貢献のポイント】

呼吸ケアに関する研修を継続的に県内で開催することにより、標準的な知識の普及とアセスメント力の向上につながる学習の機会を提供することができる。また、コメディカルを対象とすることから、個人の能力の向上のみならず、多職種間の共通認識が促進されチーム医療の質の向上にもつながると考える。

I. 活動計画

＜数値目標＞

参加人数（ハイブリッドでの開催を想定） ①オンライン：20名 ②対面：20名

＜実施計画＞

- 日時：令和4年12月10日（土）13:00～17:00
- 開催方法：対面もしくはzoomでのオンライン参加
- プログラム：いまさら聞けないバイタルサインの基本、いまさら聞けない検査・画像の解釈と早期離床、ワークショップ

II. 活動の結果と評価

＜結果および評価＞

参加者は10名（対面6名、オンライン4名）であり、全員が看護師であった。数値目標に至らなかったことについては、COVID-19第8波が懸念される次期と重なったことが影響したと考えられる。活動評価として、約9割の方が研修の内容について「非常に満足」と回答しており、満足度の高い研修であったと評価する。また、ほぼ全員が今後の実践に活かすことができると回答しており、実践につながる研修内容であったと考える。講義後にワークショップを通して実践での活用をイメージ化することで、主体的な学びとなったという感想もあった。

III. 今後の課題

参加者の満足度の高い研修を開催することができたが、参加者募集について、数値目標を達成できるよう検討する必要がある。対象となる医療従事者の多くは、急性期医療に携わる方となるため、COVID-19の影響を大きく受けることとなるため、臨床現場の状況を鑑みながらなるべく多くの参加が得られるよう開催時期等について検討していく。

7) 障がい児の切れ目ない就学支援事業

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、中北裕子

【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子ども（以下、医ケア児）が在籍する特別支援学校・保育園・幼稚園等に勤務する看護職等の専門職は、配置される同職者が少なく、不安や戸惑いなどの困難感を抱えている現状にある。本事業は、医ケア児に対応する専門職同士の情報交換や資質向上を図ることを目的とした交流の場づくりを支援する活動である。

【地域貢献のポイント】

行政・教育・医療・福祉の専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、教育や保育の場に携わる専門職者の交流を求めるというニーズへ対応する。医ケア児と家族に関わる専門職のピア・カウンセリング、ピア・エデュケーション効果のあるピア・サポートの場を提供することで、参加者の困難感や不安の軽減、専門職の具体的な支援の提供、新たな知見の発掘につながり、医ケア児の切れ目ない就学支援に貢献する。

I. 活動計画（3年計画の1年目）

1. 数値目標

- 1) 事業の開催：1回以上
- 2) アンケート結果の参加者満足度：平均4（5件法）あるいは3（4件法）以上
- 3) 参加者：5名以上
- 4) 学生ボランティア：1名以上

2. 実施計画

- 1) 事業実施のため行政や教育機関等と連携しながら参加者へ広報を行う。
- 2) 事業の実施
 - (1) COVID-19の状況に応じて学校看護師等の交流会を開催する。
 - (2) 事業評価のためのアンケートを実施して評価する。
 - (3) 学生ボランティアを募集し、医ケア児を取り巻く環境理解につなげる。
- 3) 事業の反省会を実施し、課題の検討を行う。

II. 活動の結果と評価

県内の行政や教育機関と連携しながら2月の開催日程の調整を3回行ったが、COVID-19の影響から、保育所・幼稚園・認定こども園、特別支援学校等の業務対応職員不足から開催日程を調整する事が出来なかった。

III. 今後の課題

COVID-19の状況で業務上の日程調整が難しい場合でも、可能な少人数での開催や、開催方法も対面・オンライン・ハイブリッド等を検討・工夫する。

8. シコウ Upgrade－医療機関の高齢者看護

担当者：田端真、清水律子、竹村和誠、河村敦子

【事業要旨】

高齢者は健康障害とともに生活することが多くなるため、医療機関の看護職者は、高齢者のもてる力に着眼し、望む生活を見据えた目標志向型思考を用いていくことが大切である。そこで、看護職者が目標志向型思考を用いた看護に関する理解を深め、高齢者への看護の能力向上につなげることを目的に、医療機関の看護師を対象に講座を実施する。

【地域貢献のポイント】

- ・ 看護職者の老年看護に関する学習機会となり生涯学習の一環となる。
- ・ 医療機関における高齢者への看護の質の向上に寄与する。
- ・ 看護学実習受け入れ病院の学生への教育の質の向上につながる。
- ・ 高齢者の望みや生活（暮らし）を見据えた看護により、地域包括ケアシステムの構築に沿う取り組みにつながる。

I. 活動計画

＜重点課題＞

医療機関の状況に応じて本講座に参加しやすい様式を構築する。講座を受講することにより参加者全員が目標志向型思考を用いた看護に関する理解を深める。

＜実施計画＞

1. 本学の連携協定病院を対象とし、看護部教育担当者と講座の打ち合わせを行う。
2. 対象となる看護師が参加しやすいよう、1施設内で同一の講座を数回開催する。
3. 参加者に対してアンケート調査を行い、講座を評価する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 概要

連携協定病院の看護部教育担当者と連絡調整を行い（図1）、2施設において講座を実施した。開催日は、10月3・13日、11月14・28日、12月8・12日であり、時間は予め看護部教育担当者と調整のうえ決めた。これらは、参加者の勤務等に配慮して柔軟に設定した。

講座への参加者は、合計41名であった。

図1 事業チラシ

令和4年度 三重県立看護大学地域交流センター 教員提案事業

シコウUpgrade－医療機関の高齢者看護

高齢者は健康障害とともに生活することが多くなるため、医療機関の看護職者は、高齢者のもてる力に着眼し、望む生活を見据えた目標志向型思考を用いていくことが大切です。そこで、日ごろ学生の実習指導を担当している本学の教員が目標志向型思考で看護を展開するためのエッセンスを紹介します。

学生指導や日々の高齢患者様への看護に・・・
高齢者看護のアップグレードを目指しませんか!?

開催日時
令和4年9月～令和5年1月の老年看護学実習前・期間中
それぞれのご都合に合わせて決定します。
講座の所要時間は、30分程度です。
(1施設につき同内容で2～3回を予定)

開催場所
各施設の控室等

対象者
老年看護学実習の学生指導を担当される看護師様
高齢者看護に興味のある方

*目標志向型思考とはどんな思考か
日々の高齢者看護に目標志向型思考をどのように取り入れていくのか
事例の「アセスメント」「看護の焦点の明確化」「看護計画の立案」をととして考えます

＜問い合わせ＞
三重県立看護大学 老年看護学 田端
電話：059-233-5683
メール：makoto.tabata@mcn.ac.jp

2. 講座の方法と内容

各施設の会議室や研修室にて、パワーポイントの映写と配布資料を用いて30分～1時間程度で講義形式の講座を行った。

内容は、①高齢者への看護の考え方、②目標志向型思考とはどんな思考か、③事例を用いての目標志向型思考による看護展開の例示、から構成した。

3. アンケート結果

(1) 参加者の属性と受講後の反応

講座後に参加者へのアンケートを行った。アンケートは41部配布し、本稿に使用することに同意が得られたのは40部であった。参加者の属性を表1、参加者の反応を図2および表2に示す。本講座への参加者の年代は20代から50代と幅広く、そのほとんどは実習指導者であり、14名程度は近年の本学の老年看護学実習の実習指導者とその経験者であった。

「目標志向型思考」を知っていたかについては、16名が「はい」であった。どこで知ったかについては、「老年看護学実習の実習指導を通して」が6名、「認知症看護などの研修会・学習会」が4名、「本・文献を通じた自己学習」と「学生時代の学習」がそれぞれ2名であった。

本講座の受講を通して、講座のタイトルにある「シコウ」を一番当てはまりがいいと感じる漢字で表すとするならという問いには、半数以上が「思考」であり、その他に「志向」や「試行」などの10の漢字があげられた。最も多かった「思考」の理由は、「対象となる人を思いながら考えるため」「目標志向型思考の考え方に基づいて、看護師の思考力をupする必要があるため」「今までやってきた問題解決型から考えを変えていくため」のような意見が多く、他の漢字の理由では「高齢者の方々が望む方向に向かうように目標を設定して達成できるように関わる大切さを学んだから」「それぞれの人が幸せにすごせるよう周りの援助者が同じ目標に向かって関わっていいと思ったから」「相手を思い考える看護でありたいので」「私（患者）の幸せを考えることがよい看護へつながる」「今までの人生の光、これからの光、望みを捨てないでその人にあった生活の手助けを行う」など様々なものがあげられた。

表1 参加者の属性

項目	内訳	人数
年代	20代	8
	30代	12
	40代	12
	50代	8
「目標志向型思考」を知っていたか	はい	16
	いいえ	22
	無回答	2

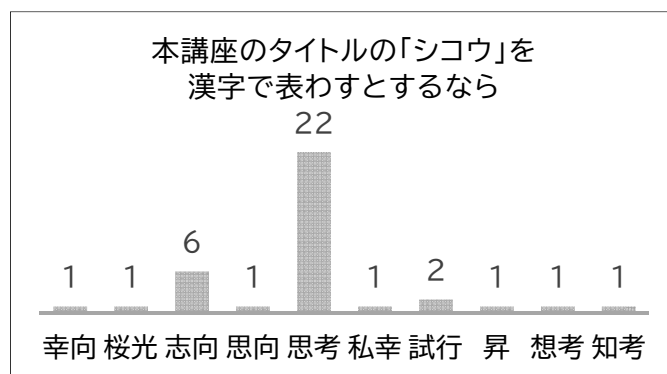


図2 参加者の反応①

「目標志向型思考」を看護に取り入れるための要点を知ることができましたか、「目標志向型思考」を理解することは高齢者看護の能力の向上につながるとと思いますかについては、「できた」「思う」の回答がそれぞれで7割以上であり、次いでは「少しできた」「少し思う」の回答で、「できなかった」「思わない」の類の回答はなかった。

表 2 参加者の反応②

「目標志向型思考」を看護に取り入れるための要点を知ることができましたか	できた	少し できた	あまり できなかった	できなかった
	31	9	0	0
「目標志向型思考」を理解することは高齢者看護の能力の向上につながるとと思いますか	思う	少し 思う	あまり 思わない	思わない
	34	6	0	0

(2) 自由記述の内容

本講座の感想を自由記載として設定した。結果、「初めて目標志向型思考について学んだが、患者さまと関わる上で新しい視点が出来た。今後の看護に活かせると思います。」「このような考えや理論もあるんだなと、とても学びになりました。」「老年看護の新たな考え方を学べた。」「高齢者を中心に考え目標達成できるように関わる大切さを学んだ。普段は“障害”や“～の低下”で計画を立案するが、“維持・向上する”ための思考を大切にしていきたいです。」「なかなか解決ができない問題に出会うことが多く、今回の目標志向型思考のとらえ方を生かし、関わっていきたいと思います。」「自分達が学生の際に学んできた老年看護とは大きく変化している。考え方も、カリキュラムも変化し指導する立場としてはもう少し学習が必要だと思った。よく理解できた。」「学生の指導をする中で、どうしても“問題”に注目してしまい、悩む事があったので今後は学生と一緒に目標志向型で考えたいと思いました。」「急性期では疾患に意識がいきがちで、患者の生活を考え退院後の姿をイメージした目標設定がなかなかできないように思います。地域包括ケアシステムといわれている中、家庭や施設での生活につなげていくことは大切なので、視点を変えていくことは大切だと思いました。」など、講座に参加したことで学びになり、今後の高齢者看護や学生指導に取り入れていきたいという感想が得られた。

<評価>

事業の開始年度にあたり、まずは講座に参加しやすい形とするため、それぞれの医療機関の状況に沿って柔軟に対応した。同一内容で合計6回の講座を開催したことにより、各自の勤務等の都合に合わせ参加しやすい形をとることができたと考える。また、受講後のアンケートでは、全員が要点を知ることができており、様々な多くの肯定的な意見から、目標志向型思考を用いた看護への理解につながる有用な活動ができたといえる。

Ⅲ. 今後の課題

事業の目的に沿った活動に向け、参加しやすくかつ確実に参加できる様式を検討する。今年度は参加者の多くが実習指導者であり、目標志向型思考を知っている割合は想定より高かったが、半数以上は知らない実情から参加者の幅をさらに広げることも課題とする。

9) 災害時における新任期保健師の公衆衛生看護活動支援事業

担当者：清水真由美、日比野直子、中北裕子、荻野妃那、梶本真理子、一尾麻美

【事業要旨】

新任期保健師に、災害時における住民支援方法について知識技術の提供を行うとともに、HUG（避難所運営ゲーム）を通じて、公衆衛生看護の実践能力の向上を目指す。

【地域貢献のポイント】

1. 新任期の保健師に災害時の活動に関する知識技術を提供することで、公衆衛生看護活動の充実につながる。
2. グループワークを通じて圏域を越えた保健師同士が交流することで、保健師ネットワークを促進することができる。

I. 活動計画

＜数值目標＞

1. 新任期保健師を対象にした研修会
2. 定員 20 名程度
3. アンケートによる研修評価

II. 活動の結果と評価

<結果>

- ## 1. 研修会の周知

三重県医療保健部の協力を得て、県統括保健師経由で県保健師・市町保健師等への研修の周知とチラシの配布を依頼した。

- ## 2. 研修会の開催

COVID-19 の感染拡大状況を鑑み、受講しやすいようオンライン（Zoom）開催へと変更した。

研修内容は以下のとおりである。

- 1) 日 時 : 令和 4 年 9 月 12 日 (月) 13 時 00 分～16 時 45 分
2) 参加者 : 20 名
3) 内 容 : (1) 講義 : 「災害時における公衆衛生看護活動」

講師：公衆衛生看護学 中北裕子

- (2) 報告：「紀伊半島大水害を振り返り今後に備える」

講師：在宅看護学 日比野直子

- (3) 演習：「HUG（避難所運営ゲーム）から学ぶ住民支援方法」

講師：在宅看護学 日比野直子

公衆衛生看護学 萩野妃那・梶本真理子・一尾麻美

- (4) 本日のまとめ 公衆衛生看護学/国際看護学 清水真由美



【チラシ】

<評価>

参加者 20 名の経験年数別内訳は、1 年目 11 名、2 年目 3 名、3 年目 2 名、4 年 3 名、5 年目 1 名であった。所属別内訳は、県 4 名、市町 16 名であった。なお、参加者 20 名のうち 3 名が本学卒業生であった。

アンケート回答者は、15 名（回収率 75%）であった。研修を受けたきっかけは、「災害活動の学び」が最も多く、続いて「自己研鑽」、「上司からの勧め」であった。研修の内容に関しては、「満足」13 名、「やや満足」2 名であり、その理由としては、『災害時の保健師活動について、具体的な活動方法がイメージできた』、『避難所を運営する上で、どのようなことを考えて動けばいいのかわかった』などがあつた。

新たな気づきについては、「あつた」が 15 名であり、具体的には、『発災後 1 ヶ月以内の通常業務には、事務仕事だけでなく幼児健診や訪問も入ってくると気づいた』、『担当地区の要援護者や避難場所など、把握できていないことが多々あることに気がついた』、『自分だけが参集する可能性もあるため、想定外のことを減らさないと対応できないと思った』などであつた。

今後の活動への有用性については、「役立つ」14 名、「やや役立つ」1 名であり、具体的には、『平時から災害の視点を持ち、計画書等の確認をして備える必要があると感じた』、『住民に関わる時も災害時の準備をしているか確認をしていくとよいと感じた』などの意見があつた。

研修時間については、「適切」13 名、「短い」1 名、「長い」1 名であり、『HUG ゲームはもっと時間をかけてできたらよかった』という意見があつた。

参加者数は目標を達成できた。内容、研修時間についての満足度は高く、保健師活動への有用性についても評価を得られた。

Ⅲ. 今後の課題

本研修により、参加者は災害対応のイメージや心構えを持つことができ、また、災害時の保健師の役割の重要性や自らが担うべき役割への認識を高めることができた。一方で、今年度は、オンラインによる研修会となったためグループワークが行えず、参加者同士の交流を十分に行うことができなかった。次年度は、対面で研修会を実施できるように準備を進め、圏域を越えた保健師のネットワークづくりを促進していきたい。



2. 県民に向けた取り組み

1) 社会的養育が必要な子どもを育てる家族の交流支援事業

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、中北裕子、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、地域の関係団体等と協力・連携して、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供し、同じ状況の親・家族同士の仲間づくりを支援する事業である。

【地域貢献のポイント】

地域の関係団体等と協力・連携して、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供し、同じ状況の親・家族同士の仲間づくりを支援する。この支援を通して、親や家族の養育に関する悩みの軽減、社会的養育のもとで暮らす子ども達にとっての健やかな育ちの場の支援に貢献する。

【昨年度からの課題】

COVID-19 の感染予防対策を徹底しながら、小規模な交流会やリモート交流会などの新たな方法を検討し、社会的養育が必要な子どもを育てる親や家族同士が交流出来る機会を提供して、仲間づくりを支援できるように努めること。

I. 活動計画（3年計画の2年目）

1. 数値目標

- 1) 福祉、関係機関・団体から協力・連携希望：1件以上
- 2) 親や家族の交流会の開催支援回数と参加人数：1回以上、参加人数延べ5人以上
- 3) 参加者のアンケート満足度（5件法）：4以上

2. 実施計画

1) 事業実施のための広報

社会的養育のもとで暮らす子どもの親や家族に関係する団体と連携しながら、参加者のニーズの把握と広報を行う。

2) 事業の実施

連携団体と連携して、親・家族の交流会（相談会）を企画、実施・運営を行う。事業評価のためのアンケートを実施し、参加者の満足度、意見や要望等について評価する。

3) 事業の反省会の実施

連携・協力団体との反省会を実施し、課題の検討を行う。

II. 活動の結果と評価

1. 結果

1) 打ち合わせ

COVID-19 の感染予防のために、電話及びメールで4回の打ち合わせを実施した。

2) 交流会開催

日 時：令和 4 年 10 月 18 日(火)9：00～13：00

場 所：A 氏宅（交流会開催時間前に連携団体代表の B 氏宅で当日の打ち合わせを行った）

参加者：5 名（養育里親 1 名：男性、専門里親 1 名：女性、養子縁組里親 1 名：男性、ファミリールーム 1 名：女性、教員 1 名）

3) アンケート結果

(1) 交流会の方法、日時、会場、進行についての満足度

全員が「満足」と回答していた。「落ち着いて話ができるお部屋、人数もちょうどよかった」という意見があった。

(2) 交流会の内容についての満足度

3 名が満足であったと回答した。1 名が「やや満足」と回答しており、その理由は「もう少し時間があれば、発言の少なかった参加者の方々の意見もききたかった」であった。

(3) 交流会に参加してよかったこと、解消されたこと、得られたこと

「特別養子縁組の一部しか知らなかったの、リアルな実生活の部分を聞かせていただいて、とても勉強になった」、「参加者の本音の声が聞けて、肩の力を抜くことができました。リフレッシュすることができ、力をもらいました」、「他の方の思い、考えを聞いたのが良かったです」という意見があった。

(4) 改善点、今後への意見

「人数が増える場合は事前に質問内容をまとめてもらえると、同じ質問で色々な人の意見が聞けていいのではないかと思います」、「里親家庭での困難な話、困ったことなど、もっといろいろな人のお話が聞きたいです」、「次回企画するのなら、時間を長めに取りたいです」という意見があった。

4) 連携団体との次年度に向けての打ち合わせ

次年度に向けて連携団体の関係者と 2 回打ち合わせを行った。

1 回は連携団体のイベントに参加していた里親 9 名と次年度に向けての要望について意見交換を行った。意見交換では、三重県内の家族が交流できる機会が少ないため、イベントや交流会の機会を増やしたい。また、親同士がゆっくり話し合えるためにも、幼い子どもと遊んだり、見守ってくれるサポートがあると有り難いなどの要望があった。

2 回目は連携団体代表者 2 名と次年度の年間行事で予定されているイベント内容の確認を行った。

2. 評価

里親会の連携・協力があり、交流会を 1 回開催することができた。

交流会の開催にあたって先方からは、自宅であること（限られたスペースに他の家族も加わる）、子どもが居る可能性があること、感染防止の観点等から、参加者を中心にした少人数の雰囲気での交流をしいたいため、大学教員は 1～2 名にお願いしたいとの希望があった。コロナ禍が続く中、大規模の企画は難しく、今回の開催は少人数であったが、参加者の満足度は高く、目標を達成することができた。

また、連携団体と次年度の計画について打ち合わせを 2 回行えたことで、次年度に向

けての課題の確認が行えたと考える。

Ⅲ．今後の課題

参加者は、少人数であったからこそ落ち着いて話ができたと評価していた。一方、他の方の意見を聞きたいという思いがあり、参加者が増えることを期待しているのだと推測される。両者の利点を活かせることができる人数調整と開催場所の選定が課題であると考えられる。

また、次年度に向けての要望などから、連携団体が開催しているイベント等を活用した交流会開催の検討や学生ボランティアの参加を促せるようなスタッフ確保に向けての広報の工夫が必要である。

2) みかん大 暮らしの保健室

担当者：平生祐一郎、六角僚子、犬飼さゆり、荒木学、橋本千愛、長谷川明子、篠原真咲

【事業要旨】

みかん大暮らしの保健室は、今年度で最終年度を迎えた。保健室では、①健康チェック（血圧・貧血・握力など）、②看護職による健康相談、③在宅医療の情報提供、④多世代交流、⑤安心できる居場所づくりなどを行っている。参加費は100円で様々な健康チェックができるほか、希望者にはアロマハンドマッサージやフットケアも行っている。

【地域貢献のポイント】

地域の方が自己の健康に関心をもち、健康づくりに取り組むことができる。また、地域コミュニティの形成を促し、独居高齢者の見守りや寝たきり予防などに貢献する。さらに学部生や院生の教育の場になっており、医療人材の育成という側面もある。

【昨年度からの課題】

健康機器の点検や修理が必要になった場合、その金額が高額になることがあることから、今年度から参加費を徴収するようになった。徴収により来所者が減少する可能性もあるため、引き続き広報などで事業の周知を継続する。また、参加費が来所者の負担にならないよう適正な金額を設定する必要がある。

I. 活動計画

＜重点課題＞

様々な世代が気軽に集えるような居場所を提供する。学生もボランティアとして参加してもらい、看護職に必要なコミュニケーションや多職種連携における能力を養う。

＜実施計画＞

1. 昨年度からの変更

・参加費の徴収について

来所者から参加費100円、アロマハンドマッサージ費200円、フットケア費200円を徴収することにした。（アロマハンドマッサージおよびフットケアは希望者のみ）

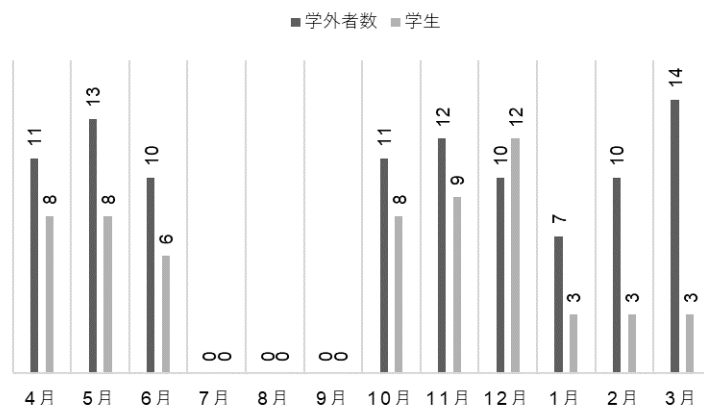
・多機関との連携強化

三重県栄養士、三重県津警察署、公衆衛生学院と連携をはかり、低栄養改善や交通安全、歯科保健に関する講話を企画した。しかし、新型コロナウイルスの影響により公衆衛生看護学院との企画は中止となった。

Ⅱ．活動の結果と評価

< 結果 >

1．参加者の状況



※ 7月～9月は新型コロナウイルスの感染防止により中止した。

2．多機関との連携

1) 各機関の実施内容

5月	三重県栄養士会	高齢者の栄養改善
7月	三重県公衆衛生学院	中止
9月	三重県津警察署	高齢者の交通安全
2月	本学の荒木先生	高齢者のメンタルヘルス

2) 三重県津警察署による交通安全教育



< 評価 >

保健室は地域に根付いてきており、月 10 名以上が参加している。学生も住民の健康チェックやフットケアにたずさわり、学生の看護スキルの向上や地域を看る力も養われている。住民からは「相談できて安心した」、「不調に気づき受診できた」など、健康を考えるきっかけや行動変容につながっている。そして、多機関との連携を強化したことで、地域ケアシステム構築の一助になったと考える。また、参加費等の価格は住民から納得が得られた。

Ⅲ．今後の課題

保健室の運営や効果を研究ベースで検討し、さらにより事業に発展させていきたい。

3) Re-mamma Café (リマンマ カフェ)

担当者： 大川明子、山本奈津美

【事業要旨】

乳がんの治療に伴い乳房切除術をおこなった患者の乳房パットを作成する。参加者は患者さんを含めて誰でも参加でき、ご自身の胸の大きさに合わせたオーダーメイドの乳房パッドを参加者ご自身で作成する。素材はダブルガーゼで、中身は樹脂ビーズを使用し、肌ざわりや汗も吸い取り、洗濯も可能で、乾燥性も抜群である。講師は乳房切除術を体験した人であり、病気の語り合いもおこなっている。

【地域貢献のポイント】

医療施設以外でも乳がん患者のケアができること、生活している地域だからできるケアを考え、患者の日常生活の活性化につなげていく。また、患者同士が語り合い、がんとともに生きる場の提供ともなる。

I. 活動計画

< 数値目標 >

5名の参加者を目標とする。

< 実施計画 >

乳房パットを作成する。

作成しながら病気のことなどを話し合える場作りとする。また参加者の要望を聞く。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 本事業の周知

治療施設（四日市市立病院、三重県立総合医療センター、鈴鹿中央総合病院、鈴鹿回生病院、松阪市民病院、松阪中央病院、三重中央病院、伊勢赤十字病院）に右図のチラシを配布した。

2. 乳房パットづくりの実施




令和4年11月1日に講師の坂田良子、中井礼子に加え、長谷川実佳の参加を得、担当の大川、山本（以上、敬称略）で実施したが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、一般参加者の申し込みがなかった。しかし、講師の指導のもとに乳房パットを作成した。また、当日三重タイムズの取材を受け、後日本事業の内容が掲載された。この記事を見た市民の方から問合せがあり、乳房パットづくりを紹介することもできた。

Re-mamma Café (リマンマ カフェ)

体験者と一緒に、自分に合った快適な乳房パッドを、楽しく作りませんか？

- ご自分の胸の大きさに合わせて簡単に作れます。
- 洗濯が可能で、すぐに乾きます。
- 中身に樹脂ビーズを使うので、重みもあります。
- お手持ちのフルカップブラに、直接入れる事ができます。
- ガーゼ・タオルが汗を吸い取ります。
- 術後間もない方から、再建ご予定の方にも快適です。

開催日時：令和4年11月1日（火）13:00 - 16:00
応募締切：令和4年10月25日（火）
開催場所：三重県立看護大学 研究棟1階 中会議室
参加費：2,000円（含 材料費、お茶菓子代）
申込先：下記メール か QRコードからお申込み下さい。
（先着5名）natsumi.yamamoto@mcn.ac.jp
三重県立看護大学 山本 奈津美
開催当日、申込者はマスク着用でご参加下さい。
また、体温37.5度以上の申込者は参加できません。
感染状況により、中止となる場合があります。申込者は県立看護大学のホームページ等でご確認の上、ご参加下さい。



< 評価 >

参加者は罹患して間もない状況であり、情報を求め参加したと述べていたことから、本事業が情報交換の場になるとも考えられる。また、この三重タイムズの取材を受け、記事を見た人から問い合わせがあった事もあり、本事業の有意性を示せたと考える。ただ、後日の問い合わせがあったことから、一般の方への周知の再考も必要である。

Ⅲ. 今後の課題

COVID-19 感染の状況に合わせ本事業の開催を実施していく。

来年度は COVID-19 感染が収束して実施できることを願う。

(写真は三重タイムズの掲載記事、令和4年12月2日号。写真前列は左から坂田、中井、後列は同長谷川、大川、山本。)

**乳がん患者のための補正パッド
通気性良いダブルガーゼ
県立看護大学で手作り講習会**



三重県立看護大学の
大川明子教授は11月1日
(火)、津市夢が丘の同大
学研究棟で、乳がん患者の
手術後に胸部に使う補正パ
ッドを手作りする講習会「R
emedia Cafe (リメディア
カフェ)」を開いた。

講師は乳房の全摘手術を
受けた経験を持ち、同じ経
験をした女性のために役に
立つ、快適な商品の販売や

乳房パットつ
くり講習会
を全国で行
う「ラフリー
(La La Free
)」の坂田
良子さん。

講習会で製
作するパッド
は通気性を良
くするため、
ダブルガーゼ生地を使い、樹
脂ビーズや綿を入れる。「市
販のシリコン製パッドは高価
なものも多く、夏場に蒸れ
てあせもができてしまうケ
ースもあるという。ダブルガ
ーゼなので汗を吸ってくれる
し、簡単に洗濯出来てす
ぐに乾きます。脇の所も自
然にふくらみが出るようにな
りますし、樹脂ビーズで
ある程度重みもありますか

ら、下着の中で安定するん
です」と話す。

全て手縫い。なみ縫いが
出来たらだれでも簡単に作
れ、1度作ったら3・4年は
使える。また1度覚えたら
次は簡単に作れるという。

何よりも、同じ病気で悩
む仲間と情報交換や悩み相
談ができる。参加者は「肌
さわりの良い、自分で作
たもので愛着も沸きます」
と話した。

企画した大川教授は「乳
がん手術後のボディイメージ
の変化は、患者の心に与え
る影響がとても大きい。当
事者でないと気づかない。パ
ッド作りながら悩み相談や
辛いことなども話せるとい
う環境は良いと思います。
こうした会を今後も開きた
い」と話した。

4) みかん大健康バドミントン教室（中級編）

担当者： 大西範和、西山修平

【事業要旨】

スポーツは行っていて楽しいことが大きな価値である。バドミントンで良いプレーをするためには、スピードやスタミナはもとより、技術や戦術を身につけることが大切で、そのレベルが高い方が楽しみも深まる。しかし、技術や戦術はただやっているだけでは身につくのに時間がかかり、中級者から抜け出て上級者に至る以前に楽しさが感じられなくなり、止めてしまう人も少なくない。当事業では、ある程度上達したものの、その先なかなかレベルアップしないと感じているプレーヤーを対象に、技術練習やゲームをともにしながらアドバイスし、参加者が技術や戦術の向上やそのきっかけを掴み、上達の可能性を楽しく追及し続けられるよう支援することを目指す。また、バドミントンをプレーすることで、体力の維持・増進を促し、ストレスの解消や健康意識の向上を図る。

【地域貢献のポイント】

スポーツは、中級以上のレベルになると、さらなる上達を図っても始めた頃より目に見える成果が出にくくなり、動機づけが低下しやすい。このことは、スポーツ活動の中止や中断に繋がり、運動不足の状態に陥るリスク要因となり得る。当事業では、生涯にわたりバドミントンが楽しめるよう、中級レベルのバドミントン愛好者の技術や戦術の向上を図る。これにより、運動習慣の維持を促し、体力や健康の維持増進に貢献する。

【昨年度からの課題】

感染症拡大防止のため、実施できていなかった。

I. 活動計画

＜重点課題＞

バドミントン教室を1回実施する。

＜実施計画＞

地域の中級レベルのバドミントン愛好者（最大20名）を対象に、本学体育館において、1回2時間のバドミントン教室を実施する。教室では、ゲームを楽しみながら、ラケットワークやフットワークなど基本技術の確認や陣形をはじめとするゲーム中の戦術の展開などについて、レベルに応じて紹介する。また、近隣の高等学校などの部活動を招き、レベルに応じて参加者の課題解決などに貢献できるよう助言などを行う。以上の手段によりバドミントンの技術・戦術を楽しく身につけるとともに、生涯にわたりスポーツや運動に慣れ親しんでもらえるよう意識の醸成を図る。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 日程・場所

教室は令和 5 年 3 月 2 日（木）及び 3 月 9 日（木）13 時から 15 時に、三重県立看護大学体育館にて実施した。

2. 参加者

参加者は、近隣の中学生から 70 歳代までの方々であった。3 月 2 日（木）には 5 名、3 月 9 日（木）には 12 名の参加であった。参加者のほとんどが、平成 21 年度から 25 年度まで実施していた「みかん大健康バドミントン教室」の参加者であり、その時に始めて今も続けておられる方もいらっしゃった。

3. 内容

教室では、準備運動の後、レベルに応じてアドバイスや技術練習を交え、ペアを組み替えながらダブルスのゲームを行った。参加者は、自分の課題としているポイントについて積極的に助言を求めるなど上達したいという意欲にあふれ、スタッフや参加者同士の関係も良好で、とても良い雰囲気プレーを楽しむことができた。過去の「みかん大健康バドミントン教室」がきっかけとなってバドミントンを始められた参加者の方々には、かなりの上達が認められ、楽しむことや健康づくりにも役立てて頂いていると推察でき、主催者としても大きな喜びとなった。

<評価>

令和 3 年度は、開催することができなかったが、令和 4 年度は、回数は少ないものの、開催に漕ぎ着け目標を達成した。実施したアンケート（8 名より回答）では、回答者全員が「楽しかった」とし、満足度は高かったと評価される。また、回答者全員が「上達に役に立つと思う」とするとともに、感想の中に「プレー後すぐに先生から教えていただけるので、とても分かりやすいです。自分がすぐにポジションを下がってしまうクセがよくわかりました。ありがとうございました。」など、助言等が役立っていることを示す記述もあり、技術の向上にも有用であったと評価できる。

Ⅲ. 今後の課題

令和 5 年度は、教室の開催回数を増やすとともに、学校や他の組織と協調するなど活動の幅を広げ、バドミントンの楽しみや技術の向上を体験する機会を増やしたい。



図. みかん大健康バドミントン教室（中級編）の様子

5) 手洗いチェックしてみませんか？

担当者：上杉佑也、菅原啓太、岡根利津、竹村和誠、西山修平、多久和有加、山本奈津美、橋本千愛

【事業要旨】

新型コロナウイルス感染症の蔓延が問題となる中、感染予防行動への意識が高まり、その重要性も増している現状にある。本事業は地域のイベント・地域住民の交流の場等で、感染予防行動に関する説明や体験を通して、地域住民の健康意識の向上に貢献するものである。

【地域貢献のポイント】

- ・ 本学の教員の専門性の活用
- ・ 本学所有の機材の有効活用
- ・ 本学の地域貢献活動への広報的効果
- ・ 地域住民の健康意識向上への寄与

I. 活動計画

1. 地域のイベント等での事業実施：1回
2. 事業参加者：5名以上
3. 学生ボランティア：2名以上

II. 活動の結果と評価

<結果及び評価>

事業実施にむけて会議を行い、実施時に配布するリーフレットの作成、アンケートの作成、実施者の役割について検討してきた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の全国的な蔓延状況を鑑み、事業実施日の状況の予測がつかないことから、事業参加者の安全確保を優先して今年度の事業実施を断念した。そのため、掲げていた事業目標を達成することはできなかった。

III. 今後の課題

地域住民を招いて手洗いを実際に行うという事業の性質上、参加者の安全を確保することが必要なため、新型コロナウイルス感染症蔓延状況の見通しがつかない中で事業の実施・広報をすることが難しかった。次年度の実施に向けて、社会福祉法人と実施の調整を行っているが、引き続き開催が難しい状況に陥ることも考えられる。状況により、学内関係者を対象とした事業展開も視野に入れながら、安全を念頭に置いた日程や開催方法を検討していく。

6) 医療的ケア児と家族のピアネット支援

担当者：上杉佑也、宮崎つた子、中北裕子

【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子どもを養育している家族は、家族で過ごせる喜びを感じる一方で、心身ともに疲弊している現状にもある。同様の体験を持つ家族との交流が不安や孤立感解消に繋がるといわれているが、そのような機会は少ない現状にある。本事業はピア・サポートの観点で多職種が協働して家族会を支援する事業である。

【地域貢献のポイント】

地域の医療機関・専門職との連携及び本学の専門性（研究成果の還元を含む）を活用しながら、家族同士の交流を求めるという養育者のニーズへ対応する。すなわち、ピア・カウンセリング、ピア・エデュケーション効果のあるピア・サポートの場として、家族会の開催によるネットワークづくりを支援することで、参加者の困難感の軽減、新たな知見の発掘に寄与する。

I. 活動計画

1. 家族会の開催あるいは開催支援：1回以上
2. アンケート結果の参加者満足度（4件法）：平均3以上
3. 事業参加者：5名以上
4. 学生ボランティア：1名以上

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 家族会

1) 概要

(1) 開催経緯

三重県重症ケア家族会「SMILE」の代表より支援要請があり、家族会開催を支援した。

(2) 日時

令和4年10月23日（日）10:00～12:00

(3) 場所

三重大学山翠ホール

(4) 参加者・関係者

①サポーター（計8名）

本学教員2名、看護師3名、特別支援学校教員3名

②参加者（計21名）

保護者等10名（うち1名はオンラインでの参加）、医療的ケア児8名、医療的ケア児のきょうだい等4名

③学生ボランティア

4年生 8名

2) 内容について

自己紹介を行った後、屋内プラネタリウムを親子で楽しんだり、ワークショップで工作を楽しんだ。

3) アンケート結果

回答者は5名であった。

(1) 交流会に参加して

『すごく楽しかった』『楽しかった』合わせて100%であった。

(2) 感染対策について

『しっかり出来ていた』4名、『普通』1名であった。

(3) 参加者の声として、以下のような意見があった。

プラネタリウムについて

- ・ 息子がじっと見つめていた姿を見てとても嬉しかった
- ・ 色々経験させてあげたいと思っているので嬉しかった

ワークショップについて

- ・ 大人も子どもも楽しめるワークショップだった
- ・ 細かい作業で子どもたちが主体となって参加することができなかったように思う

家族会に参加して

- ・ 詳しい自己紹介や子どもたち、親御さんと交流できる時間があれば嬉しかったです。
- ・ スタッフの皆さん気さくで色々話かけていただいたり、荷物持ってくれたり助かりました！
- ・ あっという間の時間だったので、物足りなかった気もします(笑)知り合いがいなかった為、まわりともあまり話せずでした。でも、役員の皆さんが気を遣ってくださったり話しかけてくれたのでありがたかったです。

2. 家族会の役員会

1) 概要

(1) 日時、方法

令和4年12月11日(日)11時30～14時00分

於：鳥羽市

(2) 参加者について

三重県重症ケア家族会 SMILE 役員 4名

本学教員 2名

2) 経緯・内容について

三重県重症ケア家族会を立ち上げたが、コロナ禍ということもあり、各支部の役員と対面で会うこともないという現状にあった。三重県重症ケア家族会「SMILE」の代表の要請により、各役員が一堂に会する場のセッティングと今後の家族会の会場の下見・内容について相談を行った。

3) アンケート結果

回答者は4名であった。

(1) 本日の内容について

『満足した』が100%であった。

(3) 参加者の声として、以下のような意見があった。

- ・ 今までLINEのトークや、zoomで役員の交流や会議をしてましたが、実際に会って交流できることで話がスムーズに進んで、どんどん話題もあがってきました。文章にするとなかなか伝わりにくいことも、直接話せることで詳しく伝えることが出来ます。zoomだと一方的になってしまうことが多いので、実際に会えるとこんなにも違うのかと実感しました。
- ・ 素敵な会を準備いただいて、とても嬉しかったです。直接お会いして話すことの大事さが身に染みてわかりました。ZOOMでも顔を見て話せますが、リアルに集まると、気持ちが全然違います。安心感というか、同じ境遇の方を近くに感じることで、救われるというか。私たちだけでこの思いを止めておくのはもったいないな、と改めて思いました。今までもこのメンバーでLINEなどでやり取りをしてきましたが、知らないことがたくさんすぎて、時間が足りませんでした。みなさんの頑張りが、今日からの活力になります。
- ・ 時間があっても全然足りないなと感じました。家族間同士の交流をもっとたくさんして、それがピアサポートに繋がるようになってほしいなと思います。

<評価>

目標値についてはすべて達成することができた。開催した家族会のアンケート結果及び参加者の肯定的な声からも家族会の参加者の評価は高く、日ごろ交流の難しい同じ境遇の家族同士がもつニーズを満たすことができたと評価できる。COVID-19が比較的落ち着いた時期の開催もあり、昨年断念した本学の学生も参加することができ、机上の学習や実習でも関わりの少ない医療的ケアを要する子どもと家族に触れる機会となったと考える。

Ⅲ. 今後の課題

子育てとケアの両側面、あるいは仕事等も抱える養育者が主体的に家族会を運営していくことは難しい部分もある。引き続き、家族会団体との連携あるいは支援団体との協力を密にしながら、参加者のニーズを満たすことができるよう家族の交流を支援していきたい。

7) 対話による探Qカフェ

担当者： 安部彰、浦野茂、鈴木聡美、関根由紀、林辰弥、森下直紀

【事業要旨】

現代では人々のライフスタイルや価値観の多様化にともない共生をめぐる問い——のぞましい共生のありかたをめぐる問い——は、容易に共通解を導きだせない難問となりつつある。しかし現況がそうだからこそ、むしろその問いはかつてないほどの重みをもちはじめているともみなしうる。そして後者の視点に立つならば、我々は共同探求の方法としての対話、それもできればバックグラウンドを違える人々がお互いにその異なりを尊重しつつ織りなす多声的な対話をつうじて、かかる難問を敢然と探求すべきだろう。そのような対話を経ることにより我々は、答えにはいたらずとも、探求前よりも諸問題の構造や奥行きをより鮮明に理解できるようになるはずだから。

【地域貢献のポイント】

このかん、たしかに医療・看護職のフィールドは病院から地域社会へとひろがっている。しかしこうした活動のフィールドの拡張は必ずしもコミュニケーションの豊饒化を意味しない。そこにおけるコミュニケーションが「医師・看護師と患者」あるいは「多職種間」という閉じた役割関係のもとでのそれであり続けるかぎりには。したがって、やはりコミュニティには、人々がそれぞれの役割や立場をこえて忌憚なく発しあう多様な意見が交流する場が不可欠である。そして近年、哲学カフェがそうした対話の場として全国にひろがりつつあるなかで、本事業はささやかではあるが三重県におけるそのような場となりゆくことで、地域貢献に資することができればとかがえている。

【昨年度からの課題】

昨年度は新型コロナウイルス感染症の防止のため仕方なくではあるが、事業参加への対外向けの募集を大幅に自粛するとともに、実施会場も学内へと変更した。それにより、参加者の数とともに属性も限定されることになったが、今年度はより多くの多様な人々の参加がみこめるように広報と実施の方法を工夫したい。

I. 活動計画

数値目標：年1回の開催。参加人数10名。

Ⅱ．活動の結果と評価

1． 開催情報

- 1) 日時：2023 年 3 月 7 日（火）18 時 30 分～20 時
- 2) 場所：アストプラザ 4 階・橋北公民館和室
- 3) 参加人数：7 名（本学教職員・一般）

2． 活動の結果

今回の哲学対話のテーマは「経験」である。私たちはふだんから「経験から学ぶ」「経験を共有する」「経験を伝える」などと口にするが、そではそこではいったいなにが学ばれたり、共有されたり、伝えられたりしているのだろうか？ この問いがあらためて問うに値するのは、ひとつには伝える側の「経験」と伝えられる側の「経験」はやはり同一ではないからだ。このように、そもそも経験は徹頭徹尾プライベートなものでしかない。にもかかわらず、たとえば「経験を共有しよう」と私があなたにいうとき、それは、理解できないからこそ理解したい、つながれないからこそつながりたい、という切なるおもいに根ざした呼びかけであるのかもしれない。

当日は以上のようなやりとりをふくめ、実りある対話がさまざまに展開された。

3． 活動の評価

哲学対話のエッセンス（意義）は、共同探求と自己表現を同時に達成できる点にある。その点では本事業の成果はけっして少なくはなかったと評価できる。ただ惜しむらくは、もっと多くの参加者間で対話ができなかったことである。我々の思考は、異なる意見との邂逅により、真の意味で喚起される。異なる意見は、自らの意見にたいする問いかけとして感受され、それに応答するために私たちは真摯にかんがえはじめるからである。したがって本学関係者以外の方々がもっとたくさん参加してくださっていたなら、探求的な思考はさらに深まったことだろう。

Ⅲ．今後の課題

最終年度となるため記載なし。

8) みかん大バリスタ for 認知症カフェ

担当者： 大西範和、犬飼さゆり、清水律子、ドライデンいつみ、鈴木聡美、菅原啓太、
長谷川明子

【事業要旨】

認知症になると、当事者はもとより家族や介護者が抱える強いストレスは継続的で、軽減する機会がほとんどないといえる。認知症カフェは、集い話す場であり、ストレスや緊張の緩和に有益であるとして注目されている。本学は、令和2年度まで4年間認定看護師教育課程（認知症看護）を設置し、県内に認定看護師（認知症看護）を多数輩出している。修了生は、所属機関においての活躍が期待されており、中には、所属する医療機関などで認知症カフェを企画する試みもなされている。一方、コーヒーは神経や筋肉に作用して心身の回復を促進するといわれ、健康効果が高いといわれている。こころのリラックスにも効果があるとされることから、認知症カフェにおけるコーヒーの役割は単なる飲み物という以上の価値があるといえる。当事業では、認定看護師教育課程修了生が行う認知症カフェに共催し、豆から抽出した本格的なコーヒーをその場で提供することによりその開催を支援する。

【地域貢献のポイント】

認知症の当事者・家族や介護者の日常的なストレスの緩和に寄与しながら、認定看護師教育課程（認知症看護）の修了生の活動を支援できる。また、本学の専門性を活かした情報提供等の取り組みにより、来場者の生活の質向上に貢献できる。認定看護師教育課程の修了生、本学の教員やボランティアとして参加する学生の交流が深まることや、学生が認知症カフェを体験できることで、三重県の看護の将来的な質向上に貢献できる。

I. 活動計画

＜重点課題＞令和2年度までに地域交流センター教員提案事業「みかん大認知症カフェ」で共催した外部機関が、令和4年度に認知症カフェの事業を再開する場合にそれを支援する。

＜実施計画＞令和2年度までに地域交流センター教員提案事業「みかん大認知症カフェ」で共催したイベントは、本学夢緑祭、鈴鹿中央総合病院（鈴カフェ）と榊原温泉病院（ぬくぬくカフェ）、志摩市認知症・障がい福祉啓発事業「しまこさん福福（ふくふく）まつり」および「第11回全国若年認知症フォーラム in 三重 四日市」における若年性認知症カフェであった。当事業では、これらの主催団体から引き続き要請があれば、実施団体と協力してカフェの運営を支援する計画である。カフェでは、認定看護師教育課程の修了生の企画者が参加者と十分に交流できるよう、コーヒーの提供を担当し、挽いたコーヒー豆をドリップする方式で本格的な味と香りを楽しんで頂き、円滑なコミュニケーションを図ることができるよう支援する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

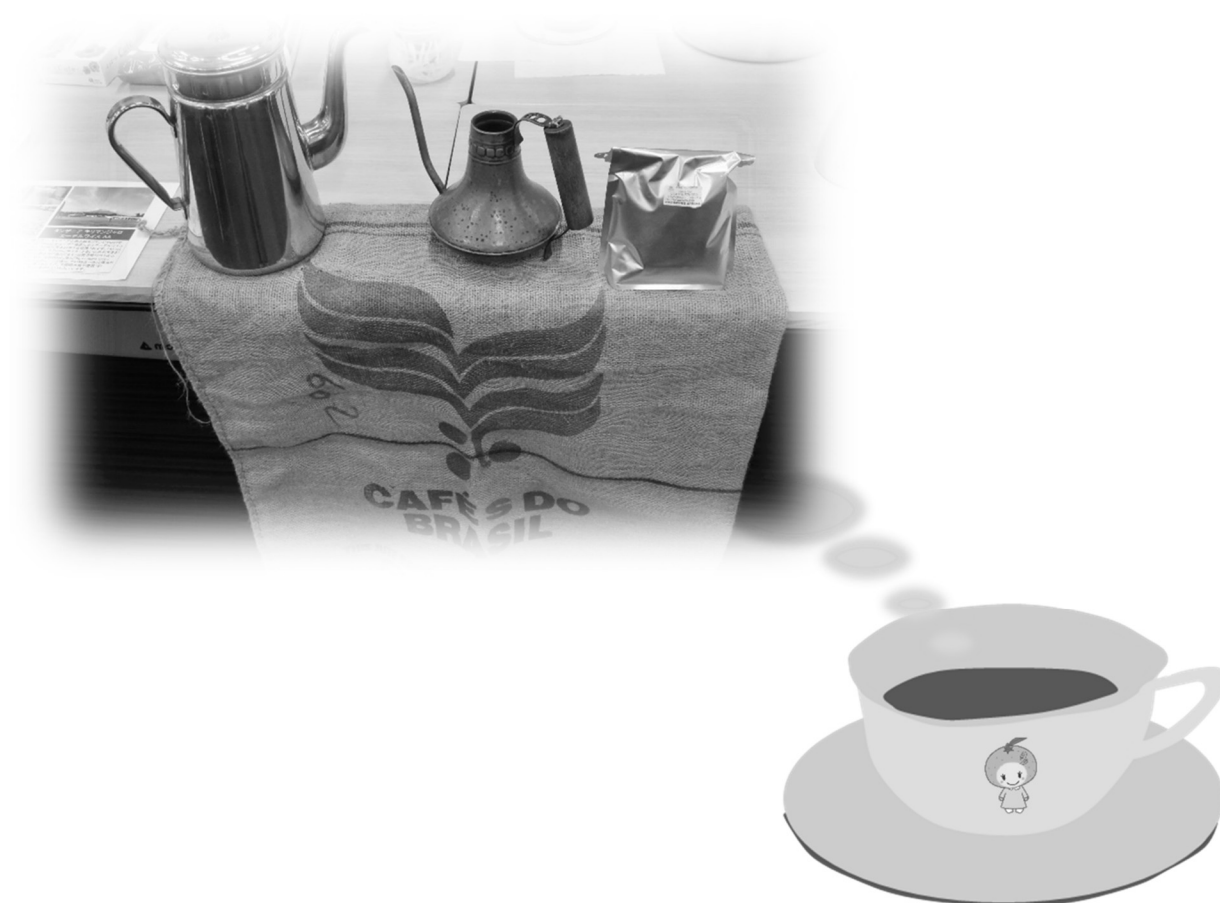
令和3年度に続き、令和4年度も要請があれば対応できるよう準備を整えていたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、令和2年度までに共催した病院や団体からの引き続きや新規の要請がなく、認知症カフェは実施できなかった。

<評価>

当事業は、令和3年度から病院などの要請に応じて実施できるように準備を整えていた。年度当初から、夢緑祭や、病院などがカフェを開催することが難しいことは想定していたが、開催される可能性もあることから、その際には支援できるよう受け皿を準備していた形である。しかし、令和4年度に認知症カフェ開催支援の要請はなかった。当報告書の作成時点では、新型コロナウイルスへの感染者が減少しており、日常生活においては対策が緩和される方向にあり、マスクなしの生活や飲食が可能となる日常も十分に想定できる状況にある。しかし、医療機関においては依然として高いレベルで感染対策を講じており、そこに赴いて飲み物を提供する形の事業は受け入れられるとは考えにくく、当面地域貢献の手段としては実際的ではないと推察された。

Ⅲ．今後の課題

認知症カフェは、認知症当事者、家族や介助者にとっては、数少ない憩いの場であると考えられ、何らかの形でそのような場を支援することは本学の地域貢献として意義がある。当事業の最終年度となる令和5年度も、感染の状況を見ながら、引き続き要望に応じて開催する準備を継続する。



9) みかん大 もの忘れ相談

担当者：六角僚子、小池敦

【事業要旨】

もの忘れなど認知症発症の不安などを抱えている本人とその家族の悩みを少しでも解消し、関連機関と連携を図る。

【地域貢献のポイント】

もの忘れなどの認知症の症状に不安を抱く地域の方々の悩みを傾聴し、対応方法や関連機関の紹介などが行え、地域連携が図れることが重要であると考える。

【昨年度からの課題】

相談開催日時やオンライン相談のあり方を考えること、であった。

I. 活動計画

＜重点課題＞月一回の相談開催とし、相談件数は一回あたり2件とする。

＜実施計画＞

以下のようなスケジュールで実施計画した。

毎月暮らしの保健室開催日 10時から12時 予約制一人30分の相談とした。

また実施計画に当たり、必要なもの忘れスケールアプリやカルテ用紙等を準備した。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

2022年8月に1名予約が入ったが、コロナ拡大のため相談を中止とした。予約者については、本人・家族に中止連絡と了承のうえで最寄りの地域包括支援センターでの相談を勧めた。

＜評価＞

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、8月、9月と開催が中止となり、今回の結果に至った。今後地域住民との相談方法について、オンラインを含めて工夫を図ることが重要であると考える。

III. 今後の課題

対面での相談実施が難しい事態への対応として、オンライン相談などのあり方を検討していく。

10) 子どもたちに「たいせつなからだ」を伝えるプロジェクト

担当者： 長谷川明子、宮崎つた子、西山修平

【事業要旨】

本事業は、地域の教育・福祉機関と協力・連携して創り上げるプロジェクトである。小学校入学前の好奇心の強い子どもたちを対象に、「自分のからだを知り、大切にする、そしてお友達も大切にする」事を伝える活動と「からだ先生」の人材育成を行う事業である。

【地域貢献のポイント】

1. 地域のニーズへの対応
2. 本学の専門性の活用
3. 本学の地域貢献活動への広報的効果
4. 地域、教育・福祉機関で子どもの健康教育に取り組む意識の醸成
5. 子どもの自己肯定感の向上に寄与
6. いじめや虐待防止に貢献

I. 活動計画

1. 数値目標

- 1) 教育・福祉機関、市町（行政）などの団体から連携希望：1件以上
- 2) 連携団体との打ち合わせ会議：5回程度
- 3) 幼児教育現場での「たいせつなからだ」を伝える事業の実施：3回以上

2. 実施計画

（1）幼児への教育活動

- ①教育・福祉の協力・連携機関への広報・募集
- ②依頼機関からの希望に応じて企画内容の検討
- ③実施可能な取り組み内容の企画・運営等の打ち合わせ
- ④事業開催に関する準備、当日までのリハーサル・サポートの実施
- ⑤子ども達に「自分のからだ」を伝える事業の実施
- ⑥事業担当者と連携団体との合同反省会の実施

（2）からだ先生の人材育成

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 幼児への教育活動

初年度となる今年度は、県内のNPO団体（以下A団体）から連携希望があり、Aの活動を支援するかたちで、協同してプログラムを実施した。A団体は、子どもと保護者が交流活動を行っている団体であり、昨年度の教員提案事業「子どもたちに『自分のから

だ』を伝える事業」の連携先である。

1) 方法

全5回のプログラムについて、毎回①～⑥のプロセスで実施し、最終回終了後には、⑦～⑧を実施した。

- ①企画・活動案の作成
- ②使用教材と役割の決定
- ③学内リハーサル
- ④プログラムの実施
- ⑤親・A団体スタッフアンケート実施
- ⑥反省会実施
- ⑦全体を通しての振り返り会(参加者と)
- ⑧最終反省会

2) 参加者

(1) 対象者

資料1のチラシにより、A団体より広報し、19組21名(親9名・子12名)より応募があり、年少から小1までの子どもとその保護者が参加した。

5回のプログラムの参加延べ人数は、親39名、子48名の合計87名であった。

(2) スタッフの参加人数

打ち合わせや演習準備、当日の事業に、Aのスタッフは、延べ47名参加した。

3) 活動の実施

全5回のプログラムは、①導入(手遊び)②紙芝居(「NPO法人『からだフシギ』」の開発教材)③ワーク④からだのぬりえで構成した。①の導入の手遊びは、テーマに関連する内容の手遊び、②の紙芝居は読み聞かせを、A団体のスタッフにより行った。③のワークは大学教員が担当し、紙芝居の内容の理解を深めるため、様々な教材を活用して体験して学ぶ機会を設けた。教材は、A団体のスタッフや大学教員が制作したものと既製品を使用した。④は、テーマを反映した自作のぬりえを配布し、ワーク後に子どもたちが取り組んだ。

全5回の各プログラムの具体的な内容は、表1のとおりである。

4) 反省会・全体を通しての振り返り会、事後アンケートの実施

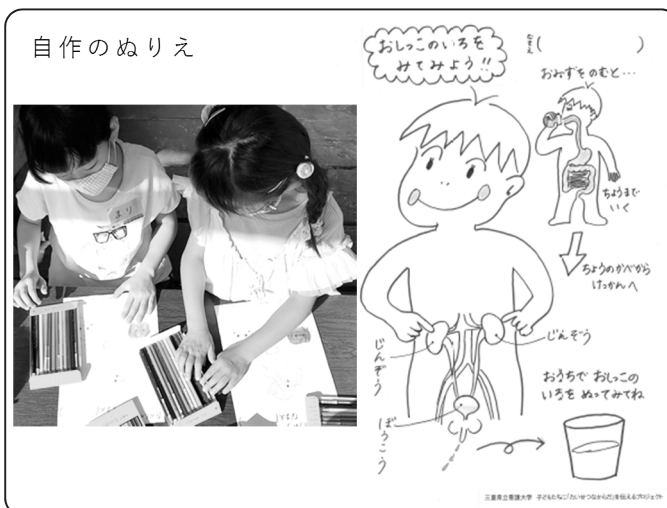
毎回終了後に、参加者へのアンケートとスタッフとの反省会を行い、テーマごとに、プログラムの内容や方法について評価を行った。また、最終回終了後には、参加者と全体を通しての振り返り会を実施し、最終回の2週間後には事後アンケートをとり、事業全体の評価を行い、課題の明確化を行った。



資料1 事業チラシ

表 1 全 5 回のプログラムの内容

開催日	紙芝居	ワーク・教材	ぬりえ
第1回 6月2日	たべもののとおりみち	①からだエプロン(食道・胃・腸) ②胃液を触てみよう！：手作りスライム	たべもののとおりみちをたどてみよう！
第2回 6月16日	おしっこのはなし	①からだエプロン(腎臓と膀胱) ②おしっこを比べてみよう！：手作り尿モデル4種 ③宿題「おしっこのいろをみてみよう！」	おしっこができるまで
第3回 6月30日	ほねときんにく	①筋肉の全体像をみてみよう！： 筋肉模型(筋肉ボディースーツ)着用 ②筋肉を触てみよう！： 筋肉模型(筋肉ボディースーツ)着用	うでのほねときんにく
第4回 7月7日	すてはいて	①肺はどこにある？：肺イラストTシャツ ②手作り模型で学ぶ肺のメカニズム ③すてはいて胸の動きをみてみよう！ ④呼吸の音をきいてみよう！(直接) ⑤呼吸の音をきいてみよう！：聴診器	すてはいて
第5回 7月28日	おとこのこ・おんなのこ	①おとこのこ・おんなのこのだいじなところのお話 ②子宮と赤ちゃん：子宮の中の胎児モデル 妊婦体験カバー	おとこのこ・おんなのこのだいじなところ



2. 「からだ先生」の人材育成

全5回のプログラムについて、大学教員だけでなく、A団体のスタッフとともに、ワークの内容や伝え方、教材の検討を行い、A団体のスタッフには、ワークの教材の開発・制作にも主体的に携わっていただいた。また、事業全体の評価、課題の明確化のプロセスにもA団体のスタッフが参加した。

また、全5回のプログラム以降に、A団体は、子どもを対象とした市のイベントにおいて「からだ先生」として、「自分のからだを知ろう！食べたものはからだの中でどうなるの？」を独自で企画した。当日は、親子32名が参加し、紙芝居やからだエプロンを用いたワーク、からだTシャツ作りなどを行い、本プロジェクトが協力した。

<評価>

1. 幼児への教育活動

幼児への教育事業は、1件の連携希望を通じて、A団体との事前打ち合わせを合計6回、事後打ち合わせを6回、計12回の打ち合わせ会議を実施し、「たいせつなからだ」を伝えるプログラムを5回実施できた。数値目標は全て達成できたといえる。

また、5回のプログラムの参加者（保護者）満足度では、全ての回で「とても満足」「満足」と回答した者が100%であった。評価につながる参加者（保護者）による具体的な感想の一部を以下に示す。

- ・話をきくだけでなく、実際に体験することで記憶に残って、親子で日頃からだの話をするようになった。
- ・からだのつくりになかなか触れ合う機会がないので、その仕組みなどを知る機会になる。そのことと同時に自分の体を大切にすることに繋がっていくと思う。
- ・親子での参加の講座は、学ぶだけでなく家庭内での親子の会話ができることがすばらしいと思います。
- ・食べ物の好き嫌いがあったが、「これは筋肉になるよ」など伝えると、自分の体のためになるものという認識で食べてくれるようになった。
- ・筋肉の動きやおしっこの色など、自分の体のことを観察していた。
- ・恥ずかしいと思う前に体の話をきくと、知識がずっと入っていく気がする。

2. 「からだ先生」への育成事業

A団体の「からだ先生」と共にプログラムの企画、実施、評価のプロセスに共に取り組み、新たなプログラムを展開し、教育活動の幅を広げることができたこと、またA団体の「からだ先生」としての独自の企画を本プロジェクトで支援することができたことから、「からだ先生」の育成につながる活動ができたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

からだの知識を毎日の生活と結び付けて理解できるよう連携機関と教材や伝え方などの検討を重ね、効果的で独自の教育を展開することができた。次年度も、地域の教育・福祉機関連と連携し、からだ先生として共にスキルアップしながら、より効果的な教育を目指し新たなプログラムに取り組んでいきたい。

11) みかん大 よりみちカフェ

担当者：篠原真咲、六角僚子、平生祐一郎

【事業要旨】

①地域の高齢者と子ども達の世代間交流を通して、地域コミュニケーションの活性化を目指すことを目的にしている。

②地域の人たちの交流の場となること、地域の方が気軽に相談できる場になることを目指している。

【地域貢献のポイント】

①近隣住民間の交流が促進されることが期待されるとともに、安全な居場所づくりとなる。

②大学と地域をつなぎ、教育だけでなく、大学にいる専門職とのかかわりを通して大学の役割を理解していただく機会とする。

【昨年度からの課題】

COVID-19 の感染予防をしながら、安心して安全にカフェが開催できるようにする。

I. 活動計画

毎回、世代の違う人々が交流をすることで、笑顔で過ごせる場所と時間を提供することを課題として、毎月テーマを変えて実施した。

カフェの流れとしては、参加者が一人ずつ、自己紹介を行う。その後、その季節に合わせた内容のテーマで話をしたり、ゲームをして過ごす。時折、体操を交えて、体を動かすことでもリフレッシュできるようにする。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞特に好評であった会について抜粋して報告する。

1. 「ブンネギターを奏でよう」

参加者は、学生6名 教員2名 住民5名であった。

学生たちがリアリティオリエンテーションを行い、秋の味覚で好きなものについて住民の方に聞きながら、会話を広げていた。秋にちなんだ楽曲（もみじ）を練習し、歌いながら演奏を行った。

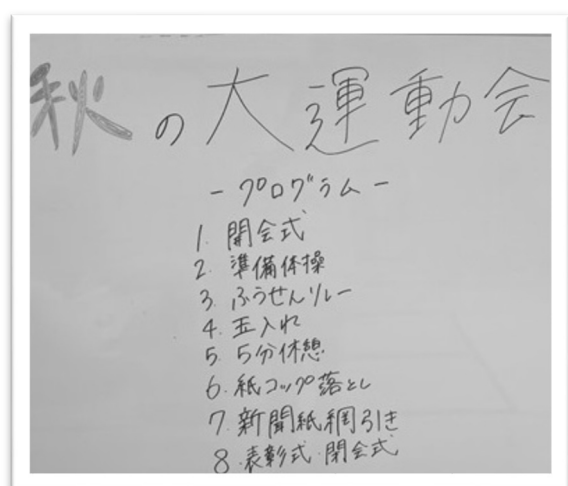
簡単に弾けるギターに「このようなギターを弾いたのは初めてです」「面白いギターですね」と住民の方々は驚き、また「音がきれい」と音色を楽しんでいた。もみじだけではなく、もっと楽曲を弾きたいということで、「きらきら星」、「ぞうさん」なども楽譜のある楽曲を増やして演奏を行った。



ブンネギター

2. 秋の大運動会

最初に自己紹介とスポーツの秋にちなんで「好きなスポーツ」紹介を行った。その次リアリティオリエンテーションを行い、今日は何の日（いなりの日）で会話を広げた。ラジオ体操で体をほぐし、プログラムに沿って行った。笑顔、笑い声、運動会の音楽でにぎやかに進行した。



3. アドベントカレンダー作成

参加者：住民：3名、大学院生：1名 学生：10名、教員：1名



参加者は、時間の経過を忘れてしまうくらい夢中になって作成に取り組んでいた。楽しくアドベントカレンダーが仕上がった。年末の楽しみのひとつである。

Ⅲ. 今後の課題

今年度も学生と地域住民のふれあいにより、参加者が笑顔になれる場所であった。地域の方々の仲間づくりを行い、地域のニーズに合わせた活動を今後も継続できるように工夫していきたい。

12) 在宅療養児と家族の声を届ける講演会支援

担当者：宮崎つた子、上杉佑也、中北裕子

【事業要旨】

医療的ケアを必要とする子ども（以下、医ケア児）や家族の現状について、その実際を知る機会は、地域住民あるいは当事者、また、支援を行う多職種もそれぞれの立場での一側面に限られている。本事業は、医ケア児とその家族の思いや現状について、当事者自身の声を直接届ける講演会を開催し、県内で広く地域・社会の役割を知ってもらう活動である。

【地域貢献のポイント】

医ケア児と家族の思いや現状を知ってもらうことで、①支援を行う立場にある多職種が具体的な支援方法を模索することに繋がる、②地域住民を含め周囲の人々の医ケア児とその家族の理解を深める、③同じ立場にある当事者同士が思いや立場を共有できるといったピアカウンセリング・ピアエデュケーション効果を得られる。

I. 活動計画（3年計画の1年目）

1. 数値目標

- 1) 講演会の開催：1回
- 2) アンケート結果の参加者満足度：平均4（5件法）あるいは3（4件法）以上
- 3) 講演会参加者：10名以上
- 4) 学生ボランティア：1名以上

2. 実施計画

- 1) 講演者の選定
- 2) 講演者との講演内容の調整
- 3) 講演会の広報
- 4) COVID-19の状況に応じて、対面開催あるいはオンライン、もしくはハイブリッドで講演会を開催する。
- 5) 事業評価のためのアンケートを実施し、参加者の満足度、医ケア児及び家族への支援の示唆あるいは得られた知見等について評価する。
- 6) 学生ボランティアを募集し、事業実施に協力してもらうことで、学生の医ケア児を取り巻く環境の理解に貢献する。
- 7) 事業の反省会を実施し、課題の検討を行う。

II. 活動の結果と評価

1. 結果

1) 打ち合わせ

COVID-19の感染予防のために、家族会代表者および支部代表者とメールと電話

で3回、講演会講師との打合わせはZOOMを使用して1回行った。

2) 講演会開催

日時:令和4年12月17日(土) 10:00~12:00

テーマ:「医療的ケアが必要な子どもと家族 ―今、できることを取り組み始めています―」

方法:事前申し込み制としZOOMにて実施した。

広報:三重県重症ケア家族会SMILEとeケアネットよっかいちの会員に開催案内のチラシを添付したメールにて講演会開催の周知を行った。

講師:演者は医ケア児の母親3名(A氏・B氏・C氏)に依頼した。前半の講演内容として、A氏とB氏には医ケア児とその家族の生活について、C氏には医ケア児がいる家族の防災の取り組みについてお話しいただいた。

後半の講演内容として、A氏からは三重県重症ケア家族会の紹介、B氏からは家族会のイベントに参加した家族の立場から、C氏からは家族会イベントの企画・運営に関わった立場からそれぞれお話しをいただいた。

参加者:申込者55名のうち、47名の参加があった。

3) アンケート結果

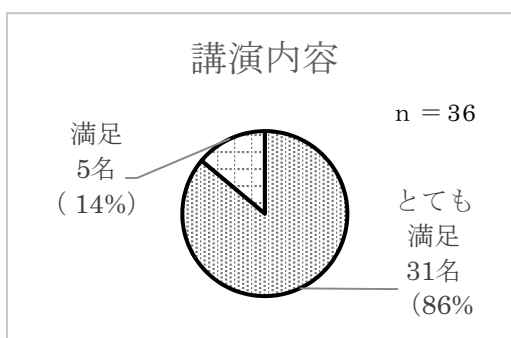
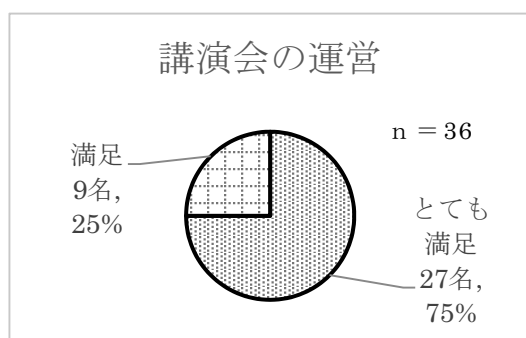
アンケートは、36名(男性7名、女性29名)から回収でき(回収率70.2%)、年齢構成は、20代5名、30代7名、40代12名、50代12名であった。参加者の職業は、医療分野(医師・看護師・リハビリテーション関連職など)は14名、教育分野(特別支援学校・大学など)9名、保護者(当事者の家族)5名、福祉分野(介護職・保育職など)4名、行政分野2名、未勤務(学生等)2名であった。

(1) 講演会の満足度

講演会の運営(開催案内・連絡、進行等)についての満足度は、「とても満足」は27名(75.0%)、「満足」は9名(25.0%)であった。

(2) 講演内容の満足度

講演内容の満足度は、「とても満足」31名(86.1%)、「満足」5名(13.9%)であった。



(3) 自由記載

講演会の運営に関する自由記載には、「講演会のチラシにつきましても、大変見やすく、心惹かれる題目でした」、「時間的にも、ちょうどよかったと思います。」といった記載があった。ZOOM開催に関しては「参加しやすかった」、「事前の連絡、リマインドがあって、スムーズに参加できた」「zoomの参加方法なども詳しく載せ

て下さっていて、安心して参加させていただくことができました」といった記載があった。

講演内容については、「療養児様だけではなくお母様やご家族様の検診やヤングケアラーの視点を知ることができ本当に良かったです。また、防災について、分かっているにもかかわらず実践されており活動的な姿勢に脱帽です」、「実際に在宅でケアをされているお母さんの実体験を聞かせてもらうことがあまりないため、想像でしかなかった生活を、リアルな声で聞くことができた」、「皆様から聞かせていただくことで知り、自分だったらとその立場になって想像し、できる支援を考えていかなければならないと思っています」「実際生活されてきた様子を聞かせていただくのは、退院調整していくにあたりすごく学びになる。特に家族を孤独にしないこと、ご家族は大丈夫とは言ってくれますが、『大丈夫』の中に隠れている不安や孤独をしっかり受け止めていきたいと改めて思いました」という意見があった。

その他、「このような貴重な講演ですので、医療職を目指す学生、子どもと関わる職種、地域社会へ知って頂けることが望ましいと感じました」、「このような『医療的ケア児のお母さま（ご家族）の当事者の声』を聴きたいので、是非、継続していただきたい」といった意見があった。

2. 評価

参加者は、目標としていた10名より多くの方に参加いただけ、学生ボランティアの参加もあり目標は達成できた。参加者からは講演会の運営、内容ともに全員が「とても満足」「満足」と回答しており、好評であった。医ケア児と家族のリアルな話を聞かせていただけたことで、当事者の現状理解につながったと考えられる。また、多職種（医療、教育、福祉分野）が参加しており、自由記載の内容から今後の支援を検討する際のヒントになるものと考えられる。保護者（当事者の家族）の参加も得られ、ピアカウンセリング・ピアエデュケーション効果も得られたものと推測される。COVID-19 拡大（第7波）を鑑みて、感染防止のため zoom を利用した開催とした。丁寧に zoom の参加方法なども詳しく事前に伝えたことで、スムーズな開催であったと評価する。

Ⅲ. 今後の課題

アンケート結果より、講演会開催の満足度が高いだけではなく、医療的ケアを必要とする障がい児とその家族の思いや現状について更に知りたいという希望があることから、当事者自身の声を直接届ける講演会を開催し、県内で広く地域・社会の役割を知ってもらう機会を作ることの必要性は高いと考える。

感染防止のために ZOOM で開催したが、リモートであったから参加しやすかったという回答があった。これは、重度な障がいや医療的ケアが必要な障がい児を連れての会場参加や障がい児の我が子を預けての会場参加の不安等があることも再認識する必要があると思われる。今後は対面開催を重視しながら、より多くの方に参加していただくため多面的に開催方法を検討していくことが必要と考える。また、医療職を目指す学生を始めとし、子どもと関わる職種等が参加できるような周知が必要である。

13) おいないさ、みかん大ミニ講座

担当者：田端真、清水律子、河村敦子

【事業要旨】

地域にひらかれた大学として、県民に気軽に来学いただける機会を作るとともに、近年のトレンドの中から健康的な暮らしにつながる情報を提供することを目的に、ミニ講座を開催する。「おいない（来てください）」と「老いない」を掛け合わせ、場所は本学とし、話題は老いても健やかに暮らすために着目したい物事を取り上げる。

【地域貢献のポイント】

- ・ 近年の健康に関する情報をわかりやすく伝えることにより、県民が健康的に暮らすための一助となる。
- ・ 県民が大学に来学する機会を設けることにより、大学と県民の交流を促進し、地域の健康づくりに必要な相互作用につながる。
- ・ 疾患や加齢に伴う身体の変化を知ることにより、高齢者や障害を有する人に対する社会的な理解の普及に寄与する。
- ・ 老いてもその人らしく暮らし続けることに関する社会の意識を高めることにつながる。

I. 活動計画

＜重点課題＞

県民が大学に来学する機会を作るため、気軽に参加しやすい講座を企画し、開催する。また、講座を通して老いても健康的に暮らすことに対する参加者の興味や関心を高める。

＜実施計画＞

1. 本講座の開催を周知するためにチラシを作成し、主要機関へチラシを設置する。
2. 本学を会場にして、同一内容のミニ講座を年2回開催する。
3. 参加者に対してアンケート調査を行い、事業評価する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

講座のテーマを決定し、開催の準備を進めた。しかし、新型コロナウイルス感染症オミクロン株の急拡大に伴い、夏季に「三重県B A. 5対策強化宣言」が発出されたこと、秋季以降は学部教育（臨地実習指導）に支障を来さないよう最大の配慮が必要であったことから、県民に来学いただく講座の開催は難しいと判断し、計画は実施できなかった。

III. 今後の課題

県民に来学いただいての講座の実施が難しい場合でも、「地域にひらかれた大学」「健康的な暮らしにつながる情報を提供する」という事業要旨に沿った活動を行うために、今後はインターネットの活用や出張など、来学以外の方法も検討し講座の実施につなげる。

14) 私たちに今できる災害の備え

担当者：清水律子、中西貴美子、浦野茂、森下直紀、菅原啓太、上杉佑也、荻野妃那、竹村和誠、荒木学、山本奈津美

【事業要旨】

南海トラフ地震発生危機が刻々と迫る今、地域住民が危機感をもち防災・減災対策を行うことが求められている。本事業では、本学の看護教育・研究機関としての機能を活用して、保健センターや自治会等の協力を得ながら、地域住民の「自助」「互助」を高め防災の日常化を目指している。

【地域貢献のポイント】

南海トラフ地震発生は、今後30年以内に70～80%の確率、今後40年では90%程度（令和4年1月現在）といわれている。災害発生危機が刻々と迫る今、地域住民自らが危機感をもち防災・減災対策を行うことは重要になる。本事業は、災害に関する情報を地域に発信し、地域住民の「自助」「互助」の力を高めることができる。

I. 活動計画

＜数値目標＞

1. 啓発ブースを開設（年1回）
2. 地域住民や学内の学生や教職員などへの情報発信（年1回程度）
3. LINKtopos（リンクトポス：全国公立大学学生大会）への参加（教員や学生2名程度）
4. 学生ボランティアの協力（3～5名程度）

＜実施計画＞

新型コロナウイルス感染状況を鑑み、学内にて災害に関する啓発ブースを開設する。LINKtopos2022（2022年度全国公立大学学生大会）に参加する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 啓発ブースの開設

1) 概要

対象者：本学の学生と教職員

期 間：令和4年11月1日から11月11日

場 所：本学の学生ホール

テーマ：「災害時の避難所生活を知ろう」

学生ボランティア数：16名

地域交流センター教員授業事業「私たちに今できる災害の備え」

「災害時の避難所生活を知ろう」学内イベント開催のお知らせ

南海トラフ地震発生危機が刻々と迫る今、私たちは危機感をもち、防災・減災対策を行うことが求められています。

本イベントは、避難所生活をイメージすることや、防災の日常化を目指すための企画です。イベントに参加して、災害の備えとして、どんな準備が必要か考えたり、見直す機会にしてください。多くの来場者をお待ちしております！

開催期間：令和4年11月1日（火）～11月11日（金）

場 所：学生ホール ＊入り口付近の一部のスペース

企画イベント

- ★体験スペース★
・段ボールベッドや段ボールトイレに実際に座って体験しよう！
- ★展示スペース★
・避難所となる施設内レイアウト例など
・停電時の対策（電気や充電器などの紹介）
・一人暮らしの自宅で備えておく防災グッズと非常食
・最近の非常食

★アンケートにご協力いただいた方に非常食をプレゼント★ ＊数に限りがあります。
★アンケートは1人1回です。
★イベント会場の企画教員に、Forms送信画面を見せてください。
★イベント開催期間中、お昼30分程度で、企画教員が会場にいます。
Forms送信日以外でも、送信画面を提示いただければ、対応します。

＊会場に企画教員がいる日程は、11月1日（火）、2日（水）、3日（木）、4日（金）、7日（月）、8日（火）、10日（木）、11日（金）になります。

地域交流センター教員授業事業「私たちに今できる災害の備え」
清水律子、中西貴美子、浦野茂、森下直紀、菅原啓太、上杉佑也、竹村和誠、荻野妃那、荒木学、山本奈津美

2) 啓発ブースの詳細（写真参照）

災害時の施設（体育館など）での避難所生活を知り、災害に備える意識を高めることができるよう、テーマを「災害時の避難所生活を知ろう」とし、啓発ブースを開設した。

体験企画としては、段ボールパーティションで間仕切りを作り、その中に段ボールベッドや段ボールトイレを設置して、実際に座れるブースを開設した。展示企画としては、避難所となる施設内のレイアウト図（ポスター）、避難所生活で困ること（ポスター）、一人暮らしの自宅で備えておく防災グッズ（展示）、情報収集（手回しで充電できるラジオやソーラー充電器など）のためのグッズ（展示）、非常食（展示）とした。



【体験企画】段ボールパーティションで間仕切り、
段ボールベッドと段ボールトイレを設置



【展示企画】非常食

3) アンケート結果

アンケート回答数は、119名であり、1年生の学生は43名、2年生は27名、3年生は6名、4年生は37名、教職員は6名であった。

災害の備えについての意識や関心の程度については、「とても意識・関心がある」と回答した者が30.3%、「やや意識・関心がある」が53.8%、「あまり意識・関心がない」が11.8%、「全く意識・関心がない」が1.2%で、アンケート回答者の多くが災害の備えに関心を持っていた。災害の備えとして参考になった企画（複数回答）の結果を下記の図1に示す。最も参考になった企画は、段ボールベッドであり、次に非常食であった。避難生活が想像できるようなものが特に参考になっていた。

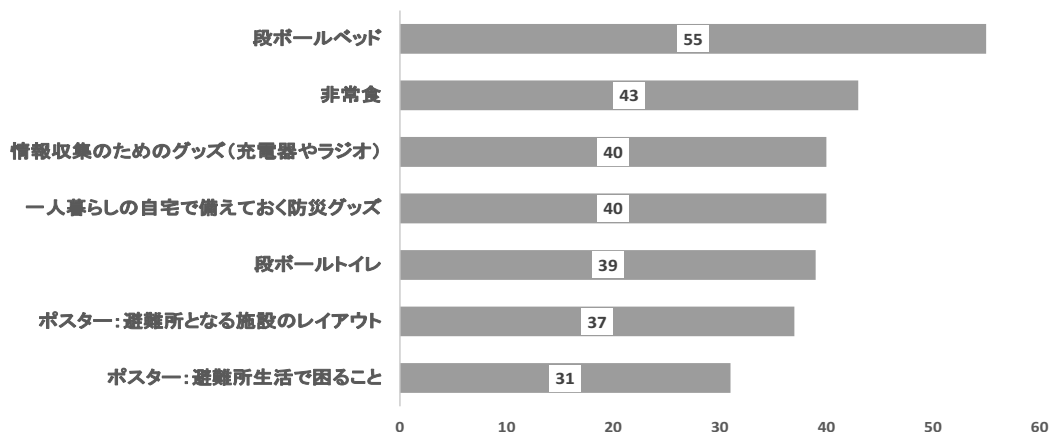


図1 災害の備えとして参考になった企画（複数回答）

災害の備えの結果について、下記の表 1（1）と表 1（2）に示す。「既に備えている」ものとして最も多かったものは、「懐中電灯」であり、次に「水」、「救急用品」であった。「既に備えているが、さらに追加で備えようと思う」ものは、「防災の情報収集」が最も多く、次に「食品」であった。「備えていなかったが、今後は備えようと思う」ものは、「貴重品（通帳などのコピー、現金）」であり、次に「衣類」「防災訓練の参加」であった。なお「備えていないし、今後も備える予定もない」の回答者は少なかった。アンケートで尋ねた災害の備えについては、さらに追加の備えようと思う回答者と今後は備えようと思う回答者を併せると、全てのもので半数を超えていたことから、体験やポスターや展示を通して、災害への備えの意識が高まったと考える。

表1(1) 災害の備え

回答数:119

	水	食品	衣類	ヘルメット	懐中電灯	携帯ラジオ	携帯充電器	マッチ	救急用品	感染対策用品	貴重品
既に備えている	42.0	31.9	15.1	19.3	45.4	21.8	35.3	23.5	37.0	32.8	10.9
既に備えているが、さらに追加で備えようと思う	22.7	31.1	15.1	12.6	22.7	14.3	17.6	18.5	26.1	29.4	18.5
備えていなかったが、今後は備えようと思う	31.9	34.5	62.2	58.8	29.4	49.6	42.0	51.3	35.3	34.5	64.7
備えていないし、今後も備える予定もない	3.4	2.5	7.6	9.2	2.5	14.3	5.0	6.7	1.7	3.4	5.9

(%)

表1(2) 災害の備え

回答数:119

	避難所の確認	避難所までの移動経路	家族との連絡方法	家具の固定	近所との協力関係	防災訓練の参加	防災の情報収集	避難所生活の実施の状況
既に備えている	33.6	31.1	26.9	22.7	10.9	12.6	11.8	11.8
既に備えているが、さらに追加で備えようと思う	23.5	17.6	27.7	16.0	18.5	19.3	34.5	23.5
備えていなかったが、今後は備えようと思う	38.7	48.7	44.5	55.5	56.3	62.2	48.7	59.7
備えていないし、今後も備える予定もない	4.2	2.5	0.8	5.9	14.3	5.9	5.0	5.0

(%)

4) 地域への情報発信

大学広報紙『MCN レポート』2022.12 vol.53 に、学内で災害に関する啓発ブースを開催したことを掲載し、地域住民に情報発信をした。

2. LINKtopos2022（2022 年度全国公立大学学生大会）に参加

福知山で開催された LINKtopos2022（2022 年度全国公立大学学生大会）に教員 1 名が参加し、他の公立大学の教職員と情報交換し、交流を図った。

< 評価 >

数値目標とした、啓発ブース開設については学内で実施し、学生や教職員などへの情報発信したことで、達成できた。またイベント開催中の学生ボランティア数も数値目標より多く集まった。新型コロナウイルス感染状況を鑑み、事業を学内に変更したことで、地域住民への啓発活動が大学広報紙『MCN レポート』のみになったが、地域住民への情報発信もできた。LINKtopos（全国公立大学学生大会）には、新型コロナウイルス感染者数が増加している時期であったため、教員 1 名のみの参加になった。事業は好評であり、「改めて災害に備えるために何が必要か、考えるきっかけになった」「地域の防災訓練に参加してみようと思う」「また企画して欲しい」などの声があり、学生の災害に備える意識は高まった。

III. 今後の課題

今後は事業の場を学外に広げ、地域住民を対象とした啓発活動を行っていく必要がある。

15) 赤ちゃんをむかえるママとパパのための 「みかん大ハッピーマタニティ教室」

担当者： 杉山泰子、大平肇子、永見桂子、犬飼さゆり、岩田朋美、市川陽子、荒木学、辻まどか、日置理瑚、橋本千愛

【事業要旨】

新型コロナウイルス感染症の影響により、産婦人科医療施設では、集団健康教育が実施されない状況や、立ち合い分娩の制限等が続いている。出産を控えた妊婦、パートナー、家族にとって様々な心配ごとが生じていると考えられる。その心配ごとが少しでも軽減するよう、妊婦、パートナー、その家族を対象に、オンラインの出産前準備教育を行う。

本事業は、妊婦、パートナー、その家族を対象に出産前の健康教育を行い、心身ともに健やかなマタニティライフの実現をめざすことを目的に実施する。

【地域貢献のポイント】

妊婦が妊娠・出産・育児にともなう心身の変化や生活の変化を前もって理解し、様々な準備を整えた上で出産・育児にのぞみ、安産と心身の健康をめざす。また、開催者側は、新型コロナウイルス感染症等の影響で、妊婦の生活にどのような困難が生じているかを知ることができ、今後の支援方法を検討することができる。

I. 活動計画

<数値目標>

年間2回実施し、それぞれ5名程度の参加者で実施する。



開催に向け、2回の打ち合わせ会議を行い計画立案した。教室の計画立案とリハーサルに時間を要することが見込まれたため、今年の教室の開催回数を当初の2回から1回に変更した。計画立案後、2回のリハーサルを行い教室の開催に至った。

第1回打ち合わせ会議では、開催日時およびプログラムについて検討をした。パートナーや家族が参加しやすいよう、土曜日の開催を計画した。三重県内の産婦人科医療施設と市町の集団健康教育の実施状況とその方法についてホームページを閲覧し、プログラムを検討した。周産期のメンタルヘルスについて集団健康教育で取り上げている施設や市町はほとんどないため、本事業では、精神看護学の教員の専門性を活かし、プログラムに取り入れた。プログラムは、1. 妊娠後期から産後のママの体の変化、2. 産後のママのメンタルヘルス、3. 心配ごと相談とした。Web会議サービス「Zoom」の双方向の通信を活かし、妊婦同士の交流の時間、疑問点や不安を共有し助言を行う時間についても設けた。

第2回打ち合わせ会議では、チラシ作成、周知方法、役割分担について検討した。周知方法については、本学ホームページに掲載するとともに本学の実習施設4施設の産婦人科外来においてチラシの配布を依頼した。また、一般社団法人三重県助産師会にも周知依頼をした。参加申し込みおよびアンケート実施については、Microsoft Formsを活用した。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

令和 5 年 2 月 18 日（土）10:00～11:30 にオンライン教室を実施した（表 1）。参加者は妊婦 3 名、パートナー 2 名の計 5 名であった。妊婦については、およそ 2～3 か月後に分娩予定の妊婦であり、初産婦 2 名、経産婦 1 名であった。チラシの配布を依頼した施設のスタッフよりオンライン教室の運営を知るところを目的とした見学の希望があり、3 名の看護職者が見学をした。オンライン上で妊婦以外の参加者が多くなることを避けるため、見学者については本学での現地見学の方法をとった。

表 1. 当日のプログラム

プログラム	時間	内容
導入	5 分	進行(みかん 杉山) アイスブレイク 質問(チャット等で確認)
妊娠後期から産後のママの体の変化	30 分	担当(母性看護学)
休憩	5 分	
産後のママ・パパのメンタルヘルス	30 分	担当(精神看護学)
心配ごと相談	20 分	進行(みかん 杉山) 回答:全員
まとめ	5 分	進行(みかん 杉山) アンケートのおねがい



心配ごと相談では、「身近な人が産後うつになったことと、教室の内容が結びつき、産後の休息の必要性について理解した」という意見が挙がっていた。また、実家が遠方であること、両親が就労していることから、産後は両親に頼ることなく夫婦で育児をする予定の妊婦が 2 名いた。「産後ケア事業について行政に問い合わせ準備している」と発言する妊婦もあり、有意義な情報共有となった。パートナーの積極的な発言もあり、「父親の役割について具体的に知る機会がなかったが、今回の教室で父親が何をするのかが分かり参考になった」という意見があった。父親への支援の必要性も参加者から感じ取ることができ、家族を含めた子育て支援の必要性が実感できた。

< 評価 >

計画立案とリハーサルに時間をかけたため、数値目標である年間 2 回の開催については達成できなかった。しかし、5 名の参加者を迎えて開催でき、数値目標である 5 名程度については達成できた。Microsoft Forms によるアンケートにより 4 名の回答を得たが、内容の理解、時間、オンライン環境について、全員がポジティブな回答をしていた。もっと知りたいことについては、「妊婦の日常生活における動作の工夫」、「マイナートラブルや出産までにおける父親の具体的な向き合い方」、「陣痛から分娩までのイレギュラーな事象に対しての対応策」等が挙がっていた。

Ⅲ. 今後の課題

妊婦、パートナー、その家族の取り巻く環境やニーズを把握し、必要な情報が提供できるよう内容を洗練する。教室開催を広く周知し、今年度を上回る参加者を募る。

16) みかん大ヘルシーウォーキング体験会

担当者： 大西範和、大平肇子、斎藤真、ドライデンいづみ、上田貴子

【事業要旨】

健康づくりに運動が役立つことはよく知られ、習慣的に行うことが推奨されている。しかし、実施を困難と感じる人は多く、体力に個人差もあることなどから、生活に取り入れることができない人も多い。一方、歩くことは人の日常の基本的な活動であり、誰でも手軽に行える運動としてウォーキングが広まっている。ウォーキングは通常の歩行より運動強度を増加させる必要があり、安全かつ効果的に行うためには、その根拠や適切な実施方法の理解が求められる。当事業では、ウォーキングや最近広まりつつあるノルディック・ウォーキングなどについて知識や技術を提供すると共に実際に楽しむ機会を持ち、健康の維持・増進、ストレスの緩和に役立てられるよう支援する。

【地域貢献のポイント】

当事業では、参加者にウォーキング、ノルディック・ウォーキングなどの健康づくり運動についての知識や技術に関する情報を提供し、実際に体験して頂く。知識や技術の獲得や実際の体験は、運動習慣のない方に運動継続の意義や楽しさを分かって頂くことにつながり、参加者の皆さんに運動を日常生活に取り入れて頂くことで、健康の維持増進に貢献することができる。

I. 活動計画

＜重点課題＞

「みかん大ヘルシーウォーキング体験会」の開催準備を進める。感染状況により3回程度開催する。

＜実施計画＞

「みかん大ヘルシーウォーキング体験会」の内容、実施場所や実施方法の検討を開始し、体験会の開催準備を行う。感染状況によるが、可能であれば20名程度を枠とし、感染対策を整えた上で「みかん大ヘルシーウォーキング体験会」を開催する。体験会の内容は、ウォーキングやノルディック・ウォーキングに関わる、歩行のメカニズム、効率的な歩き方や身体への影響などとする。会場は、大学キャンパス内を基本とし、津市内での「みかん大ヘルシーウォーキング体験会」の実施について検討する。また、学外の組織との共催を模索し、相互に有益となるような事業展開を目指す。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 開催準備

当事業は令和4年度から開始し、体験会の開催を念頭に準備を行ったが、感染状況が改善せず実現には至らなかった。準備としては、ウォーキングについての知識や方法などの情報提供を行うための資料を作成するとともに、担当者間で意見交換を行い、学内

で実施する場合に備えて、大学の外周道路を活用してウォーキング・コースを設定することとなり、1周最短 600m となる案を作成した（図）。また、学外で他の組織と協調した事業を行うことを目指して、津市内の地域で野外活動のイベント等を開催している組織の担当者などに、共催などの可能性を含め当事業の PR を行った。

<評価>

令和 4 年度は、感染状況の改善がみられなかったことから、「みかん大ヘルシーウォーキング体験会」を開催することはできなかった。準備については、来年度の開催に向けて、情報提供する内容の精選や学内コースの想定を進めるとともに、津市内での開催に向けて情報収集と PR を行うなど、順調に進んでいると評価している。

Ⅲ．今後の課題

令和 5 年度は、学内のウォーキング・コースを確定し、「みかん大ヘルシーウォーキング体験会」を開催する。また、学外で実施するウォーキング体験会の実施に向けて検討を行う。



図．本学外周道路を用いたウォーキング・コース案

Ⅱ．卒業生支援事業

- 1．卒業生支援プロジェクト
- 2．卒業生のきずなプロジェクト

1. 卒業生支援プロジェクト

担当者：長谷川智之、斎藤真、ドライデンいづみ、岩田朋美、田端真、荒木学
山本奈津美、片岡祐樹、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、卒業生相互の情報共有およびキャリアディベロップメントを支援することを目的に、同窓会と連携し各種事業を展開する。今年度は、①卒業生調査第2報の紀要投稿、②卒業生を対象とした各種イベントの検討、③在校生に対する同窓会の周知を実施する。

【地域貢献のポイント】

本事業における地域貢献のポイントは2点挙げられる。1点目は、卒業生調査の結果をもとに、ニーズに対応した企画の検討について、同窓会と協働することができる。2点目は、在学生在が卒業後においても同窓会会員の相互交流について知ること、キャリアディベロップメントの一助となることである。

【昨年度からの課題】

卒業生が本学を身近に感じることができるよう、同窓会と連携し、卒業生に対する各種イベントの企画、発信を行っていく必要がある。また、在校生に対する同窓会周知に関しては、今年度初めの4年生へのオリエンテーションの際に、同窓会についての案内を行ったうえで、学年委員を選出する。

I. 活動計画

1. 4年生に対して同窓会のオリエンテーションを行い、クラス代表2名を選出する。
2. 本プロジェクトメンバーによる意見交換会を年2回実施する。
3. 卒業生調査第2報を紀要に投稿する。
4. 卒業生対象のイベントを企画し、年1回実施する。
5. 同窓会との意見交換会を年1回実施する。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 4年生への同窓会周知

令和4年4月1日に4年生に対して同窓会のオリエンテーションを行い、三重県立看護大学同窓会の目的および活動について説明を行った。また、クラス代表の役割について説明し、2名を選出した。

2. プロジェクトメンバーによる意見交換会

第1回は、令和4年6月20日（月）、第2回は令和5年1月5日（木）に開催した。また、審議が必要な際には適宜メール審議を実施した。第1回の内容として、今年度の

活動計画の確認、卒業生調査の対応、第3回公開講座における卒業生限定のオンライン配信に関する内容について検討した。第2回は、卒業生調査結果の公表方法について検討した。

3. 卒業生調査第2報

令和3年に実施した本学卒業生を対象とした卒業生調査の結果を公表すべく、昨年度に引き続き本学紀要への投稿に向けて活動した。令和4年4月、三重県立看護大学卒業生調査(第1報)を本学紀要に投稿したものの、現状において検討すべき事項があった。本調査は、本学卒業生の卒後の就業状況やキャリア形成に対する認識などの貴重なデータが凝集されていることから、引き続き検討を行い、結果公表に向けた準備を行った。第2報については、卒業生調査の自由記述に対して質的分析を行い、投稿のための準備を行った。

4. 卒業生対象のイベント開催

令和5年1月7日(土)に開催された第3回公開講座「誇れる過去は、諦めない今がつくる」(講師：伊藤智也先生)に卒業生がオンラインで参加できるよう、チラシを作成し同窓会に配布を依頼した。当日は、11名の卒業生がオンラインで聴講した。参加した卒業生にアンケートを実施した結果、7名(30代1名、40代4名、50代2名、回収率63.6%)から回答を得た。公開講座の内容およびオンライン環境に対して、参加者全員から肯定的な評価を得ることができた。

5. 同窓会との意見交換会

令和5年3月7日に、同窓会会長および大学(地域交流センター長、センター委員、本プロジェクト代表)で活動内容および次年度計画の共有を行った。

<評価>

全ての活動結果において、数値目標は達成できた。

Ⅲ. 今後の課題

新型コロナウイルス感染症の対応の変化に伴い、今後においても在校生および卒業生が本学を身近に感じることができるよう、同窓会と連携し、卒業生に対する各種イベントの企画、発信を行っていく必要がある。

2. 卒業生のきずなプロジェクト

担当者： 中北裕子、林辰弥、灘波浩子、日比野直子、長谷川智之、ドライデンいづみ、川島珠実、杉山泰子、荻野妃那、竹村和誠、多久和有加、山本奈津美、辻まどか、橋本千愛、片岡祐樹、米川さや香

【事業要旨】

卒業生が看護職としての職責を継続して果たせるよう、様々な相談に対応し、燃え尽きおよび離職防止を図る。また同窓会と連携をとり、卒業生、同窓会との情報交換を行うことにより、卒業生と大学との関係性の維持にも努める。（本事業は、平成 23 年度からの事業を引き継いだ単年度事業で、平成 29 度より交流センター提案事業となった。）

【地域貢献のポイント】

仕事上の悩みや複雑な人間関係を経験し、離職を考えることが多い卒後 1～2 年までの卒業生を対象に、母校である大学がハード面とソフト面の資源を提供し、フォローすることで離職防止を図る。この活動によって、卒業生が持続的に質の高い看護ケアを社会に提供できることは、地域住民および社会に対しての貢献につながると考える。

【昨年度からの課題】

COVID-19 感染拡大防止のための対策を十分に講じた上での卒業生支援、あるいはメールや Web 等での卒業生支援を大学全体として実施していくことが必要である。茶話会の開催においては、対象者への確実な周知方法の模索、卒業生の要望をできるだけ取り入れた柔軟な開催方法の検討、変更事項の決定と早めの周知等が必要である。

I. 活動計画

＜数値目標＞

1. 卒後 1 年目を対象に茶話会を 2 回（8 月、3 月）開催する。
出席者数は、第 1 回、第 2 回茶話会それぞれ 30 名程度を目標とする。
2. 卒後 2 年目を対象に茶話会を 1 回（3 月）開催する。
出席者数は、30 名程度を目標とする。

＜実施計画＞

【茶話会の開催】

1. 卒後 1 年目の卒業生を対象とした茶話会を第 1 回 8 月、第 2 回 3 月に開催する。
2. 卒後 2 年目の卒業生を対象とした茶話会を 3 月（卒後 1 年目卒業生対象の茶話会と同日）に開催する。
3. 各職場の情報交換や、同窓生、教員と何でも話ができる場とする。全体会終了後、個別に本学教員に相談できる時間を提供する。特に 3 月は 2 学年を同時に集合する場とすることで、横のつながりだけでなく、縦のつながりを深める機会を作る。
4. 茶話会の開催に向けて

- 1) 茶話会の案内を卒業生の就職先に郵送することにより広報活動を行う。
 - 2) 卒業生には卒業生アドレス等を活用して連絡し、会への出席を呼びかける。
 - 3) 同窓会には開催を事前に伝えることにより、同窓会との橋渡しを行う。
 - 4) 教職員には開催周知と共に、参加協力を依頼する。
5. 茶話会の開催後
- 1) 茶話会終了後には、参加できなかった同窓生へのメッセージをまとめて卒業生アドレスを活用して、配信する。
 - 2) 茶話会への参加協力についてのお礼文書を参加者の就職先に郵送する。
6. 卒業生への周知
- 1) 卒業式のリハーサル時に、「卒後 1 年目対象茶話会の開催予定」を周知する。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 第 1 回茶話会（卒後 1 年目対象）
 - 1) 計画：開催日時・方法を 8 月 6 日（土）対面/Web ハイブリッド方式開催と計画し、対象者の就職先となった医療機関及び行政機関 40 カ所に、案内通知を発送した。その後、三重県内の COVID-19 の感染拡大(第 7 波)状況を鑑み、オンライン(Zoom)のみの開催に変更、メーリングリストで周知した。
 - 2) 実施：令和 4 年 8 月 6 日（土）、オンライン（Zoom）茶話会には、卒業生 6 名、教員 8 名の計 14 名の参加があった。職場から勤務時間内に参加した卒業生もいた。参加者全員が近況報告を行い、コロナ禍での新人職員研修や仕事、職場の様子について共有することができた。卒業生の仕事上の悩みに対し、教員が具体的な助言をしたり、卒業生同士で励まし合ったりした。

【Web 開催の様子】



- 3) アンケート結果：開催方法や時期・時間・内容について、全員が「満足」と回答し、全員が 3 月の茶話会開催を希望していた。また、後輩に対する茶話会開催を「望ましい」と回答し、大学が行う卒業生支援も「今回のような茶話会や懇親会」を希望していた。その他「他の病院の様子を知れたり、臨床経験のある先生方の話を聞いてとても楽しかった」「オンラインになってしまった事は仕方ないが、またどこか

で対面で行えたら良いなと思う」との感想があった。

2. 第2回茶話会（卒後1年目対象）

- 1) 計画：COVID-19は変異を繰り返し、感染力が強い新たな変異ウイルスの出現や拡大をしつつも、致死率が激減していたため、対面で開催できないか検討を重ねた。また、当初の活動計画では卒後2年目の卒業生も対象としていたが、対象者を卒後1年目のみに限定し、感染防止対策を徹底することで、対面開催の可能性を探った。開催については、メーリングリストで開催案内チラシとともに周知した。就職先（医療機関）37カ所には、令和5年3月4日（土）対面での開催予定の案内通知を1月下旬に発送した。
- 2) 実施：令和5年3月4日（土）、対面での開催が実現できた。卒業生4名、教員10名の計14名の参加があり、職場から参加申し込みがされたケースもあった。開催に当たっては、広い会場でテーブルを離して近距離で対面にならないように準備し、換気を行いながら実施した。茶菓子は各自にペットボトル、個包装の洋菓子とした。飲食時には黙食を行い、常時マスク着用を徹底した。職場から参加申し込みをいただいた医療機関には、お礼のメールを送信した。
- 3) アンケート結果：開催方法や時期・時間・内容・対面での実施について、全員が「満足」と回答し、後輩に対する茶話会開催を「望ましい」と回答していた。大学が行う卒業生支援も「今回のような茶話会や懇親会」を希望していた。その他「他の病院の話聞いて情報共有できて楽しかった」との感想があった。

【参加者記念撮影】



3. 茶話会以外の活動

第1回の茶話会後、9月に教員から卒後1年目に向けた応援メールをメーリングリストにて配信した。

卒後1年目、卒後2年目に加えて、卒後3年目以上の卒業生からも本事業担当教員のもとに、就職先での人間関係や再就職等について延べ16件余りの相談（来学、メール、電話）があり、対応した。このような個別相談によっても卒業生全体に対する支援となったと考える。

<評価>

第1回茶話会の卒業生の参加者は、6名（事前申し込み7名）であった。コロナ禍以後、事前申し込みや当日参加者は減少傾向である。特に、本会の1か月前からの第7波は、これまでの波を上回る規模で感染が拡大していたため、卒業生は「人が集まるところへ出かけにくい」「本当に開催されるのか」と思い、参加を躊躇した可能性がある。第1回茶話会においても対面での開催を見合わせ、昨年度と同様にZoomを利用した。利用上の問題や通信トラブルはなかった実績を踏まえ、「対面開催が不可ならZoomで開催する」等、使用するアプリを配布チラシや卒業生メールで告知すると良いと考える。

教員を含めた参加者14名の全員の顔が画面に映り、お互いに元気そうな表情を見ることができた。画面越しであっても、卒業生と教員、卒業生同士が再会を喜びあえた意義はあったと考える。また、卒業生の悩みに対し教員の臨床での経験談がヒントになったり、笑い話になったりし、笑いの絶えない楽しいひと時を過ごすことができたといえる。日頃の仕事から離れ、同窓生や教員らと笑い合えたり、同窓生の頑張りを知ることができたことで「明日からも頑張ろう」という気持ちに繋げることができたと推測する。

第2回は対面での開催の実現に向けて慎重に検討した。その結果、案内文の発送が1月下旬となったため、勤務希望を出すタイミングに合わず、参加者が少なくなってしまった可能性がある。しかし少人数の参加であったものの、異なる医療機関に勤務する卒業生たちがお互いの顔を見て、近況を報告し合ったり、同級生だからこそ話せる気持ちを吐露できたことが、満足度に反映されたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

第1回茶話会、第2回茶話会終了後の出席者のアンケート結果より、茶話会の満足度が高いだけでなく、大学が行う卒業生への支援や後輩に対する茶話会継続を希望していることから、今後も本事業を継続する必要がある。また、茶話会はオンラインでも開催可能で同じ時間・会話を共有できるが、対面できたからこそ伝えあえる空気感や一体感があり、それぞれが個別に話しや具体的な相談ができる等のメリットも再確認できた。

新型コロナウイルス感染症は、次年度5月に2類感染症から5類感染症に引き下げられる予定であり、各医療機関で定められている看護職者の行動制限も緩和されることが期待される。コロナ禍に就職した卒業生は、本事業の茶話会参加もままならない状況であったと推測されるため、次年度の茶話会は、可能な限り対面で行うとともに、より多くの卒業生が参加できるよう検討を重ねたい。

感染症や災害が生じた場合に最前線で働く卒業生の支援は、地域貢献として重要な課題であるため、今後も大学全体として出来る策を講じた上で卒業生支援を継続して行う必要性は高いと考える。

Ⅲ．受託事業

- 1． 三重県新人助産師合同研修
- 2． 助産師（中堅者）研修
- 3． 三重県認知症対応力向上研修
- 4． 母子保健体制構築アドバイザー事業

1. 新人助産師合同研修

担当者：大平肇子、永見桂子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚
地域交流センター 長谷川明子

【事業要旨】

三重県では、保健師助産師看護師法および看護師等の人材確保の促進に関する法律の改正に伴い努力義務化された新人看護職員研修の導入および実施を促進することをおして、助産師の離職防止・県内定着、資質向上を図っている。

本事業は、三重県の委託を受け、厚生労働省策定の新人看護職員ガイドラインにおける、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の到達目標、助産技術を支える要素「母子の医療安全の確保」「妊産褥婦及び家族への説明と助言」「的確な判断と適切な助産技術の提供」に則り、三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内の医療施設で働く新人助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をおして臨床実践能力育成を支援することにより、新人助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内の医療施設で働く新人助産師の臨床実践能力育成を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

新人助産師が助産師としてのモチベーションを維持しながら、主体的・積極的に学び続けることができるよう、助産師としての成長を支える機会を継続的に提供する。

I. 活動計画

三重県より「令和4年度三重県新人助産師合同研修事業」を受託し、三重県内の医療施設で働く新人助産師を対象とした4日間の研修をおして、新人助産師が就労後1年間で到達すべき助産技術の習得を支援する。これまでの本事業の評価にもとづき、今年度も「新人助産師集合!!三重の仲間で“わかち合い”“みがき合い”“高め合おう”」をテーマに、新人助産師の実践能力獲得を支援し、新人助産師同士の交流を深め、助産師としてのモチベーションを高めることを目標とした。

新型コロナウイルス感染症の拡大の影響をふまえ、本学の方針に従い感染防止対策を徹底するとともに、講義形態も対面形式とZoomを利用したオンライン形式を併用した。

昨年度は感染対策のためグループワークを減らしたところ、研修参加者アンケートにおいて、新人助産師同士の交流機会の確保への要望があった。そこで、今年度は1日目を除く3日間の研修において、対面およびオンラインともにグループワークを導入した。

<重点課題>

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和4年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 継続的な卒後教育プログラムの提供に向けて三重県内医療施設の産婦人科医、小児科医、助産師等関連専門職者との連携を強化できる。

3. 新人助産師同士の交流を深めることができ、研修修了後には助産師活動の現状や課題を共有できた、専門職者として研鑽し続けたいなどの回答が得られる。
4. 新人助産師 30 名程度が参加し、各日とも 90%以上の出席率を確保できる。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 研修プログラム

昨年度の本事業のアンケートで得られた新人助産師の研修会へのニーズをふまえて、4 日間の研修プログラムを企画し実施した（表 1）。

表 1 令和 4 年度三重県新人助産師合同研修プログラム

日程・場所	午 前（10：00～12：00）		午 後（1・2日目13：00～16：00、3・4日目13：00～15：30）	
11月5日 （土） 1 日目 大講義室	研修開始にあたって	周産期分野における感染看護の実際 【講義】10：30～12：00	母乳育児への支援の実際（13：00～16：00） 【オンライン講義・演習】	
	地域交流センター	市立四日市病院 副看護師長 感染管理認定看護師 奥村恵美子	関西国際大学保健医療学部看護学科 教授 松原まなみ	
12月10日 （土） 2 日目 大講義室	社会的ハイリスク妊産婦の看護・周産期母子ケアにおける連携 【講義・演習】		MFICUでの妊産婦の看護 （13：00～14：30） 【講義】	ハイリスク新生児の看護 （14：40～16：00） 【講義】
	三重大学医学部附属病院 看護師長・母性看護専門看護師 森貴かおり		三重県立総合医療センター 看護師長 佐藤里絵	三重県立総合医療センター 副看護師長 新生児集中ケア認定看護師 松野 薫
1月9日 （月） 3 日目 大講義室	早期新生児のアセスメント・異常の評価と対応 【講義・演習】		ケースシナリオを用いたグループディスカッション（13：00～15：30） 【講義・演習】	
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 新生児科医長 内閣 広匡		国立病院機構三重中央医療センター 看護部・新生児集中ケア認定看護師 栗本 淳子 副看護師長・新生児集中ケア認定看護師 廣野 絵美	
2月4日 （土） 4 日目 大講義室	産婦人科診療ガイドラインにもとづく緊急時の対応 【講義・演習】		事例検討をとおした助産師の判断と看護実践（13：00～15：30） 【演習】	
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 部長 前川 有香		国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 部長 前川 有香 副看護師長 鈴木 薫 副看護師長 東 真由美	

2. 研修の申し込み状況

8 月に県内医療施設 16 施設（病院 12 施設、診療所 4 施設）に開催案内を送付し、参加者を募集した。応募者は 10 施設 29 名であった。このうち、本学卒業生は 4 名であった。

3. 研修参加者の属性

参加者 29 名のうち、看護師の臨床経験を有する者は 7 名（24.1%）であった。就業場所は診療所 1 名（3.4%）、病院 28 名（96.6%）で、病院のうち周産期母子医療センターは 22 名（75.9%）であった。研修修了時点（回答者 21 名）での分娩介助件数は、「1～9 例」8 名（38.1%）、「10～19 例」と「30 例以上」がそれぞれ 2 名（9.5%）、「経験なし」9 名（42.9%）であった。

4. 研修参加者の受講状況

出席日数は皆出席 24 名 (82.8%)、3.5 日間 1 名 (3.4%)、3 日間 3 名 (10.3%)、半日間 1 名 (3.4%) であった。研修各日の出席者数と出席率は、1 日目 26 名 (89.7%)、2 日目 27 名 (93.1%)、3 日目 28 名 (96.6%)、4 日目 29 名 (100.0%) であり、概ね目標の 90%以上を確保した。オンラインでの参加は、1 日目 17 名 (65.4%)、2 日目 19 名 (70.4%)、3 日目 17 名 (60.7%)、4 日目 15 名 (51.7%) であった。



4 日目 事例検討をとおした助産師の判断と看護実践：グループワークの様子

<評価>

1. アンケートの回答状況

研修各日終了時のアンケートへの回答者(回収率)は、1 日目 25 名 (96.2%)、2 日目 22 名 (81.5%)、3 日目 23 名 (82.1%)、4 日目 21 名 (72.4%) であった。



1 日目 周産期分野における感染看護の実際：講義の様子(手指衛生の確認)

2. 研修内容

研修内容について、4 日間すべてにおいて回答者全員が、「期待通り」または「まあまあ期待通り」と回答し、肯定的評価を得た(図 1)。その理由として、『母乳育児の学びはなかなか自己学習では補えないので参加してよかった (1 日目)』『自分の病院では主に正常な分娩を取り扱うためハイリスクな視点で学べて良かった (2 日目)』『新生児のアセスメントの重要なポイントを理解できた (3 日目)』『異常の対応について自分が曖昧だと思っている所を多く取り上げてもらい実践に役立つ内容だった (4 日目)』などが挙げられた。

また、グループワークに対する肯定的な意見が自由記載の回答に散見された。具体的には、本日の研修内容で印象に残ったことや本事業に対する意見などにおいて、『話し合いにより他院の取り組みなどを知ることができた (2 日目)』『グループワークで他の人の考えについても知ることができ学びを深められた (3 日目)』『自分たちが困ったことに対し意見を出すことでより改善できることがわかった (4 日目)』などのグループワークをとおして学びを得られたことや、『他施設との交流がなかなかないため同期として話ができただことはとても良い経験だった』などの他施設の新人助産師との交流に対する肯定的な意見があった。

研修修了時のアンケートにおいて、本研修会全体の評価を把握した(回答者 21 名)。本研修が助産師としての基本的知識や技術の習得につながったか、および助産師としての意欲の向上につながったかについて、それぞれ回答者全員が「大変そう思う」または「まあまあそう思う」と回答した(図 2, 3)。助産師としての意欲の向上につながった理由として、『講義を受けて自分でも積極的に勉強をして知識と技術を身につける必要があると思った』のほかに、『他施設の方と関わり、自分も頑張ろうと思えた』『他の 1 年目の方で自分より経験があることを知り、意欲が高まった』などがあり、他施設の助産師との交流が意欲の向上につながっていた。また、本研修をとおして得

られた自己の課題として、『緊急時の対応』『新生児ケア全般、異常時の対応、正常分娩に関する知識』などの臨床実践に関する課題のほかに、『自分の苦手な範囲の勉強を進んですること』『さまざまな事例に遭遇した際、自分自身ができることを考えて実践していけるようもっと学習していきたい』『実施したことの振り返りを行い、技術・知識を身につけていく』などの自己研鑽や自己省察が挙げられた。

3. 研修会の運営

研修会の運営については、回答者の概ね全員が「よい」または「まあまあよい」と回答し、肯定的評価を得た（図 4）。その理由として、『質問の時間もしっかりと取ってもらえた』『音声が入らなかった時などすぐに対応してもらえた』『時間通りに運営されていた』などが挙げられた。

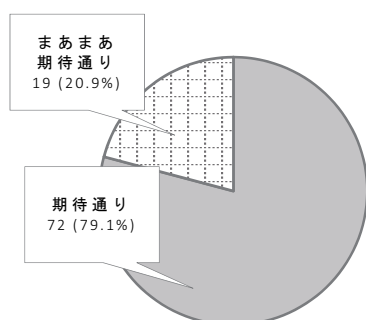


図 1 研修内容が期待通りであったか (n = 91)

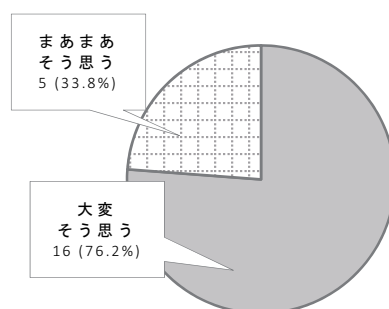


図 2 意欲の向上につながる研修であったか (n = 21)

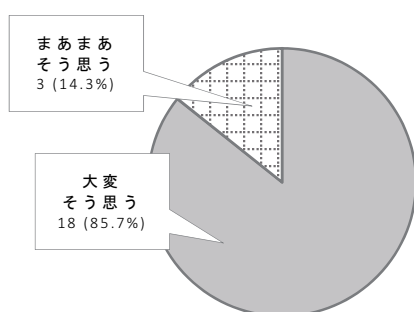


図 3 基本的知識や技術の習得につながる研修であったか (n = 21)

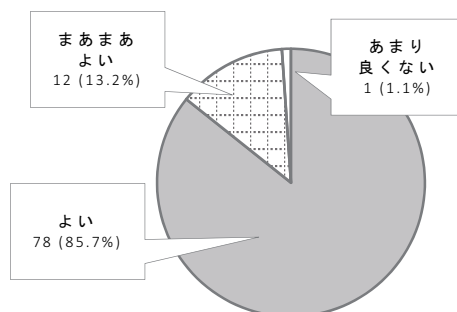


図 4 研修会運営に対する評価 (n = 91)

Ⅲ. 今後の課題

昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染予防に留意しつつ本研修事業を展開することができた。上述の評価から、本研修事業が新人助産師の臨床実践能力育成ならびに助産師としてのモチベーション向上に資する研修会であったと考える。また、グループワークが新人助産師同士の交流の促進だけでなく、学びや意欲の向上につながっていることが示された。次年度も開催時期・方法・内容を工夫して、所属施設を越えた助産師同士の交流によるつながりを強化し、助産師としてのモチベーションや助産観を高めあう関係性を醸成していくことが課題である。

2. 助産師（中堅者）研修

担当者： 大平肇子、永見桂子、岩田朋美、杉山泰子、市川陽子、辻まどか、日置理瑚
地域交流センター 長谷川明子

【事業要旨】

三重県では、周産期医療の現場において慢性的な助産師不足、地域特性に基づく助産師の偏在などの課題を抱えており、助産師の県内定着・継続就業支援に向けた取り組みがなされてきた。県内で就業する助産師が、妊産婦の多様なニーズに応え、質の高い助産ケアを提供し、さらに関係職種と連携・協働するためには、助産師の学習ニーズや成長過程に応じた研修体制を整備し、助産実践能力獲得を支援することが必要である。

本事業は、三重県の委託を受け、県内で就業する中堅層以上の助産師を対象とした研修を企画し提供することにより、助産師の自律、実践能力向上に資することを目的とする。

【地域貢献のポイント】

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の学習ニーズに応え、継続的な卒後教育プログラムの提供をととして臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、助産師のキャリアディベロップメントに資する。

三重県内で就業する中堅層以上の助産師の臨床実践能力や助産師育成能力の獲得を支援することにより、地域住民に提供される看護の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

新型コロナウイルス感染症の影響をふまえ、開催時期・方法・内容を工夫し、助産師にとって安心して受講できる環境を整え、魅力ある研修としていくことが課題である。

I. 活動計画

三重県より「令和4年度助産師（中堅者）研修事業」を受託し、三重県内の医療施設・教育機関で就業する中堅層（助産師経験年数概ね5年以上および指導者的立場の助産師）の助産師を対象とした3日間の研修を実施する。昨年度の研修内容・運営方法等の評価に基づき、今年度も「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに、助産師の自律、メンタルヘルスケア、地域における子育て支援などのマタニティケア能力とともに、助産師の教育指導調整能力の強化をめざした研修を企画し、中堅層以上の助産師の自律、実践能力向上に資することを目標とした。

新型コロナウイルス感染拡大の影響をふまえ、本学の方針に従い、感染防止対策を徹底するとともに、講義形態も対面形式とオンライン形式を併用し、研修参加者が事前にいずれか選択できるように配慮した。県外在住の講師による講義は所属先等からのオンライン講義とした。アンケート実施にあたってはMicrosoft Formsを活用した。

＜重点課題および数値目標＞

1. 昨年度の研修参加者への調査結果を令和4年度卒後教育プログラムに反映できる。
2. 研修参加者から、自らや就業施設の臨床実践能力や助産師育成能力の向上につなげることができるとの回答が得られる。

3. 研修参加者（実人数）30名程度、かつ各日とも80%以上の出席率を確保できる。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 研修プログラムについて

令和4年10月22日（土）、11月12日（土）、12月17日（土）の3日間（10：00～15：30）の研修プログラムを実施した（表1）。

研修初日には、助産師が対象者と助産師自身の健康を追求すべく、「女性のためのトータルヘルスケア」を学び、食生活をはじめ、ストレスの捉え方やストレス対処法等について理解を深める。「スタッフのやる気を引き出すコミュニケーション術」では、演習によりコミュニケーションの特徴や仕組みを学び、スタッフ間におけるコミュニケーションの課題を得る機会とする。2日目には「胎児・母体の急変時の対応」について学び、事例を通して母体救命のシミュレーションおよびブラッシュアップの機会とする。「周産期のメンタルヘルスケア」では、対象者への具体的な支援方法を学び、精神疾患を抱えた対象者について関心を深める。3日目には「外国人の子育て支援から考える妊産婦のケア」について学び、外国人の子育て支援の現状を知り、ソーシャルリソースおよび支援方法について理解を深める。「産後ケア事業の実際 行政と臨床の連携と課題」では、制度を正しく理解するとともに、助産師に必要な実践能力を再考し、支援における助産師の役割拡大について考察する機会とする。

表1 令和4年度助産師（中堅者）研修プログラム

	午前（10：00～12：00）	午後（13：00～15：30）
10月22日 （土） （1日目）	女性のためのトータルヘルスケア 【講義・演習】	スタッフのやる気を引き出すコミュニケーション術 【オンライン講義・演習】
	タカオカクリニック院長 落合広子	（株）オフィスブレスユー 服部恵美
11月12日 （土） （2日目）	胎児・母体の急変時の対応 【講義】	周産期のメンタルヘルスケア 【オンライン講義】
	国立病院機構三重中央医療センター 総合周産期母子医療センター 部長	岐阜保健大学看護学部看護学科 講師
	前川 有香	小野 悟
12月17日 （土） （3日目）	外国人の子育て支援から考える妊産婦のケア 【講義】	産後ケア事業の実際 行政と臨床の連携と課題 【講義】
	NPO法人 愛伝舎 理事 高田短期大学 外国人留学生支援室 伊藤由香	くつろか助産院 院長 濱地祐子

2. 研修参加者の受講状況について

8月に県内医療施設112施設（病院15施設、診療所45施設、助産所52施設）、教育機関4施設に開催案内を送付し、参加者を募集した。応募者は1日目15名、2日目

25名、3日目21名であり、のべ応募者数は61名であった。応募者（実人数）31名の研修申込み日数の内訳は1日のみ9名、2日間14名、3日間8名であった。

研修各日の出席者数と出席率（出席者／応募者）は、1日目10名（66.7%）、2日目20名（80.0%）、3日目17名（81.0%）であった。出席者のうち授業形態としてオンライン形式を選択した者は、1日目6名（60.0%）、2日目18名（90.0%）、3日目14名（82.4%）であり、いずれも6割を超える状況であった。研修申込者の就業場所は病院13名、診療所8名、助産所8名、教育機関2名であった。研修参加者は29名（実人数）であり、出席率は80%に至らなかったが、研修参加者数は数値目標の30名程度を達成することができた。

<評価>

研修参加者のべ47名のうち、研修各日終了時のアンケートの回答者（回収率）は、1日目8名（80.0%）、2日目19名（95.0%）、3日目15名（88.2%）であった。

研修内容が期待通りであったかについては、1日目は、期待通り6名（75.0%）、まあまあ期待通り2名（25.0%）であり、その理由は「聞きたかったことが聞けた」、「定説な視点を教えていただき実践の振り返りになった」などであった。研修内容について「妊娠期は五感を研ぎ澄まし自分に向き合う時期であり、本研修の学びを産前ケアに取り入れたい」、「コミュニケーションは人間関係にとって重要であり、自分も相手も気持ちよくなれる関係性を築けるよう心掛ける」などであった。2日目は、期待通り15名（78.9%）、まあまあ期待通り3名（15.8%）であり、その理由は「具体的な事例を通して理解を深めることができた」、「急変時対応、精神疾患看護とにもよくわかった」、「母体救命の知識をブラッシュアップできた」などであった。3日目は、期待通り12名（80.0%）、まあまあ期待通り3名（20.0%）であり、「産後ケアでその方の生き方まで見据えてケアされているのがさすがだと思った」、「自分の職場で活かせる内容」、「テーマを超えて助産師としてどうありたいかを考えることができた」、「外国人の子育ての支援について、現状やソーシャルリソースを知ることができた」などの理由が挙げられた。

本研修が自身または就業施設の助産実践能力の向上につながるかとの問いに、1日目には、大変そう思う6名（75.0%）、まあまあそう思う2名（25.0%）であり、その理由として「アーユルベータは健康を追求するうえでとても参考になる知識」、「職場でのコミュニケーションの実践にとりいれたい」などが挙げられた。2日目には、大変そう思う12名（63.2%）、まあまあそう思う6名（31.6%）、あまりそう思わない1名（5.3%）であり、「急変時の対応、メンタルヘルスケアに役立てたい」、「実際にシミュレーションを行っていききたい」、「精神障害を抱える方がその人らしく生きていくために、希望が見いだせるような支援を目標とするなど支援方法の参考となった」などが挙げられた。3日目には、大変そう思う11名（73.3%）、まあまあそう思う4名（26.7%）であり、「外国の方へ言語ごとの資料を準備する」、「赤ちゃん訪問や今後の産後ケアで関わるときに実践したい」などが挙げられた。

研修をとおして得られた今後の課題として、1日目には「対象者に応じたコミュニケーション」、「スタッフ間のコミュニケーションをもっとスムーズにおこなう」などが挙げられた。2日目は「施設で急変時のシミュレーションを行う」、「超音波診断時

の臍帯の状態の確認」などが挙げられた。3 日目は「信念をもってこの仕事に従事していくこと」、「産後ケアで実施したことを数値化したり、事例にまとめたりすること」、「三重県内の母子保健を取り巻く活動が、地域により違うことが分かった」、「参考になるシステムを取り入れて活動したい」などが挙げられた。今後開催を希望する研修内容として、「子どもの発達について」、「乳幼児の精神発達」、「具体的な乳房管理方法とトラブル対応」、「グリーフケア」、「災害発生時の対応」、「精神的ケアを深く学びたい」などが挙げられた。

研修会運営については、1 日目には、よい 6 名 (75.0%)、まあまあよい 2 名 (25.0%) であり、その理由は「オンラインで素晴らしい講師の話が聞け、ディスカッションの時間があったこと」、「研修会場への案内がわかりやすく、緊張をさそうような空間でもなく雰囲気がよかった」、「スムーズな運営、丁寧な対応であった」などであった。2 日目には、よい 15 名 (78.9%)、まあまあよい 4 名 (21.1%) であり、「午前中勤務で、午後のみの参加でしたが、それを了承してもらえた」、「はじめ音声聞き取りにくかったが、早期に対応してもらえた」などの理由が挙げられた。3 日目には、よい 14 名 (93.3%)、まあまあよい 1 名 (6.7%) であり、「画像も見やすく、スムーズに受講できた」、「有益な内容だった」などが挙げられた。

本事業に対する意見として「素晴らしい内容なのに参加者が少ないのはもったいない」「半日単位での受講もあると良い」「申し込みを各回の前月末にしてもらえると勤務希望がつけやすい」などがあった。

Ⅲ. 今後の課題

今年度も「助産師としての役割拡大をめざして～得意分野を広げよう～」をテーマに開催した。中堅層以上の助産師は、「急変時の対応強化のため施設単位でのシミュレーションの実施」、「指導者としてのコミュニケーションスキルの向上」、「産後ケア事業におけるケア内容の充実」、「外国人の子育て支援」、「女性をトータルにとらえた助産ケアの充実」などを課題と捉えており、助産師としての役割拡大へとつながる研修を提供できたと考える。研修参加者（実人数）は数値目標を概ね達成し、感染防止対策を徹底し、受講形態を各自の事情に応じて選択できるようにした点が好評であった。

来年度は、新型コロナウイルス感染症の予防対策は緩和されることが見込まれるが、助産師の多様な勤務形態に対応した開催方法を検討するとともに、助産師にとって安心して受講できる環境を整え、魅力ある研修としていくことが課題である。



ハイブリッド方式で開催しました
心と体をほぐす体操でリラックスしました

感染対策を講じてグループワークをしています
オンライン参加の方と意見共有もしました



3. 三重県認知症対応力向上研修

担当者：地域交流センター 林辰弥、栗本真弓

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託をうけ、病院勤務以外の看護師等医療従事者及び病院勤務の看護職員の認知症看護対応力向上のため、下記の研修を実施するものである。

1. 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修事業

病院勤務以外（診療所・訪問看護ステーション等）の看護師等の医療従事者に対し、認知症の人や家族を支えるために必要な基本知識や、認知症ケアの原則、医療と介護の連携の重要性等の知識を修得するための研修を実施する。認知症の疑いのある人に早期に気づき、地域の認知症の人への支援体制構築の担い手となることを目的とする。

2. 看護職員認知症対応力向上研修事業

三重県内の指導的立場の看護師に対し、医療機関等に入院から退院までのプロセスに沿った必要な基本知識や、個々の認知症の特徴などに対する実践的な対応力を習得し、同じ医療機関等の看護職員に対し伝達をすることにより、医療機関内等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を目的とする。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等で認知症ケアに携わる医療従事者の質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。
- 診療所、訪問看護ステーション、介護事業所等で日常的に認知症ケアに携わる医療従事者の質の向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

看護職員認知症対応力向上研修は、ニーズがあり、受講者の満足度も高いため、受講者数、開催時期、開催場所などを慎重に検討し、より効果的な開催に勤める。

I. 活動計画

厚生労働省老健局長通知「認知症地域医療支援事業の実施について」の標準的なカリキュラムに基づき研修を実施する。

1. 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修（半日研修）【新規】

開催回数：2回

対象者：病院勤務以外（診療所・訪問看護ステーション・介護事業所等）に勤務する看護師・保健師・理学療法士・作業療法士・薬剤師・歯科衛生士・栄養士等

定員：各回 100名

会場：県立看護大学

2. 看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）【継続】

開催回数：1回

対象者：三重県内の医療施設で勤務する指導的立場の看護職員で、3日間の研修に全て参加し、研修受講後に自施設での研修を実施し実施報告書を提出する事ができる者

定 員：50名程度

会 場：三重県立看護大学

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

看護職員認知症対応力向上研修（3日間研修）は、県内の93病院へ、病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修（半日研修）は、訪問看護ステーション、地域包括支援センターなど約900施設・団体に開催案内を送付・申し込みを受け付け、受講決定をし、申込担当者宛に受講決定通知を送付した。開催場所は、駐車場があり広い講義室があることから、本学の講義室とした。会場入り口に自動検温システムを設置し、手指の消毒とマスクの着用をお願いし、GW時にフェイスシールドを配布し着用を促した。COVID-19の感染状況は、刻々と変化していったが、参加者及び講師陣のご理解とご協力により、いずれの研修も対面で実施することができた。

研修修了者には、三重県知事より修了証書が交付された。

1. 病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修（半日研修）【新規】

1) 開催日・会場・受講者数及び修了者数

	開催日	講 師	申込者数	受講者数	修了者数
第1回	10月16日（日）	六角僚子	101人	91人	89人
第2回	12月11日（日）	六角僚子	57人	48人	39人

2) 内容

内 容	時 間	受講者数
I 基本的知識 認知症の人や家族の視点に立ち、その生活を支えるために必要な基本的な知識を習得する	(30分)	139人 修了者数 (121人) ※修了証書は 医療従事者のみ
II 地域における実践 認知症の人のQOLの向上を図るため、コミュニケーション、ケア及び多職種連携による支援の実践を理解する	(70分)	
III 社会資源等 認知症の人を取り巻く、医療・介護及び地域の社会資源の活用の重要性を理解する	(45分)	

講師は、本学の在宅看護学教授に依頼した。基本的知識編は、DVD視聴を交え四大認知症の理解、実践編は先生の豊富な経験を通じた対応、社会資源編は、ファシリテーターとして在宅看護学講座の教員及び院生の協力を得て、多職種でグループワークをして事例検討を行った。

3) アンケート結果

受講生アンケート（1回目回収率 91.2%・2回目回収率 56.3%、全体回収率 79.1%）

1回目と2回目の研修内容は同じであり、アンケート回収率の差は、1回目は会場でアンケート用紙を配布、2回目は Forms で回収したことでアンケート回収率に大きな差が生じた。対面の研修では、アンケート用紙に記入する方が回答しやすいと思われた。受講生の年代は 40 代・50 代が 33.6%で最も多く、次いで 30 代 17.3%であった。職種は、看護師が最も多く 52.5%、次いで歯科衛生士 15.1%、介護職種が 12.9%、理学療法士 7.25%、保健師 5.8%、作業療法士 3.6%、栄養士 2.9%であった。施設別では、訪問看護ステーションが 50.0%と最も多く、次いで介護施設 11.3%、地域包括 10.9%であった。研修を受けるきっかけ（複数回答）は、「認知症に興味・関心があるから」が 43.2%で最も多く、「自己研鑽」22.5%、「上司に薦められた」14.2%であった。アンケートの自由記載では、「わかりやすい講義だった」「認知症について詳しく知れた」「テンポが良く聴きやすかった。DVD の事例提示もあり具体的な症状をイメージしやすかった」「基礎から対応、事例まで学び、日々の対応について確認することができた」との意見が多かった。

<評価>

新規事業であり定員 100 名は難しいと思えたが、様々な組織団体に研修案内を送るとともに、個別に連絡を取り、研修の主旨・内容をご理解いただいた。訪問看護ステーション協会・栄養士会・理学療法士会・作業療法士会・薬剤師会・歯科衛生士会からは、会員へ研修案内を発出していただくことができた。参加しやすい曜日を聞き取り、日曜日の午前開催とし 158 名の受講申し込み 139 名の参加が得られた。この中には 18 名の介護職種が含まれている。全体評価は、とてもよかった 73.6%、よかった 24.5%、あまり良くなかった 1.8%あり「他職種間のディスカッションの時間が短かった」というものであった。



講義



グループワーク発表



講師

2. 看護職員認知症対応力向上研修(3日間研修)

認知症対応力向上研修は、診療報酬加算 2 対応研修であり、認知症の病態を正しく理解し、日々進化するその治療方法や対応の仕方を 3 日間で学べる貴重な機会である。

1) 開催日・会場・受講者数及び修了者数

開催日	会場	受講者数
9月11日(日) 9月12日(月) 9月13日(火)	対面 県立看護大学多目的講義室	受講者：54人 修了者：54人

2) 内容

【基本知識編】認知症患者の入院から退院までの基本的な知識を習得。医師【180分】

【対応力向上編】個々の認知症の特徴・症状に対するより実践的な対応力（アセスメント、看護方法・技術、院内外連携手法）を習得。社会福祉士・精神看護専門看護師【330分】 認知症看護認定看護師【演習 150分】

【マネジメント編】 マネジメント（人員、環境、情報管理等）の実践的な対応方法及び教育技能を習得。認知症看護認定看護師【講義 180分：演習 240分】

3) アンケート結果

三重県内の 32 医療施設から参加があった。地域別の施設及び受講者としては、北勢（14 施設：25 名）、中勢（14 施設：21 名）、南勢（3 施設：5 名）、東紀州（1 施設：3 名）であった。

受講者アンケート（回収率 100%）によると、受講者の年代は、40 代が最も多く 51.9%、次いで 30 代 22.2%、50 代 16.7%、20 代 7.4%、その他 1.9%であった。受講理由（複数回答）は「勧められた」が 50.8%と最も多く、次いで「自己研鑽」19.7%、「認知症に興味がある」18.0%の順であった。研修の全体評価では、とてもよかった 61.1%、よかった 37.0%を合わせて 98.1%の回答があった（無回答 1 人 1.9%）。

4) 研修修了後の施設研修

研修修了者には、医療機関等での認知症ケアの適切な実施とマネジメント体制の構築を目的に、自施設における研修の実施を研修受講の要件としており、51 名（提出率 94.4%）から報告書が提出された。未提出 3 名は、体調不良 2 名及び失念 1 名であった。

<評価>

会場の広さ、検温などの体調管理、フェイスシールド、定期的な換気等を行い対面開催することができた。北勢、中勢、南勢、東紀州地域から受講があり、広域的に認知症ケアに携わる医療従事者の質の向上に寄与できたと考える。



精神看護専門看護師講義



マネジメント編演習

Ⅲ. 今後の課題

新規事業の病院勤務以外の看護師等認知症対応力向上研修は、広く多職種の参加が得られやすいように、様々な組織団体に協力を仰ぎ、意見を求めながら、参加者が充実した研修を受けられるように、協力体制を構築していくことが課題である。

看護職員認知症対応力向上研修については、受講者の満足度も高く、自施設での波及効果も期待できることから、研修提供体制を整えて定員の見直しの検討が求められる。

いずれの研修についても、受講者数、開催時期や開催施設など慎重に検討し、より効果的な開催に努める必要がある。

4. 母子保健体制構築アドバイザー事業

担当者：地域交流センター 林辰弥、栗本真弓

【事業要旨】

本事業は、三重県の委託を受け、各市町における地域課題の分析及び事業評価、支援体制の整備、支援ネットワークの強化等、対象市町に応じた内容について、母子保健体制構築アドバイザーが必要な助言・指導を行うものである。

1. 個別支援型アドバイザー派遣事業

市町からの申請に基づき、個別支援型アドバイザーを決めて市町に必要な助言・指導等を行う。

2. 広域支援型アドバイザー派遣事業

市町からの申請の有無にかかわらず、随時アウトリーチを行い市町の現状を把握し、課題や今後の取組み等を整理し、助言・指導等を行う。

3. ミニ講座&情報交換会

抽出された地域課題を解決するため、市町やその関係機関との情報共有や学びの場を設ける。

【地域貢献のポイント】

- 母子保健対策に携わる行政保健師の質の向上に貢献する。
- 地域の実情に応じた母子保健体制づくりを支援し、県内の母子保健対策の充実・強化に貢献する。
- 市民に寄り添う行政保健師のマインドの醸成に寄与する。

【昨年度からの課題】

COVID-19 との共存は3年目となり、感染拡大予防、ワクチン接種等に迫られながらも、地域特性を考慮した母子保健事業の必要性和意味を再構築し、事業を推進できるよう、人材育成を含めた活動支援を検討する。

I. 活動計画

三重県における母子保健体制構築アドバイザー事業実施要領に基づき事業を実施する。

1. 個別支援型アドバイザー派遣

個別支援型アドバイザーによる助言・指導を希望する市町からの申請を受付けて、申請内容を審査し三重県が認めたアドバイザーを選定して派遣指導を行う。

2. 広域支援型アドバイザー派遣

県から依頼された（産後ケア・新生児聴覚スクリーニング）項目、昨年度の訪問から導かれた事項を加味し、訪問市町（15市町）を決定し、可能な範囲で管内保健所の保健師と同行訪問を行う。

3. ミニ講座&情報交換会の開催

訪問等で把握した現状と課題からテーマを選定し、講義30分と質疑・情報交換30分

のミニ講座を4回開催する。

II. 活動の結果と評価

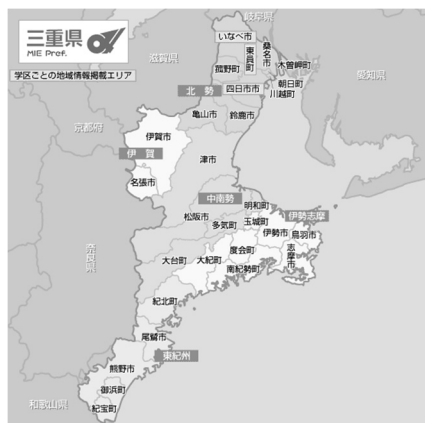
< 結果 >

1. 個別支援型アドバイザー事業

- 1) 依頼件数 1件 A市より7月に申請があり受理し、担当する個別支援型アドバイザーを決めて、打合せ1回と研修会2回を合わせて3回の派遣を行った。
- 2) 実施 1回目は、市の現状や全体の流れ、研修会の進め方について打合せを行い、2回目・3回目は、参加者が事前に書き込んだ地域ケアシステム様式1・3・4を基にして、現状の洗い出しや情報の共有、アドバイザーによる講義及びGWを行った。
- 3) 結果 参加者は事前に地域ケアシステムを使ってアセスメントを行い、現状の把握が不十分であることを再認識することができ、GWで補い合うことができた。本研修を行ったことは、個人・集団の双方について、課題に気づく機会になった。
- 4) 評価 個別支援型アドバイザーは、直接A市に出向き2回の研修会を通じて助言・指導を行うことができた。研修参加者は、業務多忙の中にありながら事前課題に取り組み、問題意識をもって講義やGWに参加出来たことで、学習意欲・力量形成など今後に繋がる研修会となった。

2. 広域支援型アドバイザー派遣事業

下記の市町を訪問した。



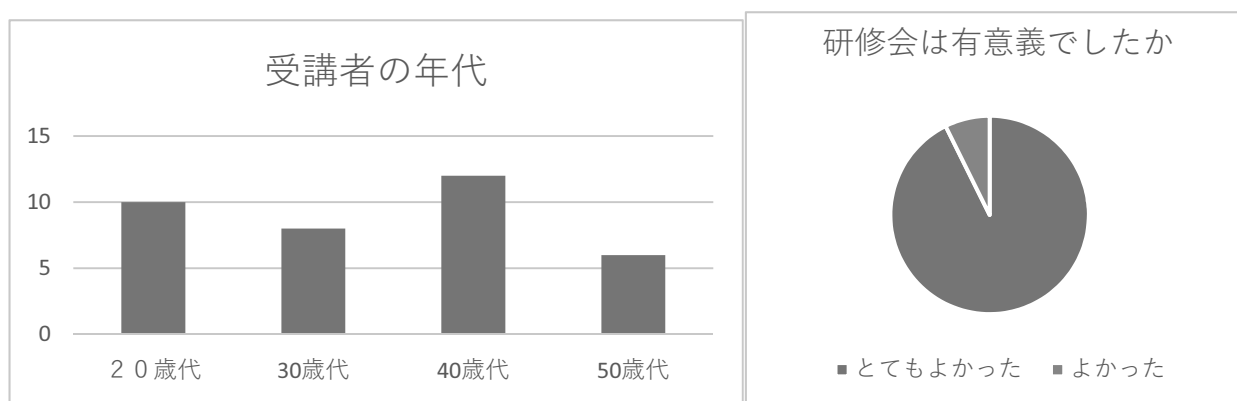
地域	市	町
北勢	桑名市 鈴鹿市	東員町
		朝日町 菰野町
中勢	津市 名張市	多気町
		明和町 大台町
南勢	志摩市	度会町
東紀州	尾鷲市	紀北町

- 1) テーマ 産婦健診の現状、子育て世代包括支援センターの運営、母子保健支援の途切れが気になる時期やわが町の強み、特定妊婦（若年・外国籍・多胎）の現状、市町ごとに（新生児聴覚スクリーニング検査・産後ケアなど）聞き取りを実施した。
- 2) 時期 7月から1月にかけて14市町を訪問することができた。
- 3) 結果 14市町を訪問して現状を聴くことができた。予定していた1市は、コロナ感染拡大により訪問が延期となった。令和4年4月に産婦健診が集合契約になったことにより、関係機関との連携が進み拡大でき、スムーズな情報共有に繋がっていることを確認した。いずれの市町も「丁寧に聴き、寄り添いながら」母子保健事業を実施しており、更に、ワクチン接種や給付金事務など通常業務以上に業務量が増加しており人員の確保が難しい市町が多いことや、職員の心身にわたる健康管理

や相談体制の必要性を感じた。市町は所有する実績やデータの分析評価、可視化する方法等や人材育成に困難を感じていることが把握できた。

- 4) 評価 子育て世代包括支援センターの開設等に合わせて母子保健と児童母子等の部・課を統合した市町は、令和6年度の子ども家庭センターに向けて心理的準備が出来ているように感じた。連携の手段が確立していない市町は今後の体制構築に不安を感じているようだ。人・モノ・金等準備する詳細を早く示してほしいことや、事業評価・経年評価や分析に取組みたいが、方法（誰が、どのように）や資源がなく困っていることがわかった。また、市町により人材育成の手段や方法が確立できていないことも分かった。

3. ミニ講座&情報交換会の開催



- 1) 実施 ミニ講座&情報交換会（ZOOM 使用）時間は午前 10 時 30 分から 11 時 30 分

日 程	内 容	申 込	参加者
9 月 2 日 (金)	【ミニ講座】災害時の母子の健康課題と保健師の役割 国立保健医療科学院 健康危機管理研究部 主席主任研究官 奥田博子	23 名	15 名
10 月 18 日 (火)	【ミニ講座】妊娠SOSみえの相談現場から ～特定妊婦の地域連携による支援～ NPO法人 MCサポートセンターみっくみえ 代表 松岡典子	25 名	20 名
12 月 6 日 (火)	【ミニ講座】若手医師から見た公衆衛生 ～アフリカ・東南アジアをめぐる～ 滋賀家庭医療学センター総合診療／新家庭医療専攻医 向原千夏	12 名	11 名
2 月 15 日 (水)	【ミニ講座】生後早期から始めるスキンケア ～お子さんの肌に合ったケアを継続するために～ 白子クリニック小児科 外来看護師主任 川井田直子 外来看護師 喜田 早苗 外来看護師 山口真奈美	16 名	13 名

- 2) 結果 1 時間の WEB 研修であり参加しやすいとの意見がある反面、毎回の申込者は市町数の半分以下であった。実施評価は、よかった、とてもよかったで参加者の 100% であった。テーマは、災害時から妊娠 SOS、スキンケア等、幅広い内容で開催でき、保健師の情報把握と交流の機会を提供することができた。
- 3) 成果 日常的に様々な相談業務に携わる市町保健師等に、現状や最新情報をコン

パクトに提供することができ、参加者の質問に答えることで、日頃の疑問を解消することに繋がり、各方面の取組や関連する話題に参加者と意見交換することで学習意欲を刺激することに繋がった。

- 4) 評価 1 時間程度の WEB 研修は、集中して参加することができるとの意見が多く、継続的实施することが望まれる。話題(トレンド)に即応することも求められるが、発達・災害・療育や虐待など普遍的な課題に対する最新情報や対処法などを 1 時間に凝縮して実施することが重要であり、業務多忙な行政保健師等の他市町との交流と情報共有の機会としても継続が望まれる。
- 5) 今後 対応方法(精神疾患・虐待・医療的ケア児・産後うつ・ハイリスク者などへの支援、係わり方など)、情報の更新(災害・発達の理解・SNS の活用など)、保健師マインド(やっぱり保健師って素敵な仕事だと感じられる研修)等であった。

Ⅲ. 今後の課題

2022 年の出生数の速報値では、2016 年に 100 万人を切ってからわずか 6 年で 20% 減の 80 万人を下回った。当初の見込みよりも 8 年も早く 80 万人を下回ったことになる。1 人の女性の一生涯に産む子供の数を示す合計特殊出生率は、2.08 を超えないと人口の減少に繋がると言われる。我が国が、2.08 を上回っていたのは、1973 年の 2.14 まで遡ることになる。そんな中、虐待相談件数は増加の一途をたどり 207,660 件(令和 3 年度)と平成 2 年の 1101 件から 180 倍以上となっている。母子保健事業は、妊娠・出産・子育てに欠かせない支援でありサービスである。望まれて、健やかに妊娠・出産・育児期を経験できるように各市町・県の体制構築は最重要課題であり、母子保健に携わる市町や県の保健師たちへの協力支援は不可欠である。

三重県の母子保健体制の充実・強化を図るためには、市町の抱える問題を可視化するという課題がある。この課題を解決するために大学の強みを生かした方策を模索し、三重県内の市町の課題に対応するためにも、母子保健体制構築アドバイザー事業を市町が積極的に利・活用できるよう極め細やかな働きかけ・訪問などの継続が求められる。

Ⅳ. その他：母子保健担当者意見交換会

下記の担当者会議に参加し意見を述べることができた。

保健所管内	日時	場所	内容
桑名	令和 4 年 11 月 7 日 (月)	桑名庁舎 第 2 会議室	・県から情報提供(子ども家庭センター)等 ・各市町の母子保健体制の現状と課題について ・母子保健事業における意見交換 ※松阪地域は他用務の関係で不参加。四日市地域は延期。
鈴鹿	令和 4 年 10 月 3 日 (月)	鈴鹿庁舎 4 1 会議室	
津	令和 4 年 10 月 19 日 (水)	津市役所 中央保健センター	
伊勢	令和 4 年 10 月 25 日 (火)	伊勢庁舎 2 0 1 会議室	
伊賀	令和 4 年 8 月 24 日 (水)	オンライン	
尾鷲・桑名	令和 4 年 11 月 9 日 (水)	尾鷲庁舎	

(担当：栗本真弓)

IV. リカレント教育

1. 認定看護師教育課程（B 課程）

「感染管理」

2. 認定看護師フォローアップ研修

1. 認定看護師教育課程（B 課程）「感染管理」

担当者：地域交流センター 林辰弥、大川明子、川島好子、森有美子

【事業要旨】

本教育課程は、看護の質向上及び看護職者のキャリア支援に向けた教育を行うことを目的に、感染管理領域において高度で専門的かつ質の高い看護を提供できる人材を育成する。

【地域貢献のポイント】

新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続く中、感染管理に関する高度で専門性のある知識、看護技術、特定行為を習得し、水準の高い看護実践を多職種と連携し、協働して提供できる人材を育成することにより、地域社会の多様な保健・医療・福祉施設における感染管理の質的向上に貢献する。

I. 活動の実際

1. 教育期間：5 月 16 日～2 月 6 日
2. 授業時間：90 分を 1 時間とし、原則 5 時限
3. 授業科目：

共通科目	時間数	専門科目（認定看護分野）	時間数
1. 臨床病態生理学	40	1. 感染管理学	15
2. 臨床推論	45	2. 疫学・統計学	30
3. 臨床推論：医療面接	15	3. 微生物学	30
4. フィジカルアセスメント：基礎	30	4. 医療関連感染サーベイランス	45
5. フィジカルアセスメント：応用	30	5. 感染防止技術	32
6. 臨床薬理学：薬物動態	15	6. 職業感染管理	15
7. 臨床薬理学：薬理作用	15	7. 感染管理指導と相談	15
8. 臨床薬理学：薬物治療・管理	30	8. 洗浄・消毒・滅菌とファシリティ・マネジメント	15
9. 疾病・臨床病態概論	40	(小計)	197
10. 疾病・臨床病態概論：状況別	15	専門科目（特定行為研修区分別科目）	
11. 医療安全学：医療倫理	15	1. 栄養及び水分管理に係る薬剤投与関連	22
12. 医療安全学：医療安全管理	15	2. 感染に係る薬剤投与関連	39
13. チーム医療論（特定行為実践）	15	(小計)	61
14. 特定行為実践	15	演習及び臨地実習	
15. 指導	15	統合演習	15
16. 相談	15	臨地実習（認定看護分野）	150
17. 看護管理	15	臨地実習（特定行為区分）	30
(小計)	380	(小計)	195
合 計		833 時間	

* 共通科目 1～14、専門科目の特定行為研修区分別科目は、e-ラーニングでの学習形態を活用

4. 令和4年度研修生の概要

受験者 42 名

合格 16 名（男性 6 名、女性 10 名）、

平均年齢 38.7 歳

所属施設：病院 16 名

（三重県内 11 名、県外 5 名）



5. 令和5年度入学選抜の概要

2月13日入学選抜試験 応募者 36 名、受験者 30 名、合格 20 名

II. 活動の結果と評価

認定看護師教育課程（B 課程）「感染管理」第 1 期生 16 名の入学式を 5 月 16 日実施した。B 課程とは、日本看護協会において認定分野と特定行為研修を組み込んだ研修である。本教育課程は、特定行為研修指定研修機関である三重大学医学部附属病院と共同し、開講することができた。

5 月～7 月 e-ラーニングを活用する自己学習の授業、8 月～9 月対面授業、e-ラーニングの期間は登校日を設け、面談、実習（観察評価）、演習を実施した。

研修生からの授業評価アンケートの結果は、「全体的に満足している」（94％）であった。e-ラーニングの授業について「時間調整しやすく、自分のタイミングで学習ができる」「孤独な環境の中で学習しているため、他の研修生の進捗状況がわからず不安になる」という意見があった。対面授業は、グループディスカッションや演習が多く、達成感につながったと考える。e-ラーニング授業の進捗状況の把握、研修生同士のコミュニケーションを図るために登校日を利用し、支援していく。

臨地実習は、県内 11 施設の協力を得て、1 施設に研修生 1～2 名を配置した。認定看護分野は感染管理認定看護師が指導・評価を行い、特定行為区分は指導医が特定行為 3 行為（15 症例）の記録とディスカッションを通して、指導・評価を実施した。特定行為の症例記録は、身体所見、患者の診断、アセスメント、治療計画など医師の視点から記録を評価するため研修生は何度も修正を繰り返し、合格することができた。認定看護分野と特定行為区分の臨地実習を 28 日間 1 施設で行う教育機関は本教育課程のみであり、実習施設の協力と指導者の熱心な指導により実践することができた。

研修生 16 名は 2 月 6 日修了式を迎え、本教育課程、特定行為研修を修了した。

新型コロナウイルス感染症の拡大・まん延している中で、医療機関や地域・福祉施設が感染管理認定看護師へ期待することは、感染対策の強化だけでなく、指導力、総合的調整力を有する人材を望んでいるため、研修生だけでなく、修了生の支援も必要と考える。

III. 今後の課題

令和 5 年度第 2 期生 20 名の入学を予定している。研修生にとって充実した学習環境を確保し、引き続き教育体制や実習環境を整備し、研修生の実践力が向上できる指導・支援体制を整える。

今後、特定行為研修を修了した感染管理認定看護師が高い能力を発揮し活躍することができるよう支援するためにフォローアップ研修の内容を検討する。

2. 認定看護師フォローアップ研修

担当者：地域交流センター 林辰弥、栗本真弓

【事業要旨】

本学認定看護師教育課程「認知症看護」修了生を対象としたフォローアップ研修を開催し、最新の知見や技術の習得によって認定資格取得後の各自の活動を振り返り、自己研鑽だけでは補えない資質の向上を図る。

【地域貢献のポイント】

- 医療施設等の現場で認知症ケアの質の向上に貢献する。
- 研修で培った専門的な知識や実践的対応力を共に働く看護職や他の職種の人に指導できる人材の育成に貢献する。

【昨年度からの課題】

対面開催を望む意見も聞かれており、COVID-19の感染状況に注視し、ハイブリッド開催を検討する。さらに、認知症認定看護師のネットワークづくりにつながる研修を企画する。

I. 活動計画

対象者：本学の認定看護師教育課程修了者（117名）

日時：令和5年2月4日（土）午前9時～12時

会場：三重県立看護大学 講義棟2階 多目的講義室及びWEB（Zoom）

内容：COVID-19の感染状況により、参加が制限されることが予測される一方、対面開催を期待する声もあることから、ハイブリッド（WEB（ZOOM）及び会場）開催とし、特別講義、活動報告（第4期生）及びグループワークを行う。

II. 活動の結果と評価

<結果>

1. 参加者の概要

修了生117名に研修案内を行い、67名（県内23名・県外44名）が参加した。内訳としては、1期生11名（来学2名・WEB9名）、2期生14名（来学8名・WEB6名）、3期生17名（来学5名・WEB12名）、4期生25名（来学10名・WEB15名）である。

2. 研修内容

1) 特別講義「認知症看護ケアの核となるもの～看護観と実践のはざま～」

講師：河村敦子（三重県立看護大学 老年看護学 准教授）（会場参加）

2) 活動報告・質疑応答

（1）「療養型病院での認知症看護認定看護師の役割」

報告者：千賀麻未（阪和第二泉北病院）（WEB参加）

（2）「一般病院での活動報告～土台作りと今後の課題～」

報告者：山本明日香（永井病院）（会場参加）

（3）「地域で暮らす認知症高齢者における多職種連携でのDCNの役割」

報告者：岸 由佳利（訪問看護ステーションほたるいせ）

体調不良による欠席のため事務局が代読

3）講 評：河村敦子（三重県立看護大学 老年看護学 准教授）

3. 参加者アンケート

アンケート回収数 58（回収率 86.8%）。参加した理由（複数回答）としては、「自己研鑽」が最も多く 54 人（88.5%）であった。

満足度では、とてもよかった 39 人（67.2%）と、良かった 18 人（31.0%）、あまり良くなかった 1 人（1.8%）で、全体の 98.2%は「とてもよかった」「よかった」と肯定的な評価であった。その理由には、「認知症や看護の歴史を再認識することで、研修時代の熱い気持ちを思い出すことができた。」、「活動報告やグループワークで、自分の活動や今後の方向性を考えることができた。」、「意見交換ができたこと。」、「活動報告を聞いて私自身の活力になり、講義を聴いて今後活かせることが出来ると感じた。」、「ZOOM でのグループワークは初めてだったが、新しい形で参加できてよかった。」などがあった。対面開催については「対面での交流があり、とても勉強になった。」、「4 期生は、研修自体がほぼ ZOOM だったので、対面で先輩とも話すことが出来、貴重な機会であった。」などの意見があった。一方で「よくなかった」の理由は、「特別講義・活動報告に目新しさはなかった。進行の不具合が多すぎた。」との意見であった。

本研修会を今回で終了することについて「修了した母校とのつながりがなくなってしまいう気がして寂しい。」、「残念だ。」、「不定期でも、開催してほしい。」など、開催を継続してほしいとの意見が多数あった。

< 評価 >

アンケート結果からも、有益な研修であったと考える。本研修は、今年度で終了となったが、今回、対面と WEB でグループワークを行ったことは、同期生以外の繋がりづくりに寄与できたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

認知症看護認定看護師フォローアップ研修会は、今年度で終了するが、引き続き認定看護師教育課程の修了生の支援は継続していく必要がある。

V. 地域交流センター企画事業

1. 講師派遣

- 1) みかん大出前講座
- 2) みかん大リクエスト講座

1) みかん大出前講座

担当者：＜講師＞出前講座テーマ登録教員

＜運営＞地域交流センター 林辰弥 長谷川明子

【事業要旨】

教員が、自身の教育、研究、社会活動の専門性や成果をもとに、保健・医療・福祉の専門家および県民を対象としたテーマを提案し、依頼に応じ、その講座を出張して行う。

【地域貢献のポイント】

- ・本学教員の研究や社会的活動の成果として看護・医療・健康に対する知識を、県民に還元するとともに、県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・看護職向けの講座を提供し、県内の看護の質向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

今年度も COVID-19 による影響は続くことが予測されることから、感染防止対策として、中止またはオンラインによる講座に速やかに対応できるよう依頼元および講師と調整をはかる。

I. 活動計画

＜数値目標＞

COVID-19 による影響を受けた過去 2 年間の実施件数 39 件(令和 2 年度)、43 件(令和 3 年度)を上回る件数を実施する。

＜実施計画＞

1. 昨年度からの変更点

- ・オンライン講座を開催した際に、録画による再視聴を希望する声があったが、著作権等知財保護の観点から、オンライン講座の場合も、対面の講座同様に録画を禁止する旨をパンフレットへ追記する。
- ・出前講座のうち、広く県民が参加できる公開の講座として依頼者から了解を得た場合は、本学ホームページで参加者を募り、公開講座として実施してきたが、COVID-19 の感染対策上の理由により今年度は、公開講座としての開催を積極的に勧めないこととした。
- ・アンケート集計の効率化をはかるため、一部 Microsoft Forms によるアンケートを実施する。

2. 5 月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5 月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。

3. 申込受付の期限は、令和 4 年 11 月 30 日とする。

4. 申込があった際には、担当教員と日程調整を行い、日時を決定する。

5. 講座の開催は、令和 5 年 3 月末日までとする。
6. 出前講座のうち、広く県民が参加できる公開の講座として依頼者から了解を得た場合は、本学ホームページで参加者を募り、公開講座として実施する。
7. テーマ毎の受付上限件数に達した場合は、本学ホームページに掲載し周知する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

今年度の出前講座のテーマを表 1 に示す。【A 健やかな暮らしのために】のテーマ数は 20、【B 将来の職業選択のために】のテーマ数は 5、【C 高めよう保健・看護の力】のテーマ数は 4 であり、合計 29 テーマの登録があった。一般の対象は幼児から高齢者までと幅広く、専門職では、看護職を含む医療職、介護職、教員を対象としていた。

表 1 令和 4 年度 みかん大出前講座の全テーマ

分類	No.	テーマ
A 健やかな暮らしのために	A-1	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ
	A-2	地域で育てよう！子どものやる気と自己肯定感
	A-3	子育て・孫育てに役立つ基礎知識ー子どもの成長発達と毎日の生活習慣ー
	A-4	思春期男子のこころとからだを理解しよう
	A-5	子どもに関わる大人に必要な性のお話
	A-6	楽しく・おいしく減塩しましょう！
	A-7	健康寿命をのばそう！
	A-8	救急蘇生のい・ろ・は
	A-9	薬に関する四方山話
	A-10	血栓症の発症原因とその治療薬
	A-11	テレワークによるVDT作業の疲労を防ごう！快適な職場を目指す人間工学
	A-12	知っておきたい！「女性のこころとからだ」
	A-13	更年期以降をいきいきと過ごすために
	A-14	出前します！「暮らしの保健室」
	A-15	体験して考える高齢社会
	A-16	健康で長寿な街づくり
	A-17	「英語」は若返りの妙薬？脳もこころも若返ろう！
	A-18	あやつり人形を作って体の部位を英語で学ぼう！
	A-19	社会的活動としての話すこと・聴くこと
	A-20	「普通」ってなんだろう
B 職業 将来 選択 のため	B-1	どんな仕事に興味があるかな
	B-2	大学で学ぶこと
	B-3	看護の仕事について
	B-4	看護職（保健師、助産師）のお仕事を知ろう
	B-5	看護大学で学ぶ「看護技術」の授業
C 高めよう 保健・看護の力	C-1	医療事故はなぜ起きる？ーヒューマンエラーを防ぐための人間工学ー
	C-2	職場のメンタルヘルス
	C-3	そうだ！WOCに聞いてみよう！（褥瘡、ストーマ、フットケア等）
	C-4	性暴力被害を受けた方たちへの看護について考えよう

申込件数は 52 件、実施件数は 49 件であった。実施できなかった 3 件のうち、中止となった 2 件は、COVID-19 の感染拡大による中止が 1 件、参加者不足による中止が 1 件（申込者の申し出による）であった。残る 1 件は、繰り返し日程調整を試みたが担当教員

と日程の都合が合わずキャンセルとなった。49 件中、4 件はオンライン講座、1 件はハイブリッドの講座であった。昨年度のオンライン講座 7 件のうち 5 件が、COVID-19 の感染拡大により依頼元のオンラインへの変更希望を受け対応したものであったが、今年度は、4 件すべてが申し込み当初よりオンライン講座の予定であった。

参加者総数は、1351 名であり、昨年度参加者総数(904 名)、一昨年度参加者総数(1105 名)を上回った。

今年度の出前講座の実績を表 2 に示す。出前講座のテーマ分類別では【A 健やかな暮らしのために】が 37 件、【B 将来の職業選択のために】が 6 件、【C 高めよう保健・看護の力】が 6 件であった。

表 2. 令和 4 年度 みかん大出前講座実績

O	テーマ	実施数	派遣先	参加者
A 健やかな暮らしのために	タッピングタッチでこころと体をリフレッシュ	3	行政機関、社会福祉機関	一般（未就学児親子・子育て支援ボランティア・職員）
	地域で育てよう！子どものやる気と自己肯定感	1	その他（PTA協議会）	一般（こども園・幼稚園保護者）
	子育て・孫育てに役立つ基礎知識 —子どもの成長発達と毎日の生活習慣—	2	行政機関、ボランティア団体	一般、職員（保健師・保育士等） ボランティア団体会員、保護者
	思春期男子のこころとからだを理解しよう	4	行政機関、教育機関	特別支援学校生徒、教員 児童心理士、児童福祉士
	子どもに関わる大人に必要な性のお話	4	行政機関、教育機関 社会福祉機関	中学生、高校生、児童福祉士、児童心理士 一般（子育て支援ボランティア）
	楽しく・おいしく減塩しましょう！	5	社会福祉機関、教育機関 ボランティア団体	一般（ボランティア会員・文化施設講座・協会会員・高齢者・公民館講座）
	健康寿命をのばそう！	5	社会福祉機関、その他	看護師、介護士、事務職、管理職、作業員 一般（公民館高齢者講座）
	救急蘇生のい・ろ・は	1	ボランティア団体	一般（健康づくり推進員）
	薬に関する四方山話	2	ボランティア団体、その他	一般（ボランティア・高齢者）
	血栓症の発症原因とその治療薬	2	社会福祉機関	医療職、介護職、事務職 一般（高齢者）
	知っておきたい！「女性のこころとからだ」	2	教育機関	特別支援学校生徒
	出前します！「暮らしの保健室」	3	社会福祉機関、行政機関 その他（高齢者サークル）	一般（高齢者）
	体験して考える高齢社会	1	教育機関	高校生
	健康で長寿な街づくり	1	ボランティア団体	ボランティア、一般（高齢者）
	社会的活動としての話すこと・聴くこと	1	ボランティア団体	一般（傾聴ボランティア）
B 選択の ための 職業	どんな仕事に興味があるかな	1	教育機関	中学生
	看護の仕事について	2	教育機関	中学生、教師
	看護職（保健師、助産師）のお仕事を知ろう	3	教育機関	高校生
C 高めよう 保健・ 看護の 力	医療事故はなぜ起きる？ —ヒューマンエラーを防ぐための人間工学—	1	医療機関	看護師、リハビリスタッフ 介護スタッフ
	職場のメンタルヘルス	3	行政機関、社会福祉機関 その他（介護支援事業所）	保健師、介護職員、看護師、機能訓練士 ケアマネージャー、介護支援専門員
	そうだ！WOCに聞いてみよう！ （褥瘡、ストーマ、フットケア等）	1	医療機関	看護師
	性暴力被害を受けた方たちへの看護について考えよう	1	医療機関	医師、看護師、心理士、作業療法士 精神保健福祉士

依頼元の分類別にみると、行政機関 6 件、医療機関 3 件、社会福祉関連機関 10 件、教育機関 15 件、ボランティア団体 6 件、その他 9 件であった。

終了後のアンケートへの協力は、1166 名より得られ、全参加者の 79.2%より回答が得られた。講座への満足度は、「とてもよかった」が 73.0%、「よかった」が 22.5%であった。「あまりよくなかった」が 3.0%、「よくなかった」が 0.5%であったが、その理由は、性にまつわる講座で学生が理解はできるものの内容の受け入れの難しさや恥ずかしさを表現した回答や看護職の仕事に関する講座で看護への無関心を表現した者であり、講座そのものへの不満などはみられなかった。無回答は、6.3%であった。

<評価>

実施件数は過去 2 年間の実施件数を上回り、数値目標を達成した。また、参加者総数についても、参加者総数は、1351 名であり、昨年度参加者総数(904 名)、一昨年度参加者総数(1105 名)を上回った。

また、コロナ禍で 3 年目となる今年度は COVID-19 の影響による中止も 1 件に減った。オンライン講座や少人数の講座への対応等、感染防止対策を十分に図り、県民のニーズに応えることができたのではないかと考えられる。

アンケートの結果より、講座への満足度は高く、本学教員の看護・医療・健康に対する知識の提供を通して、県内の保健・医療・介護に関わる専門職だけでなく、高齢者や学生をはじめとする地域住民の健康への知識の獲得や意識の向上へ幅広く貢献できたと評価する。

Ⅲ．今後の課題

今年度より、アンケート集計の効率化をはかるため、一部 Microsoft Forms によるアンケートを実施したが、アンケート回収率は 79.2%であり、昨年度の 91.7%より低下した。医療従事者や学生などスマートフォンを講座中に使用できない対象者は従来のアンケート用紙による回答とし、高齢者の参加の多い講座にはいずれの方法でも回答可能な用紙を配布したが、回収率を上げるために、方法の検討が必要である。

2) みかん大リクエスト講座

担当者：＜講師＞全教員

＜運営＞地域交流センター 林辰弥 長谷川明子

【事業要旨】

みかん大出前講座のテーマに該当しない講師派遣について、県民から要望のあったテーマ・内容に応じて講師を派遣し、有料で出張講座を行う。

【地域貢献のポイント】

- ・みかん大出前講座に該当しないテーマに対し、「みかん大リクエスト講座」により依頼に応じることで、広く県民の要望に応えることができる。
- ・看護職向けの講座の依頼に応じ、県内の看護の質向上に貢献する。

【昨年度からの課題】

COVID-19 による影響が当面続くことが予測されるため、感染防止対策としてオンラインによる講座にも積極的に対応できるよう調整する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

今年度と同様に COVID-19 による影響を受けた昨年度の実施件数 22 件を上回る件数を実施する。

＜実施計画＞

1. 昨年度からの変更点

- ・オンライン講座を開催した際に、録画による再視聴を希望する声があったが、著作権等知財保護の観点から、オンライン講座の場合も、対面の講座同様に録画を禁止する旨をパンフレットへ追記する。
- ・アンケート集計の効率化をはかるため、一部 Microsoft Forms によるアンケートを実施する。

2. 5 月初旬に講師派遣の案内パンフレットを作成し、5 月中旬までに県内各所に送付するとともに、本学ホームページに掲載する。

3. 申込受付の期限は、令和 4 年 11 月 30 日とする。

4. 申し込みのあったテーマや内容に合わせて、教員を選出し、依頼元と教員双方の条件が合致した際には、日程・テーマを決定し講師を派遣する。講座までの準備期間には、依頼元と教員間で講座の内容等について直接調整をすすめる。

5. 講座の開催は、令和 5 年 3 月末日までとする。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

今年度の派遣先分類別リクエスト講座の実績を表 1 に示す。

表 1 令和 4 年度 派遣先分類別リクエスト講座の実績

派遣先分類	テーマ	参加のべ人数 (名)
医療機関	看護診断を学ぼう	43
	関連図を書いてみよう	37
	看護研究個別指導（全3回）	30
	形態機能学を活かした看護実践～日常生活行動のしくみと身体の知識について～	16
	形態機能学を活かした看護実践～日常生活行動のしくみと身体の知識について～	16
	マネジメントラダーについて（全4回）	28
	看護診断（全3回）	24
	リーダーシップ（管理者編）	11
	キャリアディベロップメント（管理者編）	16
	研究論文の読み方、活かし方	11
	ケースレポートをまとめよう	32
	コーチングの基本	8
行政機関	こころの健康づくり講演会～ストレスとうまく付き合うコツ～	22
	子どもの家庭福祉	17
	子どもを理解するための基礎知識	17
	認知症ケアについて	17
	今どきの育児の理解と保健指導のポイント	20
	介護施設等における感染症のリスクマネジメント	70
	なばり子育て支援員研修修了者に期待する活動	50
社会福祉機関	ストレスと上手に付き合うために	37
	感染予防対策	20
	安心安全な食品衛生と感染症対策	20
	認知症の初期症状、地域での見守り、気付きについて	22
	感染予防対策	74
	認知症の正しい理解と虐待の未然防止	39
	高齢者の事故防止のための研修	59
	認知症の初期症状・地域での見守り、気付きについて	32
	認知症の正しい理解と虐待予防	67
専門職団体	認知症について	74
	健康寿命をのばそう	79
その他 （高齢者団体）	コロナ禍におけるフレイル予防	105
その他 （社会教育関係団体）	子どもに関わる大人に必要な性のお話	53
その他（文化団体）	ボランティア活動における熱中症対策について	13

申込件数は 42 件、実施件数は 40 件、中止 0 件、キャンセル 2 件であった。キャンセル 2 件は、担当教員と都合が合わず、繰り返し日程調整を行ったが調整がつかないことが理由であった。参加者総数は、1179 名と昨年度参加者総数の 566 名を上回った。今年度は COVID-19 の感染防止対策として、7 件のオンライン講座のほか、4 件のハイブリッド講座を行い、中止となる講座を 0 件に抑えることができた。

派遣先は医療機関が最も多く 19 件であり、テーマ・内容は、看護実践 7 件、看護管理 8 件、看護研究 4 件であった。医療機関では、全 3～4 回の研修プログラムとして取り組む機関が複数あった。また、看護職の会議や委員会へ講師が同席して支援する講座もあった。医療機関に次ぐ派遣先は、社会福祉機関 9 件、行政機関 7 件であり、介護福祉施

設や市町の地域包括支援センターからの依頼が増加した。

終了後の各講座の評価は、「とてもよかった」「よかった」の肯定的評価が 100%であった。オンライン講座についても、他の講座と相違のない評価であり、問題点はみとめられなかった。

＜評価＞

実施件数 40 件は、昨年度の 22 件より 20 件増加したことから、数値目標を達成した。さらに、参加者総数 1179 名は、昨年度参加者総数の 566 名を上回り、コロナ前の令和元年度の参加者総数 824 名をも上回った結果、過去最大数を達成することができた。コロナ禍においても、オンラインやハイブリットによる講座にも対応し、事業を継続してきた結果といえる。

申し込みは、医療機関が全申し込みの 6 割を超え、医療機関における講座のテーマ・内容は、実践・教育・研究、各側面から看護職者のニーズに合わせた講座を開催し、県内の看護の質の向上に寄与することができたのではないかと考える。また、市町の地域包括支援センター等、医療機関の看護職以外の医療・福祉・介護関係者といった幅広い対象へ講座を提供することができたと考える。

Ⅲ．今後の課題

今年度より、アンケート集計の効率化をはかるため、一部 Microsoft Forms によるアンケートを実施したが、アンケート回収率は 77.3%であり、昨年度の 89.8%より低下した。医療従事者や学生などスマートフォンを講座中に使用できない対象者は従来のアンケート用紙による回答とし、高齢者の参加の多い講座にはいずれの方法でも回答可能な用紙を配布したが、回収率を上げるために、方法の検討が必要である。

2. 看護研究支援

- 1) 看護研究 SEED
- 2) 看護研究エッセンス
- 3) ハウツー看護研究
- 4) その他の看護研究支援

1) 看護研究 S E E D (集合研修)

担当者：＜講師＞片田範子、玉田章、安部彰、河村敦子、関根由紀、長谷川智之、
上田貴子、別當直子(株式会社紀伊国屋書店)
＜運営＞地域交流センター 長谷川智之、西川真野

【事業要旨】

看護職者の研究基礎能力を培うことを目的に、看護研究の基礎知識に関する研修を実施する。平成 28 年度以降、遠隔配信研修（地理的条件から本学に通うことが困難な地域の看護職者を対象に、テレビ会議システムを利用して遠隔配信で行う）と集合研修を毎年交互に行っている。令和 3 年度からは、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、テレビ会議システムではなく、どこからでも自由に参加できるオンライン研修に変更した。令和 4 年度は、集合研修の年である。

【地域貢献のポイント】

県内の看護職者が、看護研究の基礎知識に関する研修を受講することにより、研究的思考や研究遂行能力の礎を築く。また日常の看護業務の中から研究テーマを見出すことによって、看護研究へ取組む意欲を高め、研究を実践し、結果、看護の質の向上につながる。

【前回集合研修からの課題】

- ・ 引き続き新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じ、受講者間に衝立を用意するなど、対面でも受講者が安心して参加できる形式を取り入れる。
- ・ 「講義内容」に関して、専門用語などわかりにくい用語の説明に留意し、受講者にわかりやすい講義内容にしていく。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・ 令和 2 年度の集合研修の受講者数よりも多くの受講者を獲得する。
- ・ 新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、使用講義室の最小定員（56 名）の半数（28 名）程度の受講者数を目指す。

＜実施計画＞

例年からの変更点（昨年度の課題を含む）

- ・ 昨年は、5 月～7 月開講であったが、今年度は病院や施設における 4 月の人事異動による煩雑な時期を避け、6 月～8 月開講とする。
- ・ 昨年度まで事業評価アンケートは紙面を用いていたが、オンライン上での回答および集計が可能な Microsoft Forms を使用する。

実施計画

- ・ 令和 4 年 4 月に研修計画を立て、研修は 2 週間程度の間隔を開け月 2 回程度となるように調整し、プログラムを作成する。

- ・ 6月14日から8月2日まで、集合研修を実施する。
- ・ 受講案内は、県内各医療・行政機関等（152施設）へ送付するとともに、本学ホームページに募集案内を掲載する。
- ・ 各回終了時にアンケート調査を行う。
- ・ 本学ホームページに研修修了を報告するとともに、地域交流センターページには報告記事を掲載する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 研修の実際

研修プログラム（表1）のとおり10科目（文献検索と図書館の利用含む）を5日間で実施した。また、研修は月2回とし2週間程度の間隔を空けて開催スケジュールの調整を試みたが、講師のスケジュールの調整がつかず7月は3回の開催となった。

最終回のプレゼンテーションは、講師の来校が不可能となりオンラインによる講義・演習を行った。画面上では講師が講義を行い、教室内ではSE2名とスタッフ2名が受講者のサポートを行い、受講者は、情報処理教室での講義・演習を予定通り実施することができた。

受講申込者は、県内中勢地区を中心とした9施設から22名、個人が1名であった。申込者は全て全5回コースであった。各回の受講者数は、20～23名であり、延べ108名であった。また、5日間のうち4日間以上を受講した20名には修了証書が授与された。

表1 令和4年度 研修プログラムと受講者数

回	日程	テーマ	時間	担当者	場所	受講者数
1	6月14日(火)	センター長挨拶・オリエンテーション	10:20～10:30	センター長	中講義室3	20
		看護研究の意義と文献の活用	10:30～12:00	学長		
		文献検索と図書館の利用	13:00～14:30	図書館	第1情報処理教室	
2	7月1日(金)	研究計画の立て方と書き方	10:30～12:00	河村 敦子	中講義室3	23
		看護研究における倫理的配慮	13:00～14:30	安部 彰		
3	7月5日(火)	研究デザインのタイプと選択	10:30～12:00	上田 貴子	中講義室3	22
		量的研究(実験・計測)	13:00～14:30	長谷川 智之		
4	7月21日(木)	質的研究(インタビュー)	10:30～12:00	関根 由紀	中講義室4	23
		量的研究(アンケート)	13:00～14:30	関根 由紀		
5	8月2日(火)	研究論文作成	10:30～12:00	玉田 章	中講義室4	20
		プレゼンテーション(演習含む)	13:00～15:00	長谷川 智之	第1情報処理教室	

研修の様子



看護研究の意義と文献の活用



研究計画の立て方と書き方



看護研究における倫理的配慮



研究デザインのタイプと選択



量的研究（実験・計測）



質的研究・量的研究（アンケート）



研究論文作成



プレゼンテーション



2. 受講者アンケート結果

1) 受講者の属性（最終回：回収率 85%）

受講者の年代（図1）は、20歳代が最も多く次いで40歳代、30歳代であった。経験年数は、5年未満が最も多く次いで10年以上20年未満、5年以上10年未満であった。職位は、スタッフが最も多く管理職と教育担当者は少なかった。

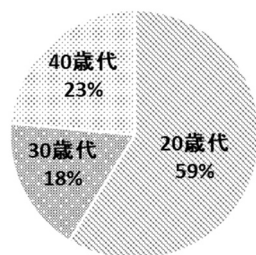


図1 受講者の年代

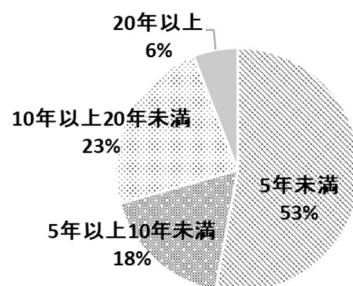


図2 受講者の経験年数

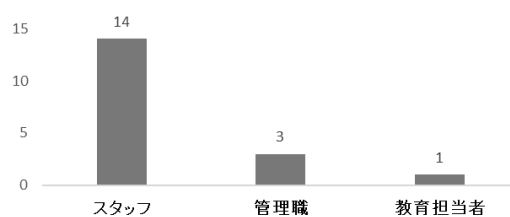


図3 受講者の職位（複数回答）

2) 研修内容について（各回：回収率 73.9～100％）

各講義内容の理解度を図4に示す。「とても理解しやすかった」、「理解しやすかった」と回答した者は、「看護研究の意義と文献の活用」で80.0％、「研究計画の立て方と書き方」、「看護研究における倫理的配慮」では95.7％、その他の科目では100％であった。これらは、昨年度、一昨年度と比較すると高い結果であった。「とても理解しやすかった」、「理解しやすかった」を選択した理由は、「看護研究とは何か理解できた」、「論文などの提示や実際の活動が示されすぐに活用できると思ったから」などであった。一方で、「やや理解しにくかった」と回答した理由は、消極的な気持ちを持った、難しかったなどであった。「理解しにくかった」と回答した者は全講義でみられなかった。

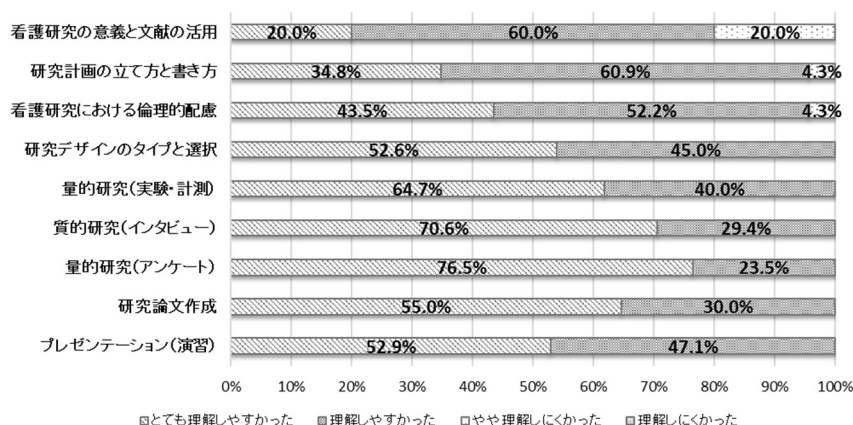


図4 講義内容の理解度

各講義の満足度を図5に示す。「大変満足」、「満足」と回答した者は「研究計画の立て方と書き方」95.7％、その他の科目では100％であった。これらは、昨年度、一昨年度と比較すると高い結果であった。「大変満足」、「満足」を選択した理由は、「資料が見やすい」、「例題があってわかりやすい」などであった。「やや不満」の回答には理由の記載がなかった。

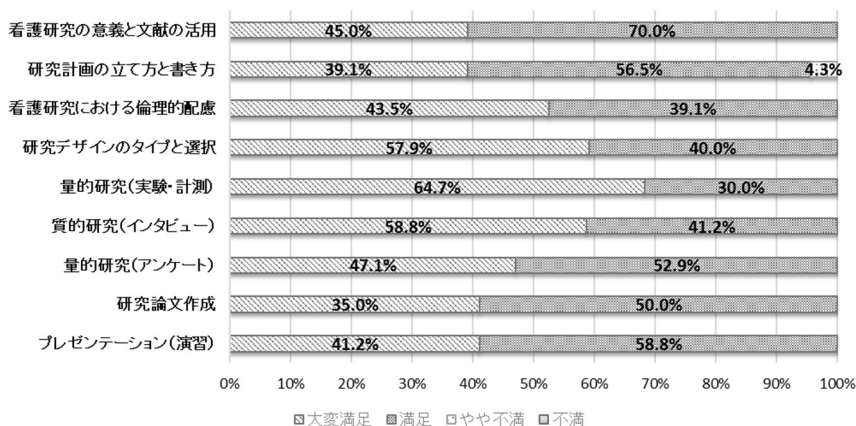


図5 講義内容の満足度

3) 看護研究 SEED 全般について（最終回：回収率 85%）

研修全体に対する満足度（図 6）は、「大変満足」、「満足」と回答した割合が 100%であった。これらは、昨年度、一昨年度と比較すると高い結果であった。研究テーマについては、「研究の基礎を改めて学べた」、「看護研究の一連についてわかった」などの意見があった。研修時間については、「もう少し早くても良かった」、「通勤ラッシュを避けて通学できる」などの意見があった。

その他のアンケート結果、「現在のあなたの状況」では「現在看護研究に取り組んでいる」35.6%、「今年度中に看護研究に取り組む予定」17.6%、「来年度以降に看護研究に取り組む予定」41.2%、「その他」5.9%であった。その他の理由には、「研究テーマが見つからない」と記載があった。また、研究意欲への設問「この研修で学んだことは、今後に役立ちますか」には、「とても役に立つ」76.5%、「役に立つ」23.5%であり、「知らないことを学べた」、「今できること足らないことが分かった」などの意見があった。「この研修を受講して看護研究を開始または継続しようと思いましたが」では、肯定的な回答が 94.1%得られ、「具体的な内容がわかった」、「継続して活かしていきたい」などの意見があった。「今後の研修希望」では、「文章の修正を追加してほしい」という記載があった。

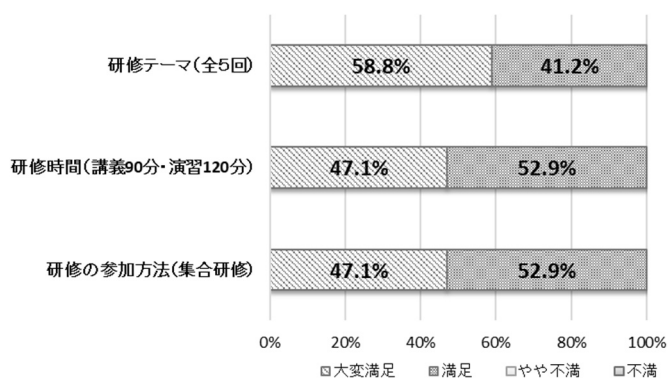


図 6 講義内容の満足度

< 評価 >

数値目標の「令和 2 年度の集合研修の参加者数よりも多くの参加者を獲得する。」「新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、使用講義室の最小定員（56 名）の半数（28 名）程度の受講者数を目指す。」については、令和 2 年度の受講者数 9 ～ 14 名に対して今年度の受講者数は 23 名であり目標は達成できた。しかし、受講者は県内の北勢、中勢、伊賀地区に限定されており伊勢志摩、東紀州地区からの参加者はみられなかった。

前回の課題であった、「引き続き新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じ、受講者間に衝立を用意するなど、対面でも受講者が安心して参加できる形式を取り入れる。」は、講義前に受講者の体調確認と検温および手指消毒を実施した。講義中は、受講者間の間隔を確保し、換気や簡易パーテーションを準備するなど十分な感染対策を講じた。

「講義内容に関して、専門用語などわかりにくい用語の説明に留意し、受講者にわかりやすい講義内容にしていく。」については、講義の理解度・満足度ともに昨年度、一昨年度よりも高い結果であり、それらの理由からも受講者目線でのわかりやすい講義が行われた

と考える。また、受講者が求めている、実践的な講義や演習が取り入れられており、受講者のアンケート結果を講師へフィードバックしたことにより、これらの評価に繋がったと推測する。

事業全般に対して、いずれも高い評価であり受講者にとって満足度の高い研修であったと考える。よって、事業目的である研究の基礎知識を系統的に学ぶことにより、受講者の研究基礎能力を培うことができたと考える。また、研究への意欲についても、ほぼ前向きな回答であり受講者の意欲を高めるきっかけとなったことが伺えた。

Ⅲ．今後の課題

【研修全体】

- ・研修の理解度や満足度を維持するため、講義は受講者目線でのわかりやすい内容や実践的な内容および実例の提示などを取り入れていく。
- ・研修時間を平日の昼間に限定せず、平日の夕方など受講者が参加しやすい時間帯を検討する。

【次回に向けて】

- ・地理的条件から本学に通うことが困難な伊勢志摩、東紀州地区からも参加しやすいハイブリットでの研修方法を検討する。

2) 看護研究エッセンス

担当者：＜講師＞斎藤真

＜運営＞地域交流センター 長谷川智之、西川真野

【事業要旨】

看護研究の基礎知識に関する研修（看護研究 SEED 等）を修了した看護職者を対象に、看護研究の質の向上を目的に、研究遂行能力の強化に関する研修を実施する。

【地域貢献のポイント】

看護研究の基礎知識を習得した看護職者が、研究遂行能力を強化する方法を学び、演習型の研修を受講することにより、看護現場での研究実践が充実し、看護の質向上につながる。

【昨年度からの課題】

- ・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じ、フェイスシールドや衝立等で、受講者が安心して参加できる形式を続け、「数値目標：10 名程度の受講者が得られる」を達成する。
- ・コースの内容をわかりやすく、より魅力的に紹介できる「概要」の内容を検討する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・10 名程度の受講者が得られる。

＜実施計画＞

- ・令和 4 年 4 月に研修計画を立て、本学ホームページに募集記事を掲載する。
- ・令和 4 年 5 月に、プログラムと受講案内を、県内各医療・行政機関等（152 施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
- ・看護研究 SEED やハウツー看護研究を実施する際、受講者へ広報を行う。
- ・7 月から 11 月に、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、学内基準に基づき、感染防御対策に努め、プログラムに沿った研修の実施を行う。
- ・研修終了時に、Microsoft Forms にてアンケート調査を行う。
- ・本学ホームページに研修終了を報告するとともに、地域交流センターホームページには報告記事を掲載する。



研修の様子

Ⅱ．活動の結果と評価

< 結果 >

1．研修の実際

教員からの応募は「統計解析（基本編）①②」であった。研修内容は、研修プログラム（表 1）のとおり実施した。受講申込は、統計解析①②いずれも 2 施設 2 名の合計 4 名であった。うち、施設単位看護研究支援先の病院からの申込者は 1 名、看護研究 SEED 受講者からの申込者は 1 名、その他 2 名であった。

表 1 令和 4 年度 研修プログラム

コース	統計解析① (基本編)	統計解析② (基本編)
日時	7月2日(土) 10:40~16:10	11月12日(土) 10:40~16:10
担当者	斎藤 真	
概要	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方と実際の使い方を学びます。 アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講座です。	

2．受講者アンケート結果（回収率 50%）

1) 受講者の属性

受講者は 40 歳代が 100% であった。看護職としての経験は 10 年以上 20 年未満が 50%、20 年以上が 50% であり、管理職とスタッフであった。

2) 講義内容について

講義の理解度は、「とても理解しやすかった」と回答した者は 100% であり、「その理由は「マンツーマンで例題を交えて教えてもらいわかりやすかった」、「統計処理や計算の方法が理解できた」であった。講義の満足度は、「大変満足」と回答した者は 100% であり、その理由は「わからない部分がわかった」、「先生が開発したデータ分析のものを頂けたのでこれからの研究に役立つ」であった。

3) 本事業全般について

講義の回数や時間については、「大変満足」、「満足」と回答した者が 100% であり、その理由は、「1 日で基本を教えてもらえたのはよかった」、「朝それほど早くなかったため遠方からでも参加しやすい」であった。また、その他のアンケート結果、「現在のご自身の状況」では、「現在看護研究に取り組んでいる者」が 100% であった。「研修で学んだことは、あなたの今後役に立ちますか」の設問には「とても役に立つ」と回答した者が 100% であり、その理由は、「早速今取り組んでいる研究で使うことができるため」、「アンケート調査に興味がありデータの出し方がわかった」であった。意見や感想では、「2 人であっても開催してもらえて聞きやすかったし、わかりやすく解説してもらえた」、「実際にパソコンを使用して演習もできたのでよりわかりやすかった」、「自分の研究を相談できとてもありがたかった」などの意見があった。開催してほしいテーマは、「マンホイットニー検定やウイルコクソン検定についても知りたい」、「看護研究の個別指導」であった。

<評価>

「統計解析（基本編）①②」の受講者は合計4名であり、「数値目標：10名程度の受講者が得られる」は達成できなかった。十分な受講者を得ることができていない状況ではあったが、県内の新型コロナウイルス感染症拡大の影響を鑑みて、再募集はしないこととした。しかし、アンケート結果より少人数ゆえの指導から高評価につながったと考える。看護研究エッセンスは、その内容より少人数かつ対面での講義、演習が望ましい研修である。そのため、十分な研修の効果が得られるよう最大の受講人数を設定する必要がある。

また、研修全般への満足度は高く、その理由からも、受講者の研究遂行能力が強化でき、看護研究の質の向上に繋がると考える。

感染症拡大防止対策については、受講者間に十分なスペースを確保でき、対策を講じることができた。

Ⅲ．今後の課題

- ・ コースの名称や内容をわかりやすく、より魅力的に紹介できるよう、写真やイラストを追加した研修案内を作成する。
- ・ 施設単位看護研究支援の担当教員に、研修案内の配布および募集を依頼する。
- ・ 看護協会の研修時に、研修案内の配布および募集を行う。
- ・ 自身の研究について相談できる企画コースの増加を検討する。

3) ハウツー看護研究

担当者：＜講師＞浦野茂、関根由紀、斎藤真、菅原啓太、長谷川智之
＜運営＞地域交流センター 長谷川智之、西川真野

【事業要旨】

看護研究の基礎知識に関する研修（看護研究 SEED 等）を修了した看護職者を対象に、研究遂行能力の向上を目的に、実際に行うための具体的な研究方法について研修を実施する。

【地域貢献のポイント】

看護研究の基礎知識を習得した看護職者が、実際に行うための具体的な研究方法を学び、体験することにより、看護現場での研究実践が充実し、看護の質の向上につながる。

【昨年度からの課題】

- ・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じ、フェイスシールドや衝立等で、受講者が安心して参加できる形式を続ける。
- ・量的研究コース（実験・計測）の講座名と内容を検討する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じ、10 名程度の受講生を獲得する。

＜実施計画＞

- ・令和 4 年 5 月に研修計画を立て、本学ホームページにて募集記事を掲載する。
- ・令和 4 年 5 月にプログラムと受講案内を県内各医療・行政機関等（152 施設）へ送付し、受講者自身が研究能力に沿った研究支援のコースを選び、受講計画を立てやすいよう案内する。
- ・看護研究 SEED を実施する際、受講生へ広報を行う。
- ・8 月から 12 月に、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、学内基準に基づき、感染防御対策に努め、各コース、プログラムに沿った研修の実施を行う。
- ・各コース終了時に Microsoft Forms を用いたアンケート調査を行う。
- ・本学ホームページに研修修了を報告するとともに、地域交流センターページには報告記事を掲載する。

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

1. 研修の実際

研修プログラム（表 1）のとおり 3 コースとも 3 回（計 7 コマ）を計画した。量的研究コース（実験・計測）は申込者がなく中止となった。

インタビューコースは 1 施設より 2 名、アンケートコースは 2 施設より 5 名、計 7 名であった。うち、施設単位看護研究支援先病院からの申込者は 2 名、看護協会による看

護研究研修時の募集からの申込者は4名、その他1名であった。

表1 令和4年度 研修プログラムと受講者数

コース	質的研究コース (インタビュー)	量的研究コース (アンケート)	量的研究コース (実験・計測)
日時	①8月19日(金) 13:00~16:10 ②9月2日(金) 13:00~16:10 ③9月16日(金) 10:40~16:10	①10月1日(土) 9:00~12:10 ②10月1日(土) 13:00~16:10 ③10月22日(土) 9:00~14:30	①11月26日(土) 9:00~12:10 ②11月26日(土) 13:00~16:10 ③12月10日(土) 9:00~14:30
担当者	浦野 茂・関根由紀	斎藤 真・菅原啓太	斎藤 真・長谷川智之
テーマ	インタビューによる 質的研究を行ってみる	「質問紙の作成と調査の実施」 ー職務満足度について考えをさぐるー	「看護職者の腰痛に関連する 援助時のベッドの高さについて」 ー身近にあるモノを使用し、 明日から使える実験研究!ー
第1回	1. 質的研究法の内容と特徴 2. 研究課題を作る 3. 研究デザインを考える 4. インタビューガイドを作る	1. はじめに 2. 調査を行う前に 倫理的配慮を含めた調査研究の注意事項 3. 調査用紙に用いる尺度 4. 調査用紙の作成: フェースシート、単一回答/選択、 複数回答/選択、順位法、数値配分法、 SD法、自由記述 5. 調査開始 6. データの入力・集計	1. 看護研究における実験研究とは 2. 実験研究の紹介 3. 実験を行う前に: 倫理的配慮を含めた実験の注意事項
第2回	1. インタビューを行う 2. トランスクリプトを作る 3. 分析する	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開	1. 実験の準備: 実験環境、必要な物品、 実験手順の確認など 2. 実験開始: 実験協力者への説明と同意 2種類のベッドの高さで看護援助を 行った際の腰部負担の測定 3. データの集計
第3回	1. 分析結果をまとめる 2. 「発見」を作る	・論文の作成: 目的、方法、結果、考察の記述	1. データ分析: 図表の作成、excelを使用した検定 2. 「考察」の検討: 考察について、何を記述すべきか 3. 抄録(学会発表レベル)の作成
受講者数	2	5	開催中止

研修の様子



質的研究 (インタビュー)



量的研究 (アンケート)

1. 受講者アンケート結果

1) 受講者の属性（最終回：回収率 85%）

受講者の年代（図1）は、30歳代と40歳代が多かった。経験年数は、10年以上20年未満が多かった。職位は、管理職が多かった。

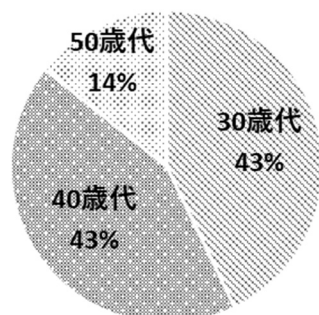


図1 受講者の年代

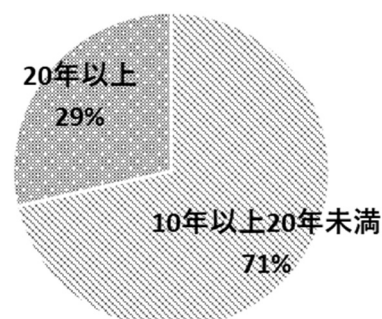


図2 受講者の経験年数

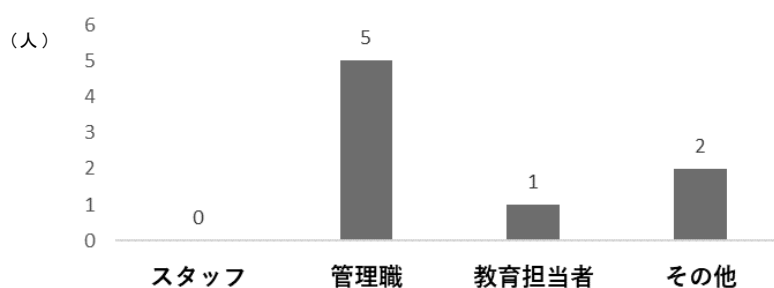


図3 受講者の職位（複数回答）

2) 研修内容について（回収率：100%）

各講義の理解度を図4に示す。「とても理解しやすかった」、「理解しやすかった」と回答した者は100%であった。これは、昨年度、一昨年度とともに高い結果であった。

「とても理解しやすかった」、「理解しやすかった」を選択した理由は、「受講人数が少なくてよかった」、「質問がしやすかった」などであった。

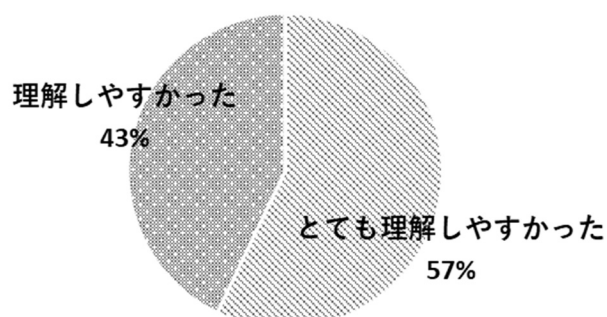


図4 各講義の理解度

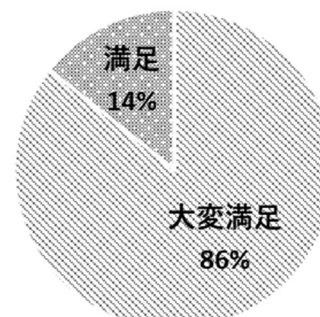


図5 各講義の満足度

3) 本事業全般について

各講義の満足度（図5）は、「大変満足」、「満足」と回答した者が100%であった。「大変満足」、「満足」を選択した理由は、「講師の先生と一緒に考えてくれた、色々な意見が聞けた」、「難しかったけど復習をかねて実践できた」などであった。研修の回数や時間については、「大変満足」、「満足」と回答した者が100%であった。

「このコースで学んだことはあなた今後役に立ちますか」の設問には、「とても役に立つ」が100%で、その理由は「研究の基礎は今後研究を終えてもスタッフ教育につながるから」、「実際パソコンも使って演習ができたのでよかった」などであった。

「本研修を受講して、看護研究をしようまたは続けようと思う」の設問には、85.7%の方が「はい」と回答し、その理由は「丁寧に教えてもらえた」、「少し理解できたから」などであった。研修全体への意見や感想では、「講師の先生方がとても良心的であたたかくありがたかったです」、「自分の研究の曖昧なところも解決してくれて助かりました」など肯定的なものであった。

<評価>

受講生は、看護研究 SEED 受講者と施設単位看護研究支援および看護協会による看護研究研修での広報活動より6名、合計7名獲得できたが数値目標の達成には至らなかった。特に、量的コース（実験・計測）については、昨年度同様、申込者がいなかった。臨床現場での看護研究手法として実験・計測は難しいと捉えられている可能性が考えられる。そのため、実験・計測は、身近な物品でも簡便に実施が可能な研究であることをアピールする必要があると考える。

研修の質に対しての評価は高い結果であった。受講者が記載した「その理由」から、地域貢献のポイントである看護研究の基礎知識を習得した看護職者が、研究を実際に行うための具体的な方法を学び、体験することにより、看護現場での研究実践が充実し、看護の質の向上に繋げることができたと考える。

Ⅲ. 今後の課題

【研修全体】

- ・各コースの研修案内をそれぞれ作成し、コースの名称や内容をわかりやすく、より魅力的に紹介できるよう、写真やイラストを追加した研修案内を作成する。
- ・施設単位看護研究支援の担当教員に、各コースの研修案内の配布および募集を依頼する。
- ・看護協会の研修時に、各コースの研修案内の配布および募集を行う。
- ・受講者が参加しやすい受講曜日や時間帯などを検討する。

4) その他の看護研究支援

担当者：＜施設単位看護研究支援講師＞大川明子、小池敦、宮崎つた子、前田貴彦、
長谷川智之、関根由紀、上田貴子、川島珠実
＜看護研究発表会支援講師＞川島珠実
＜運営＞地域交流センター 犬飼さゆり、西川真野

【事業要旨】

県内医療機関等における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とする。看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループ又は個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行う「施設単位看護研究支援」と、看護研究発表会における講評・審査を行う「看護研究発表会支援」を実施する。

【地域貢献のポイント】

看護職者が、臨床現場における課題について看護研究を行うことは、職業人としての意識を高め、看護の質の向上につながる。本事業により、地域の人々によりよい看護実践を還元することに繋がる。

【昨年度からの課題】

- ・ 本学支援教員と施設の研究指導者との連携を図る。
- ・ 「支援回数の増加」や「より専門的な支援」への希望は、講師派遣事業の「みかん大リクエスト講座」の利用を勧める。
- ・ 研究の基礎知識に自信のないスタッフの方へは、本学の看護研究 SEED やハウツー看護研究、看護研究エッセンスを勧める。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・ 施設単位看護研究支援は過去3年間の平均利用件数 10.3 件を維持する。
- ・ 看護研究発表会支援は過去3年間の平均利用件数 1 件を維持する。

＜支援内容＞

1. 施設単位看護研究支援

- 1) 施設で看護研究を行っている看護職者のグループまたは個人に対し、本学の教員が出張して指導を行う。施設からの申込みは1施設6研究以内とする。
- 2) 基本単位を、3時間×4回の指導とする。

2. 看護研究発表会支援

施設等の看護研究発表会における講評・審査を本学の教員が担当する。

＜実施計画＞

1. 施設単位看護研究支援

- ・令和 4 年 1 月に募集案内を県内医療機関等（158 施設）に送付し、本学ホームページに募集記事を掲載する。（締切 2 月末日）
- ・令和 4 年 3 月～4 月に申込みのあった施設に対し、全教員から支援担当者を募集する。
- ・令和 4 年 4 月に支援の決定した医療機関へ決定通知を送付する。
- ・令和 5 年 3 月迄、担当教員が研究指導を行う。
- ・支援終了時、事業参加者に Microsoft Forms にてアンケート調査を行う。

2. 看護研究発表会支援

- ・令和 4 年 1 月に募集案内を県内医療機関等（158 施設）に送付し、本学ホームページに募集記事を掲載する。（締切 11 月末日）
- ・令和 3 年 3 月～4 月に全教員から支援担当者を募集する
- ・令和 4 年 3 月末までの支援の申込について、対応可能な教員を派遣する。
- ・支援終了時、事業参加者に Microsoft Forms にてアンケート調査を行う。

II. 活動の結果と評価

< 結果 >

1. 支援の実際

1) 令和 4 年度の支援施設の概要

施設単位看護研究支援施設（表 1）は 8 件、その内新規の申込みが 1 件あった。看護研究発表会支援は 1 法人から申込みがあった。

2) 令和 4 年度の支援状況

施設単位看護研究支援は、4 月から 3 月までであった。新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、施設単位看護研究支援にて対面での支援が難しい場合は、オンラインでの研究支援を行った。看護研究発表会支援では、1 法人より 6 題の講評の依頼があった。発表会は、コロナ禍のため法人内の 3 施設によりハイブリットにて行われ、約 60 名が参加した。

表 1 令和 4 年度 施設単位看護研究支援施設一覧

施設名	担当教員
武内病院	大川 明子
四日市羽津医療センター	小池 敦
松阪中央総合病院	関根 由紀
県立総合医療センター	宮崎 つた子
藤田医科大学七葉記念病院	長谷川 智之
県立志摩病院	上田 貴子
済生会明和病院	前田 貴彦
独立行政法人国立病院機構鈴鹿病院	川島 珠実

発表会支援の様子



1. 受講者アンケート結果

1) 施設単位看護研究支援

アンケート回収数は8施設40件（回収率83.3%）であった。満足度は、「大変満足」、「満足」と回答した者は97.5%であり、前年度より3.3ポイント上昇した。その理由は「指導していただき、様々な考え方や研究方法を学ぶことができた」、「初心者に対しても丁寧に教えてくださる。常にポジティブな言い方をしていただき研究へ取り組めた」、「研究内容の目標や内容についてアドバイスをいただき方向性を導く事ができた」などであった。一方、「不満」と回答した者は2.5%であり、その理由は、「対面で先生に教えてもらいたかった。もう少し先生とのやりとりがしたかった」といったオンラインならではの意見があった。

2) 看護研究発表会支援

アンケート回収数は37件（回収率61.7%）であった。満足度は「とても満足」、「満足」と回答した者は94.6%であり、その理由は「2年間研究指導をいただけた先生に講評をいただいた。つたない研究計画書から発表できるまでに仕上げる事が出来たことが研究者にとって貴重な経験となりました。」、「ご指導いただいた先生のお言葉は大変ありがたいもので本人たちの今後の励みになったと思います。」などであった。「やや不満」と回答した者は、5.4%であり、その理由は対面かオンラインか選べたらよかった。といったハイブリットならではの意見であった。

<評価>

施設単位看護研究支援は、数値目標の「過去3年間の平均件数10.3件を維持する」は、今年度新規で支援を利用する病院が増えたが、目標は達成できなかった。また、新型コロナウイルス感染症の影響による業務過多のため、申込み後キャンセルとなった施設があった。一方、施設単位看護研究支援の満足度は96.9%と高く、研究支援施設の担当者および支援教員が状況に合わせ、丁寧に対応した結果と評価できる。

看護研究発表会支援は、数値目標「過去3年間の平均利用件数1件を維持する」は、目標を達成できた。また、満足度は94.6%と高かった。これは、施設単位看護研究支援からかかわった教員が看護研究発表会で講評を行うといった、繋がりのある支援を実施できたからと考える。この一例は、看護研究支援における一つのロールモデルといえる。

以上より、「施設単位看護研究支援」では看護研究のプロセスに沿った支援、「看護研究発表会支援」では講評、審査によって、県内医療機関等における看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことで「職業人としての意識」および「看護の質」の向上に繋がったと評価する。

Ⅲ. 今後の課題

- ・必要時、事業参加者に研究の基礎知識や看護研究実践能力を養うために、看護研究SEEDやハウツー看護研究および看護研究エッセンスを紹介する。
- ・募集案内に、ロールモデルとして施設単位看護研究支援から看護研究発表会支援への繋がりを紹介する。

3. 公開講座

3. 公開講座

担当者：林辰弥、長谷川明子、地域交流センター委員

【事業要旨】

広く県民を対象としたテーマの公開講座等を定期的を実施する。

【地域貢献のポイント】

- ・ 県民の看護・医療・健康への関心や意識を高める。
- ・ 県民の学習ニーズの把握に努め、本学が有する資源を活かした生涯学習等を行う。

【昨年度からの課題】

- ・ 今年度も新型コロナウイルスの感染状況に配慮し、感染防止対策を講じつつ、来場とオンラインの併設により、より多くの県民の参加と満足が得られる講座を開催する。
- ・ テーマや内容の検討には、アンケート結果を反映し、県民のニーズに沿った講座を開催する。
- ・ 新型コロナウイルスの感染状況により、急な開催方法の変更が生じた際に、県民の理解が得られるよう案内チラシ・ポスターには、変更の可能性について明記する。

I. 活動計画

＜数値目標＞

- ・ 参加者数の目標値

1 回の開催につき、来場者、オンライン受講者合わせて、100 人以上。

＜実施計画＞

- ・ 昨年度からの変更点

1. 新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みつつ、開催場所や来場者数を変更する。
2. 講師には来場による講演を依頼するが、急なオンラインによる講演への変更にも、県民の理解が得られるように、案内チラシ・ポスターには、オンライン講演に変更となる可能性について明記する。

- ・ 実施計画

1. 新型コロナウイルスの感染状況に配慮し、感染防止対策を講じつつ、来場とオンラインの併設により、より多くの県民の参加と満足が得られる講座を開催する。
2. 案内パンフレットを作成し、県内各所に送付するとともに本学ホームページに掲載して周知啓発を行う。
3. 申込定員は、新型コロナウイルスの感染状況をふまえて決定する。定員になり次第申込受付を終了するが、定員を超える申し込みがあった場合は、キャンセル待ちを希望する人へ連絡をする。
4. 新型コロナウイルス感染防止対策として、検温・手指消毒、参加者間の距離の確保、会場内の換気を行う。

Ⅱ．活動の結果と評価

<結果>

1．開催回数

令和4年度は3回の公開講座を開催した。（実施の詳細は後半に記載）

2．参加者数

来場による参加者は、各回とも定員を100名とした。各回とも、教職員、在学生のオンライン受講を併設し、来場とオンライン受講合わせて、第1回197名、第2回185名、第3回207名であった。（参加者の内訳は実施の詳細に記載）

3．参加者の背景

参加者の年齢は、70歳代が最も多く、41.3%、次いで60歳代は17.0%、80歳代は16.4%であり、60歳以上の参加者が7割を超えていた。参加者のうち、医療・福祉・保健関係者は、18.3%であり、一般の方が8割を超えた。公開講座を知るきっかけは、「大学からの案内」が最も多く、次いで、「ポスター」、「友人・知人の案内」であった。

4．講座の満足度

講座の内容について、「とてもよかった」が62.8%、「よかった」が33.0%であり、「あまりよくなかった」、「よくなかった」は0.0%、「無回答」が4.2%であった。

5．今後希望する公開講座のテーマ

今後、希望するテーマは、「心の健康」101名、「高齢者と健康」100名が最も多く、次いで、「認知症」が77名、「生活習慣病」が72名、「在宅看護・介護」が55名の順であった。

<評価>

参加者数について、毎回100名以上の参加があり、今年度の参加者総数は589名で、昨年度の総数を57名上回った。また、講座の内容については、昨年度のアンケート結果の上位「高齢者と健康」、「心の健康」、「認知症」を反映したテーマ・内容を設定し、95.8%の肯定的な評価が得られ、昨年度の88.7%を上回った。

コロナ禍においても、参加者の7割以上を占める高齢者世代のニーズに応じ、一般参加者には対面で参集いただき、同時にオンラインで開催することによって、より多くの県民の健康に関する知識の向上に寄与できたと考える。

Ⅲ．今後の課題

次年度は、新型コロナウイルスに関する情報を注視し、それに応じた感染防止対策を講じつつ、来場人数を増やすことにより多くの県民の参加と満足の得られる講座を開催する。

公開講座実施の詳細

1. 第1回公開講座

講演：体験！コグニサイズで認知症予防を

講師：白石 葉子 氏

(常葉大学健康科学部看護学科 学科長兼基礎看護領域教授)

日時：令和4年6月18日(土) 13時10分～14時40分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(学生・教職員)

参加人数：197名

【内訳】

来場者 112名(一般：92名 報道：1名 教職員：19名)

オンライン 85名

(学生：82名 教職員：3名)

主催：三重県立看護大学

後援：三重県、津市、

公益社団法人三重県看護協会



2. 第2回公開講座

講演：つながりと健康格差：コロナ禍であらためて考えるつながりの大切さ

講師：村山 洋史 氏

(東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム

研究副部長)

日時：令和4年10月29日(土) 13時10分～14時40分

場所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(学部生・大学院生・教職員)

参加人数：185名【内訳】来場者 94名(一般：74名 報道：0名 教職員：20名)

オンライン 91名(学部生・大学院生：82名 教職員 9名)

主催：三重県立看護大学

後援：三重県、津市、

公益社団法人三重県看護協会



3. 第3回公開講座

講 演：誇れる過去は、諦めない今がつくる

講 師：伊藤 智也 氏（車いすランナー・バイエル薬品株式会社所属）

日 時：令和5年1月7日（土）13時10分～14時40分

場 所：①三重県立看護大学 講堂

②オンライン(在学生・卒業生・教職員)

参加人数：207名

【内訳】

来場者 112名

（一般:88名 報道:2名 教職員:22名）

オンライン 95名

（在学生:74名 卒業生:11名 教職員:10名）

主 催：三重県立看護大学

共 催：三重県スポーツ協会みえ女性スポーツ

指導者の会、三重県立看護大学同窓会

後 援：三重県、公益社団法人三重県看護協会、津市



4. 認知症多職種連携研修会

4. 認知症多職種連携研修会

担当者：六角僚子、林辰弥、長谷川明子

【事業要旨】

認知症多職種連携研修会とし、認知症の方が住み慣れた地域で安心して暮らし続けていけるように、多職種の連携・具体的実践について考えていくこととした。

なお、本事業は、在宅医療助成 勇美記念財団「在宅医療推進のための多職種連携研修会への助成」により実施した。

【地域貢献のポイント】

多職種が顔と顔の見える関係づくりを行うことで、相談がしやすくなり、早期に対応することが可能となると考える。また、この研修会開催によって、職種間交流をはじめ、議論を越えた先に、それぞれの思いが共通認識されることもあるため、醸成することが大切だと考える。すぐには効果が出ない可能性もあるが、当該研修を通したネットワークを受講者自らが活用していくことが重要だと考える。そのきっかけづくりを当該研修で行い、仕掛けをしていくことで、町づくりにもつながっていき、最終的には、オリジナルな地域包括ケアシステムが出来上がっていくのではないかと考える。

I. 活動計画

＜数値目標＞三重県内の多職種者の参加 30名以上 100名以内

＜実施計画＞令和5年3月5日（日） 13時半から 16時

認知症多職種連携研修会開催

三重県立看護大学大講義室

【基調講演】

講演1 「認知症の方への多職種協働による効果」

山川 伸隆氏（いせ山川クリニック院長）

講演2 「多職種連携にむけた具体的実践」

澁谷 咲子氏（県立一志病院看護部長）

【グループディスカッション】

事例をもとに、多職種でグループディスカッション・発表・講評

座長 三重県立看護大学在宅看護学領域 六角 僚子

II. 活動の結果と評価

＜結果＞

昨年二回に渡り、当大学で開催された認知症対応向上研修（多職種向け）の受講者を対象として、今回はステップアップ研修という形で位置付けられた。そこで過疎地域の病院での多職種連携の取り組みや地域に開かれた開業医の取り組みについての講演と認知症の

困難事例へのディスカッションを企画した。約1時間の講義に引き続き、事例紹介、事例に対するQ&Aを行い、ディスカッションに入った。グループは多職種で構成された。それぞれの立場から意見交換をして、模造紙へ共同作業で書き込みを行った。認知症の事例は複雑であり、それを一つ一つ紐解きながら、認知症同士の夫婦の生活の在り方、病気の診断の是非、それらをどのように多職種連携を図るのかを具体的に話し合えたようである。

以下はアンケート結果（回収率 90.3%）である。

- ・研修満足度（4段階評価）

とてもよかった 21 名（75.0%）、よかった 7 名（25.0%）

- ・研修の感想（自由記述）

難しく感じていた多職種連携についての講義に参加できて勉強になり、実際に具体的に知ることができた。お互いの職種を理解し尊敬するとともに、少し垣根を越えてみる勇気を持ちたいと思った。認知症の事例が自分の抱えているケースのヒントにもなり学び多い時間であり、認知症になった方の生活を支援する為には、多職種がどのように連携して関われば良いのか考える良い機会になった。多職種の方と意見交換ができて、自分の行動も振り返ることができ、多職種連携の本質を学ぶことが出来たと思った。

< 評価 >

看護師・保健師・理学療法士・歯科衛生士・介護支援専門員など 30 名を超える多職種が参加し、数値目標は達成したと考える。またアンケートの結果より、肯定的な評価が 100% であり、研修の感想からも満足度は高いと感じた。

Ⅲ. 今後の課題

当該研修での受講者同士のネットワークづくりを基盤とし、市町でのつながりが強化され、それぞれのオリジナルの地域包括ケアシステム構築が可能となると考えられる。それを支援するための研修会やミーティングの場の提供を大学としては継続していくことが重要である。

VI. 連携

1. 連携協力協定
2. 看護管理者意見交換会
3. 人事交流教員支援

1. 連携協力協定（医療機関・市町）

担当者：林辰弥、川島好子

1) 連携協力協定（医療機関）

目的：本学と医療機関が相互に連携・協力関係を構築することで、臨床現場における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

表 1. 連携協力協定病院（令和 5 年 3 月 31 日現在）

	医療機関名	協定締結日
1	県立こころの医療センター	平成 25 年 2 月
2	松阪市民病院	平成 26 年 3 月
3	済生会松阪総合病院	平成 26 年 3 月
4	厚生連松阪中央総合病院	平成 26 年 5 月
5	県立総合医療センター	平成 26 年 6 月
6	伊勢赤十字病院	平成 26 年 8 月
7	国立三重病院	平成 27 年 1 月
8	県立一志病院	平成 27 年 11 月
9	厚生連鈴鹿中央総合病院	平成 29 年 4 月
10	市立伊勢総合病院	平成 30 年 3 月
11	岡波総合病院	平成 31 年 3 月
12	伊賀市立上野総合市民病院	令和 2 年 8 月

2) 連携協力協定（市町）

目的：本学と市町が相互に連携・協力関係を構築することで、臨地における学生と看護職者の資質を向上し、充実した県民サービスにつなげる。

表 2. 連携協力協定市町（令和 5 年 3 月 31 日現在）

	市町名	協定締結日
1	名張市	令和 3 年 3 月
2	津市	令和 3 年 7 月

2. 看護管理者意見交換会

担当者：林辰弥、長谷川明子

【事業要旨】

県内病院等の看護管理者を対象に、本学の取組について、理解と協力を得て連携を深めるとともに、地域に根差した看護の教育・研究機関である本学の役割を示し、地域の医療機関のニーズ把握を図るため、本学学長との意見交換会を実施する。

【地域貢献のポイント】

県内の病院等看護管理者の看護管理実践に有用な情報提供、意見交換を行い、各施設における看護実践・看護教育・看護研究の質向上に寄与する。

【昨年度からの課題】

意見交換を円滑に行うため、意見交換のテーマを案内送付時に周知し、事前に各施設で考えをまとめたうえで参加できるようにする。

I. 活動計画

＜数値目標＞

COVID-19 による医療機関の状況をふまえ、前年度の看護管理者の出席者数 30 名（オンライン）を維持する。

＜実施計画＞

1. 昨年度からの変更点

- ・昨年度に引き続き、COVID-19 の状況を鑑み、看護管理者が出席しやすい方法、時期・時間を十分検討し、開催する。
- ・昨年度はオンライン開催となったが、看護管理者より「意見交換」を重要視する声が上がっていることから、今年度は「意見交換」の時間を十分に設け、対面での開催についても検討する。

2. 対象者

県内病院等の看護管理者

3. 開催日時

令和 4 年 9 月 15 日（火）13：30～16：00

4. 会場

三重県立看護大学 大講義室

5. 内容

（1）行政からの情報提供

「三重県における医療の現状と看護への期待」

三重県医療保健部 医療政策総括監 杉本 匡史

(2) 学長による講話

「時代と共にある看護学」

学長 片田 範子

(3) 本学からの情報提供

「本学の入試制度について」

メディアコミュニケーションセンター長 小池 敦

(4) 意見交換

「コロナ禍における異文化背景をもつ患者および家族への対応」

(5) まとめ

Ⅱ. 活動の結果と評価

< 結果 >

昨年、一昨年は COVID-19 の影響によりオンラインでの開催となったが、今年度は 2 年ぶりに本学で開催した。今回は、行政、学長、本学からの話題において、共通して、看護の対象の多様性、異文化背景を持つ人々への看護について触れ、看護管理者間の意見交換のテーマは「コロナ禍における異文化背景をもつ患者および家族への対応」とした。昨年度まで、オンラインのため不十分であった意見交換の時間を 40 分確保し、活発な意見交換が行われた。

1. 出席者の概要について

出席者は 36 名で、看護管理者 20 名、三重県医療保健部より 1 名、学内教職員 15 名であった。看護管理者の医療圏別内訳は、北勢 7 名、中勢 11 名、南勢 3 名、伊賀 0 名、東紀州 0 名、であった。また、所属施設別内訳は、病院 19 名、訪問看護ステーション 1 名、であった。



写真:会の様子

2. 出席者によるアンケート結果について

開催後、看護管理者に Microsoft Forms によるアンケートを実施し、回収率は 80.0% であった。アンケートは、図 1 の各項目に関して「とても満足」、「満足」、「やや不満」、

「不満」の4段階で評価した。

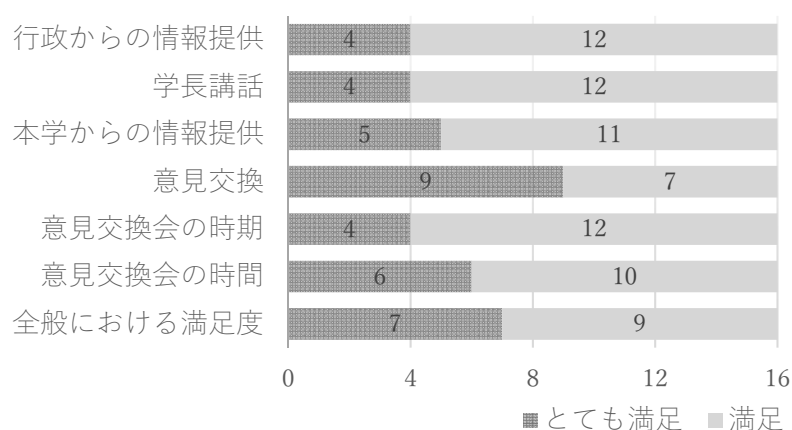


図1 アンケート結果

すべての項目において、「とても満足」または「満足」の肯定的評価が100%であった。行政からの情報提供については、「コロナ最新情報の共有と外国籍の方への感染拡大防止について勉強になった。」、「異文化の方々の県の対応についてよくわかりました。」等の感想があった。また、学長による講話について、「看護学と地域社会との協働、地元創成等について知る機会となった。」、「社会が変化し、色々な事が変革していることに、看護も多様化しなければならないと学んだ。」等の感想がみられた。本学からの情報提供では、主に【多言語多文化選抜】について触れ、「今後の医療、看護に必要とする人材について考えるきっかけとなった。」、「多言語多文化選抜の方法やその意義を理解しました。」等の感想があった。

意見交換の満足度については、昨年度は、「とても満足」が20.0%「満足」が64.0%に対し、今年度は「とても満足」が56.2%、「満足」が43.8%であった。「それぞれの医療機関での取り組みについて共有できた。」、「悩んでいる事を共有できた事で、より頼みやすい関係性になり、コロナ禍でも学びや交流の機会を企画していただきありがたかった。」等の感想があった。意見交換の方法について、オンラインでのグループワークは初めての試みであったが、

意見交換の方法や全体を通しての感想として、「県立看護大学が目指す方向がよくわかった。」、「県内の看護管理者と情報交換出来てよかった。」、「対面で話せることは良いと思った。」、「オンライン参加も選択できると良かった。」等の感想があった。

今後希望する意見交換の内容として、新人看護師の教育に関する情報共有、管理者を含む看護の人材育成、今どきの学生と大学教育、地域包括ケアシステム等の希望があった。

<評価>

看護管理者の出席者数は、オンライン開催の過去2年間の数(いずれも30名)を、10名下回り、過去最低の人数となった。特に、伊賀と東紀州からの出席者はゼロであった。COVID-19による影響で多忙を極める中、業務との両立や距離や時間的な問題から、出席が困難であったことが予測される。

出席者によるアンケートの結果からは、直近の COVID-19 の最新の情報や対応における課題に関する知見を広げていただき、また、地域に根ざした多様な看護のあり方、異文化背景を持つ人々への医療・看護の課題について、見識を深めていただけたのではないかと考える。また、意見交換においては、昨年度までのニーズに応じ、時間を十分に確保したことにより、意見交換への満足度を上げることができた。これらのことから、出席者の看護管理実践に有用な情報の提供、情報交換ができたのではないかと考える。

Ⅲ.今後の課題

開催方法について、より多くの県内の看護管理者に出席していただけるよう方法、時期、時間を十分検討する。

3. 人事交流教員支援

担当者：林辰弥、長谷川明子

【事業要旨】

本事業は、人事交流教員が1年間本学助手として教育、研究、大学経営および地域貢献を担うにあたり、新たな環境に順応し目標達成できるよう相談的役割を担う。

【地域貢献のポイント】

県内の病院より人事交流として派遣された看護職が、本学における教育や研究活動へのモチベーションを維持し、臨床での実践活動に反映することができる。

I. 活動計画

<実施計画>

1. 定期的なミーティング

人事交流教員の日ごろの活動を振り返り、気づきや学び、悩みごとなどを共有する。できるだけリラックスした環境で、時にはランチミーティングやティーミーティングとしてリフレッシュをはかる。2か月に1回程度とするが、状況をみて回数を増減する。

2. 個別相談

随時メールによる相談を行う。支援側よりメールを送り、相談しやすい環境をつくる。ミーティングの内容やメールでのやりとりから、必要時は別途面談をする機会を作る。

3. その他の対応

- ・相談内容によって必要な場合は、本人の意向を尊重しながら、適所へ報告する。
- ・定期的なミーティングの実施日程については、配属先の領域長に情報提供する。

II. 活動の結果と評価

人事交流教員の授業や実習等の業務上の都合を考慮しつつ、下記の日程でミーティング等を行った。人事交流教員2名と地域交流センター配属の特任教員1名が参加し、COVID-19の感染防止対策を十分にとりながら、毎回1時間程度で開催した。内容は、各時期における教育や研究、看護職としてのキャリア等について自由に語り合い、気づきや学び、悩み事を共有した。必要時には、個別にてミーティングを設定した。

- ・5月 「歓迎ミーティング」：自己紹介、1年間の抱負
- ・8月 「リフレッシュミーティング」：授業や演習、学生とのかかわり等について
- ・11月 「リフレッシュミーティング」：領域別実習や研究について
- ・2月 「おつかれさまミーティング」：実習を終えての感想、研究の状況について
- ・3月 「送別ミーティング(個別)」：1年間の振り返りと今後の課題、抱負について

本事業により、人事交流教員が日常の職務から離れ、看護や教育、研究についてリラックスして語ることにより、心身のリフレッシュにつながったのではないかと考える。

Ⅲ. 今後の課題

次年度も、対象となる人事交流教員の状況に合わせて回数、方法を検討し実施する。特に、複数の人事交流教員を迎える年度は、看護職経験年数や所属施設での役割、職位などが全く異なる場合もあるため、全体ミーティングと個別ミーティングを織り交ぜて支援することが望ましい。

VII. その他

1. 情報発信・広報活動
2. 各種講座案内と申込書

1. 情報発信・広報活動

1. 情報発信・広報活動

令和4年度の地域交流センター事業に関する情報発信・広報活動は以下のとおりである。

1. 年報発行

地域交流センター年報 令和4年度 VOL.25

令和5年5月に発行予定

(担当:長谷川明子)

2. 報告会開催

令和4年度地域交流センター活動報告会

日時:令和5年3月16日(木)10時40分～12時00分

場所:三重県立看護大学 食堂

発表:ポスター

方法:交流会形式

第一部

1. 令和4年度地域交流センター活動の総括1・2

【教員提案事業:今年度終了】

2. Brush up! 急性期看護

3. 看護職者を支援する相談窓口事業

4. みかん大「暮らしの保健室」

5. Re-mamma Café (リマンマ カフェ)

6. 対話による探Qカフェ

7. みかん大もの忘れ相談

【教員提案事業:継続中】

8. 子どもたちに「たいせつなからだ」を伝えるプロジェクト

第二部

【受託事業】

9. 三重県新人助産師合同研修事業

10. 助産師(中堅者)研修事業

11. 三重県認知症対応力向上研修事業

12. 母子保健体制構築アドバイザー事業

【その他】

13. 認知症多職種連携研修会

【卒業生支援事業】

14. 卒業生のきずなプロジェクト

15. 卒業生支援プロジェクト

(担当:西川真野)

3. ホームページ（地域交流センターおよび大学トピックス欄における情報発信）

- ・地域交流センターの活動の「みえる化」を目的に、積極的に活動記事をアップし、昨年度記事数 91 件に比し、今年度は 65 件であった。

（担当：西川真野）

4. 県内関係機関へのパンフレット配布

- ・「令和 4 年度 三重県立看護大学地域交流センター 講師派遣のご紹介」
県内医療施設、社会福祉施設、教育施設等へ 1223 件、2285 部を配布

（担当：長谷川明子）

5. イベントへの参加

1) フレンテまつり 2022 オンライン

期間：令和 4 年 6 月 23 日（木）～8 月 31 日（水）

内容：フレンテまつり特設ホームページ上における大学紹介、地域交流センター事業の紹介

主催：三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」

2) みえアカデミックセミナー2022 公開セミナー

日時：令和 4 年 7 月 20 日（水） 13 時 30 分～15 時 05 分

場所：三重県文化会館 レセプションルーム

テーマ：「認知症介護を愛と知恵で」

講師：教授 六角僚子

参加人数：64 名

主催：三重県生涯学習センター



写真：公開セミナーの様子

3) みえアカデミックセミナー2022 移動講座

日時：令和5年3月2日(木) 13時30分～15時00分

場所：大台町健康ふれあい会館

テーマ：「健康寿命をのばそう！」

講師：准教授 日比野直子

参加人数：12名

主催：大台町教育委員会・三重県生涯学習センター



写真：移動講座の様子

4) 三重県子どもの居場所づくりアドバイザー派遣事業

委嘱期間：令和4年9月15日～令和5年3月31日

目的：県内で活動する子どもの居場所（子ども食堂、学習支援教室・無料塾、フードバンク、フードパントリー、プレーパーク等）における人材育成を促進するため、先駆者的な子ども食堂の運営者や、学習支援・広報・食品安全衛生等に関する専門家、スポーツや文化・芸術等の子ども向け体験指導者等を「子どもの居場所づくりアドバイザー」（以下「アドバイザー」という）として地域に派遣し、子どもの居場所の重層的かつ持続的な運営を支援することを目的とする。（三重県子どもの居場所づくりアドバイザー派遣事業実施要綱より）

登録内容：「本学では、すべての教員が地域交流センター職員を兼務し、地域貢献活動に携わっています。教員の専門分野は看護学を中心に多岐にわたります。子どものこころやからだの健康、子育て支援、子育て世代の健康づくりなど、様々な視点から、子どもの居場所づくりに取り組まれるみなさまのサポートをさせていただきます。」

依頼：1件依頼があったが、専門分野の教員と日程が合わず辞退した。

（担当：長谷川明子）

6. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

令和4年度の広報を主たる目的としたテレビ・ラジオの放送、新聞掲載を以下に示す。

表2. テレビ・ラジオ・新聞等による広報

媒体		内容	月	日
TV	ケーブルテレビ ZTV	じもトピ	第1回公開講座	6 20
			第3回公開講座	1 13
新聞	三重タイムズ	教員提案事業「Re-mamma Café（リマンマ カフェ）」	12	2
	中日新聞	第3回公開講座	1	10

（担当：西川真野）

2. 各種講座案内と申込書

1) みかん大出前講座

本学の教員は、自身の教育や研究、社会活動の専門性や成果をもとに、県民の皆さまを対象とした出前講座を行っております。皆さまからのお申し込みにより、集会・学習会などにお伺いして講演を行います。11 ページより掲載の「みかん大出前講座 テーマ一覧」より、ご希望のテーマをお選びいただき、25 ページの「みかん大出前講座」申込書にてお申し込みください。

1. 目的

みかん大出前講座は、より多くの県民の皆さまに、看護や医療、健康などに関心をもっていただくことを目的としています。

2. 対象者

県内に在住・在勤・在学の 5 名以上の参加者が見込めるグループ・団体などが対象です。広く地域の方を受講者として募集することができる場合は、公開講座としての開催をお願いします（本学ホームページに開催案内を掲載します）。

3. ご留意いただきたいこと

- 各講座の時間は 1 講座 90 分以内となります。
- 講師料は**無料**です。交通費のみご負担いただきます。（請求書は発行しません）
交通費の計算は、申込者様所属の規程に基づき、お願いします。
 - * 規程がない場合、本学規程で対応いたしますので、お問い合わせください。
 - * ただし、本学から会場までの距離が 2km 未満の場合は、負担いただく必要はございません。
 - * 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金（素泊まり料金）を直接宿泊施設にお支払いください。
- 施設からの申込件数は、2 件以内とさせていただきます。
- 会場の手配、必要物品（PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等）の準備、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- 公共性の高い保健・医療・福祉関係の方を優先的にお受けし、それ以外の方はご相談に応じます。
- 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。なお、**土・日・祝日や夜間（終了時間が 20 時以降になる場合）**の開催については対応いたしかねますので、ご了承ください。
- 各講座の受付件数には上限があるため、やむを得ずお断りすることがございますのでご了承ください。受付を終了した講座の情報は、本センターホームページに随時掲載いたします

- ・ 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。オンライン講座につきましても、録画や再利用を禁止させていただきます。

＜新型コロナウイルスの感染防止対策について＞

- ・ 本講座においては、十分な感染防止対策のもと行っていただくことをお願いしております。
- ・ **オンライン講座**についても、ご相談に応じます。ただし、オンラインで実施できない講座もございます。詳しくは「みかん大出前講座 テーマ一覧」(11 ページ～)をご覧ください。
- ・ 感染拡大状況に応じて、お申し込み者さまの判断で、中止またはオンライン講座としていただくことが可能です。その際は、地域交流センターまでご連絡、ご相談ください（場合によっては、オンラインでご対応できない場合もあります）。
- ・ 感染拡大状況により、本学の方針に従い中止させていただくことがあります。

4. お申し込み期間

令和4年度のお申し込みは、令和4年11月30日(水)まで受付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

講座ごとに、開催上限回数になり次第、受付終了となります。

5. テーマ選定～お申し込みの流れについて

前ページに記載してある「3 ご留意いただきたいこと」をよくお読みください。



本冊子「令和4年度 三重県立看護大学 地域交流センター 講師派遣のご紹介」に記載されている「みかん大出前講座」から、ご希望のテーマをお選びください。



25 ページの「みかん大出前講座」申込書にご希望のテーマ名、必要事項等をご記入ください。



必要事項を記入した申込書を、FAX または E-mail にて送付し、本センターまで、お申し込みください。

(TEL/FAX : 059-233-5610、E-mail : rc@mcn.ac.jp)

6. お申し込みから実施までの流れ

申込書に記載していただいた希望内容に応じて、本センターにて担当講師と日程を調整します。



日程調整後、本センターから申込者様宛に決定通知書（日時と交通費支払等手続きに関する書面）をお送りします。
（日時の調整がつかず、やむをえずお断りすることがあります。ご了承ください。）



決定通知書を受領後、講座内容の詳細について、申込者様と担当講師との間で直接打ち合わせをしていただきます。

※申込みの前にお問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページ「三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大出前講座」では、みかん大出前講座一覧が確認でき、申込み多数にて受付を終了した講座に関する情報や、「みかん大出前講座申込書」をダウンロードできます。

※尚、申し込み後 2 週間を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

7. お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター

〒514-0116 三重県津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/ FAX (059) 233-5610

E-mail : rc@mcn.ac.jp

ホームページ//三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大出前講座

令和4年度「みかん大出前講座」申込書

三重県立看護大学地域交流センター

申込書記入日 令和4年 月 日

機関・団体名称				分類	医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()
連絡先	(ふりがな) 担当者名				
	住所	〒		電話	
	FAX		E-mail	※必ずご記入願います	

※申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、出前講座決定通知書の送付や出前講座実施に向けての打ち合わせに使用させていただきますものであり、その他の用途に使用することはありません。

出前講座の希望内容	希望日時 第1～3 (土日・ 祝日不可)	① 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ③ 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分		
	希望 会場名			参加予定人数 名
	会場 所在地			参加者の内訳 (例：看護師 30 名、 保護者 30 名、高校 2 年生 30 名など)
	番号/ テーマ名	No. —	テーマ名	
出前講座資料		<input type="checkbox"/> 事前に必要 <input type="checkbox"/> 当日でよい ※資料の有無は講座によります。 必要部数の印刷は依頼者側で行っていただきます。		広く地域の方を受講者として募集することができ (本学HPに開催案内を掲載) 可能 不可能 要相談

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「みかん大出前講座」決定通知書

受付 No()

ご依頼いただきました出前講座は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和4年 月 日

決定事項	テーマ番号	No.	テーマ名		
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分			
	講師氏名			講師連絡先	

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までお問い合わせください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/FAX (059) 233-5610 E-mail: rc@mcn.ac.jp

2) みかん大リクエスト講座

本センターでは、看護研究に関する講座や出前講座等を実施しております。それらの講座以外の内容をご希望される場合は、「出前講座にはない〇〇に関する講演をしてほしい」などのご要望に合わせて、講師を派遣いたします。ご要望の際には、27ページの「みかん大リクエスト講座」申込書にてお申込みください。

なお、「みかん大リクエスト講座」は有料となりますので、あらかじめご了承ください。

1. ご留意いただきたいこと

- ・ 講師料はお問い合わせください。別途交通費もご負担いただきます。
(請求書は、講座が終わりましたら、当センターより送付いたします)
* 本学から会場までの往復に要する交通費をご負担いただきます。
* 交通事情等により現地宿泊が必要となる場合は、申込者様側で宿泊施設を予約し、その料金(素泊まり料金)を直接宿泊施設にお支払いください。
- ・ 会場の手配、必要物品(PC・プロジェクター・スクリーン・講義資料の印刷等)の準備、参加者への開催周知は申込者様側でお願いします。なお、本学を会場としてお貸しすることもできます(有料)。
- ・ 政治、宗教、営利を目的として実施する場合、もしくは、政治・宗教・営利を目的とした催しと一体的に実施する場合はお断りします。
- ・ 公共性の高い保健・医療・福祉関係の方を優先的にお受けし、それ以外の方はご相談に応じます。
- ・ 開催日や時間についてはご相談に応じますが、教員の業務の都合上ご希望に添えない場合があります。
- ・ 講座のビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。オンライン講座につきましても、録画や再利用を禁止させていただきます。

<新型コロナウイルスの感染防止対策について>

- ・ 本講座においては、十分な感染防止対策のもと行っていくことをお願いしております。
- ・ **オンライン講座**についても、ご相談に応じます。
- ・ 感染拡大状況に応じて、お申し込み者さまの判断で、中止またはオンライン講座とさせていただくことが可能です。その際は、地域交流センターまでご連絡、ご相談ください(場合によっては、オンラインでご対応できない場合もあります)。
- ・ 感染拡大状況により、本学の方針に従い中止させていただくことがあります。

2. お申し込み期間

令和4年度のお申し込みは、令和4年11月30日（水）まで受付けます。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

お申し込みの前に、講師派遣のテーマ・内容等について、お問い合わせいただくことも可能です。

※本学ホームページの「三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大リクエスト講座」では、「みかん大リクエスト講座」申込書をダウンロードできます。

※希望の教員名についてはなるべくご記入いただきますようお願いいたします。

各教員の担当授業科目や研究課題等は、本学ホームページ「三重県立看護大学＞大学案内＞教員一覧＞教員個人名」からご確認いただけます。

※尚、申し込み後2週間を過ぎても、本センターからの返事がない場合は、お手数をおかけしますが、お電話にてご確認くださいませようお願いします。

3. お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター

〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1

TEL/ FAX (059) 233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

ホームページ//三重県立看護大学＞地域交流センター＞みかん大リクエスト講座

4. 過去2年間にリクエストのあったテーマ

派遣先	テーマ
医療機関	関連図を学ぶ
	看護研究
	看護診断を学ぶ
	看護診断
	形態機能学を活かした看護実践
	マネジメントラダーの見直し
	フィジカルアセスメント～呼吸・循環～
	フィジカルアセスメント～新人編～
	マネジメントラダーの見直し
	新キャリアラダー評価の検討会
	コーチングの基本
	コーチング
行政機関	施設・訪問サービスにおける感染症対策と業務継続のポイント
	大規模災害時の対応 業務継続のため平時から備えておくこと
	施設・居宅における感染対策～あれ？防護服ってどう着る＆脱ぐ？～
	子どもを理解するための基礎知識
	子どもの家庭福祉
教育機関	新型コロナウイルス感染症について～知識と予防～
	学校における感染症の予防と対策
	思春期のこころとからだ
	薬物乱用防止講座
その他	健康で長くボランティアを続けるために
	健康寿命をのばそう！～食生活を中心に生活習慣を改善する～
	健康寿命をのばそう
	熱中症 with 新型コロナウイルス ～急変時対応も含めて～

令和4年度 「みかん大リクエスト講座」 申込書

三重県立看護大学地域交流センター

申込書記入日 令和4年 月 日

機関・団体名称		分類		医療機関・行政機関・社会福祉機関・ 教育機関・NPO法人・専門職団体・ ボランティア団体・その他()	
連絡先	(ふりがな) 担当者名				
	住所	〒		電話	
	FAX		E-mail	※必ずご記入願います	

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、本事業決定通知書の送付や本事業実施に向けての打ち合わせに使用させていただきます。その他の用途に使用することはありません。

講師派遣の希望内容	希望日時 第1～3	① 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分 ③ 令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分		
	希望 会場名			参加予定人数 名
	会場 所在地			参加者の内訳 (例：看護師 30 名、 保護者 30 名、高校 2 年生 30 名など)
	希望する 教員氏名		テーマ名	
具体的内容 *別紙添付可		*その他ご希望がありましたらご記入ください。		

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「みかん大リクエスト講座」決定通知書 受付 No()

ご依頼いただきました事業の担当教員は、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和4年 月 日

決定事項	テーマ名				
	開催日時	令和 年 月 日 () 時 分 ～ 時 分			
	職名 教員氏名		教員 連絡先		

上記の教員にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。ご不明な点がございましたら下記の連絡先までご連絡ください。

【連絡先】 三重県立看護大学地域交流センター

〒514-0116 津市夢が丘 1 丁目 1 番地 1

TEL/FAX (059) 233-5610 E-mail : rc@mcn.ac.jp

看護研究SEED

<目的>

看護研究の基本的内容に関する講座を通して、研究を進めるための基礎的な方法を身に付けることを支援します。

<対象>

- 看護の現場で看護実践を行っている方
- これから看護研究に取り組もうとしている方、もしくは現在取り組んでいる方

<事業概要>

受講者が日常の看護業務の中から疑問を見出し、スムーズに看護研究へ取りくめるよう企画しました。今年度は、昨年度のオンライン研修から集合研修とし5日間の開催とします。受講コースは、全5回と単回受講コースを設けています。

<費用>

個人申し込み：全5回受講コース 9,372円（消費税込）
単回受講コース 5,973円（消費税込）

<受講決定>

受講決定者および施設には、受講決定通知を送付します。
応募締切日を3日を過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

<申込方法>

QRコードを読み込んでいただくと、申し込みフォームに移動します。
必要事項をご記入のうえ、送信してください。



※記載いただく個人情報は、本事業の運営のみに使用します。
なお、本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。

申込締切
2022.6.3(金)

<お問い合わせ先>

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：西川 真野
TEL：059-233-5610（平日9時～16時） E-mail：rc@mcn.ac.jp

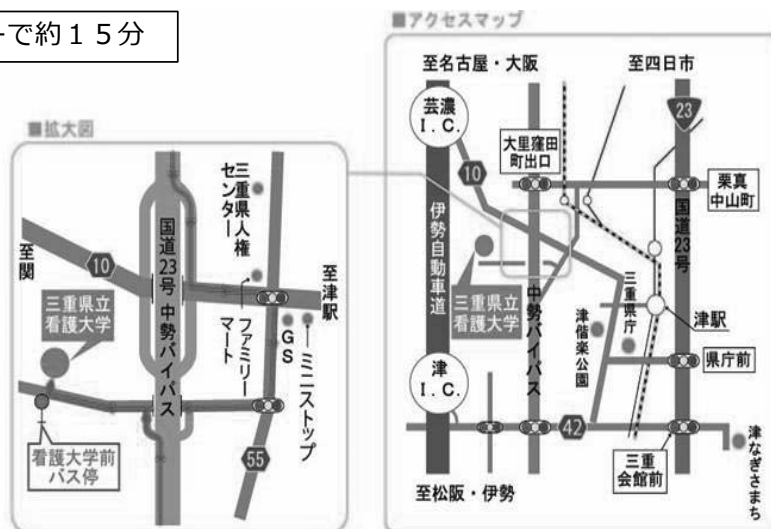
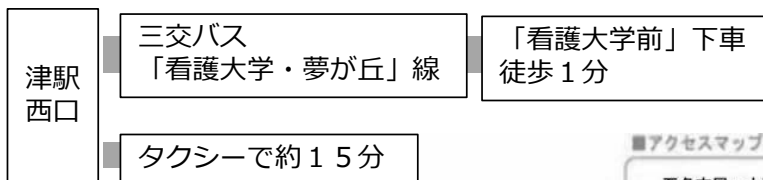
＜プログラム＞

令和2年度より、従来の「看護研究の基本STEP」研修に、新規テーマ「看護研究における倫理的配慮」と「研究デザインのタイプと選択」を加え、受講者が日常の看護業務の中から疑問を見出し、スムーズに看護研究へ取りくめるよう企画しています。また、看護研究研修の次のステップである「ハウツー看護研究」につながるよう「量的研究（実験・計測）」のテーマもあります。

回	日程	テーマ	時間	講師
1	6月14日(火)	センター長あいさつ・オリエンテーション	10:20～10:30	センター長
		看護研究の意義と文献の活用	10:30～12:00	学長
		文献検索と図書館の利用	13:00～14:30	図書館
2	7月1日(金)	研究計画の立て方と書き方	10:30～12:00	河村 敦子
		看護研究における倫理的配慮	13:00～14:30	安部 彰
3	7月5日(火)	研究デザインのタイプと選択	10:30～12:00	上田 貴子
		量的研究(実験・計測)	13:00～14:30	長谷川 智之
4	7月21日(木)	質的研究(インタビュー)	10:30～12:00	関根 由紀
		量的研究(アンケート)	13:00～14:30	関根 由紀
5	8月2日(火)	研究論文作成	10:30～12:00	玉田 章
		プレゼンテーション(演習含む)	13:00～15:00	長谷川 智之

＜会場・アクセス＞

三重県立看護大学
(三重県津市夢が丘1-1-1)



※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、今後の状況次第では、やむを得ず講座を中止する場合があります。
その場合、本学ホームページにて中止のお知らせをしますので、ご確認をお願いいたします。

看護研究エッセンス

● 目的

看護研究遂行能力を強化する方法を学び、演習型の研修を受講することにより、看護現場での研究実践が充実することを支援します。

● 対象

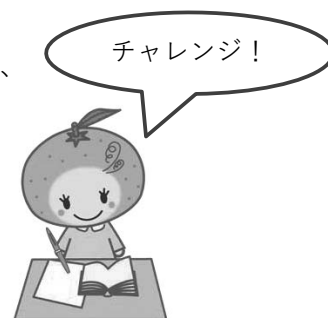
- 本学の「看護研究SEED（旧：看護研究の基本ステップ）」または、同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方
- しばらくぶりに看護研究にチャレンジしようと思っている方

● 費用

1 コース（3 コマ） 7,106 円（消費税込）

● 内容

コース	統計解析① （基本編）	統計解析② （基本編）
日時	7月2日（土） 10:40～16:10	11月12日（土） 10:40～16:10
担当者	斎藤 真	
部屋	第2情報処理教室	
持ち物	USBメモリ	
概要	初学者を対象に、看護研究でよく用いる統計手法について考え方と実際の使い方を学びます。 アンケートや調査、実験データの集計や処理、結果の解釈につなげるための講座です。	
最小催行人数	1人	



開催の様子は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域交流センター>看護研究エッセンス）をご参照ください。

申し込み方法 QRコードの申込みフォームに必要事項をご記入のうえ送信してください

- 申し込みコース 統計解析① 7月2日（土） 統計解析② 11月12日（土）



- 申込締切 6月22日（水） ● 申込締切 11月2日（水）

申込締切日を1週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

※記載いただく個人情報は、本事業の運営のみに使用します。本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。
※会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

会場/住所

三重県立看護大学/三重県津市夢が丘1-1-1

お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：西川

TEL：059-233-5610（平日9時～16時）E-mail：rc@mcn.ac.jp

※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、今後の状況次第ではやむを得ず講座を中止する場合があります。
その場合、本学ホームページにて中止のお知らせをしますので、ご確認をお願いいたします。



ハウツー看護研究

● 目的

看護研究を実際に行うための具体的な研究方法（データ収集、考察に至る一連の過程）を学び、体験することにより、看護現場での研究実践が充実することを支援します。

● 対象

- ・ 本センターの「看護研究SEED（旧看護研究の基本ステップ）」もしくは同等の看護研究の基礎知識に関する研修を修了している方。
 - ・ 原則として、申し込んだコースの全日程に参加できる方。
- ※ご希望の各コースを受講できます。



研究体験

- ## ● 費用
- 1 コース 90分×7回 8,239円（消費税込）

● 内容

コース	質的研究コース （インタビュー）	量的研究コース （アンケート）	量的研究コース （実験・計測）
日時	①8月19日（金）13：00～16：10 ②9月2日（金）13：00～16：10 ③9月16日（金）10：40～16：10	①10月1日（土）9：00～12：10 ②10月1日（土）13：00～16：10 ③10月22日（土）9：00～14：30	①11月26日（土）9：00～12：10 ②11月26日（土）13：00～16：10 ③12月10日（土）9：00～14：30
担当者	浦野 茂・関根由紀	斎藤 真・菅原啓太	斎藤 真・長谷川智之
テーマ	インタビューによる 質的研究を行ってみる	「質問紙の作成と調査の実施」 ー職務満足度について考えをさぐるー	「看護職者の腰痛に関連する 援助時のベッドの高さについて」 ～身近にあるモノを使用し、 明日から使える実験研究！～
第1回	1. 質的研究法の内容と特徴 2. 研究課題を作る 3. 研究デザインを考える 4. インタビューガイドを作る	1. はじめに 2. 調査を行う前に 倫理的配慮を含めた調査研究の注意事項 3. 調査用紙に用いる尺度 4. 調査用紙の作成： フェイスシート、単一回答/選択、 複数回答/選択、順位法、数値配分法、 SD法、自由記述 5. 調査開始 6. データの入力・集計	1. 看護研究における実験研究とは 2. 実験研究の紹介 3. 実験を行う前に： 倫理的配慮を含めた実験の注意事項
第2回	1. インタビューを行う 2. トランスクリプトを作る 3. 分析する	1. 集計結果の整理、図式化 2. 統計的解析 3. データの検討 4. 結果の整理と考察への展開	1. 実験の準備：実験環境、必要な物品、 実験手順の確認など 2. 実験開始： 実験協力者への説明と同意 2種類のベッドの高さで看護援助を 行った際の腰部負担の測定 3. データの集計
第3回	1. 分析結果をまとめる 2. 「発見」を作る	・ 論文の作成： 目的、方法、結果、考察の記述	1. データ分析： 図表の作成、excelを使用した検定 2. 「考察」の検討： 考察について、何を記述すべきか 3. 抄録（学会発表レベル）の作成
担当者からの コメント	質的研究とは、一言で言えば、対象となる人たちの実践や考え方に学ぶことです。シンプルで楽しい作業ですが、だからその難しさもあります。そのあたりを一緒に作業しながら学んでいきましょう。	「アンケートを作りたいけど、どうやって作るのだろう」と思っているかもしれません。アンケート作りには、ちょっとしたコツがあります。コツを知り、ゼロから一緒にアンケートを作ってみませんか。皆様のご参加をお待ちしています！	実験研究は、高額な機器を使用しなければできないというイメージがあるかもしれませんが、本研修ではそのイメージを払拭します。「こんな簡単に実験ができるの？」と参加者全員が思えるように、身近にあるものを実験道具として活用し、参加者全員で実験を作り上げていく内容ですので、ぜひ気軽にご参加ください！
持ち物		USBメモリ	USBメモリ
最少催行人数	2人	1人	1人

開催の様子は本学ホームページ（三重県立看護大学>地域交流センター>ハウツー看護研究）をご参照ください。

※裏面に続く

申し込み方法 QRコードの申し込みフォームに必要事項をご記入のうえ、送信してください。

申し込みコース

質的研究（インタビュー）

量的研究（アンケート）

量的研究（実験・計測）



申込締切 8月4日（木）

9月21日（水）

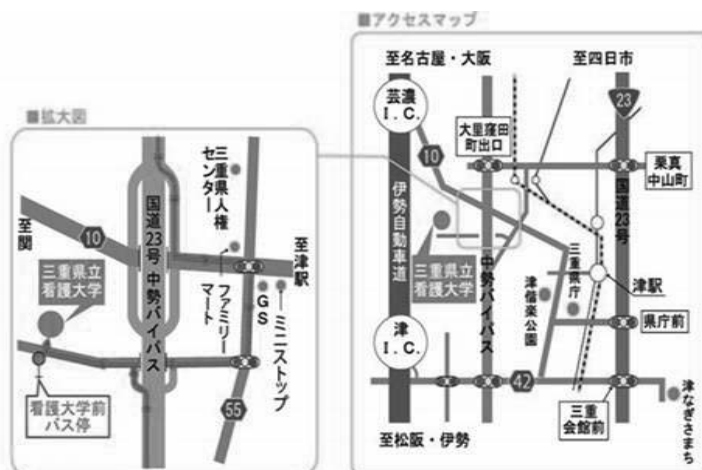
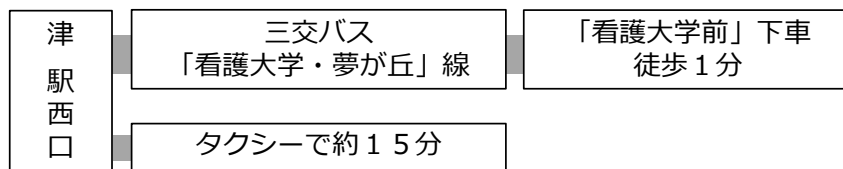
11月10日（木）

応募締切日を1週間過ぎても連絡がない場合は、お問い合わせください。

※記載いただく個人情報は、本事業の運営のみに使用します。本事業の様子を、写真等で本学のホームページ等に掲載いたします。
※会場内での写真撮影・録画・録音を禁止いたします。ご了承ください。

会場/アクセス

三重県立看護大学（住所：三重県津市夢が丘1-1-1）



お問い合わせ先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：西川

TEL：059-233-5610（平日9時～16時）E-mail：rc@mcn.ac.jp



※新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、今後の状況次第ではやむを得ず講座を中止する場合があります。
その場合、本学ホームページにて中止のお知らせをしますので、ご確認ください。

6) 令和4年度「施設単位看護研究支援」のご案内

■施設単位看護研究支援事業とは

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とし、看護研究を行う看護職の複数のグループまたは個人に対し、看護研究のプロセスに沿った支援、施設内における研究支援体制構築への支援等を行います。お申込みのあった県内医療機関等に本学教員がお伺いし支援します。状況によっては、オンラインでの支援も可能です。

＊研究課題が少ない場合は、リクエスト講座を活用し研究支援を受けることも可能ですので、ご相談ください。

■目的

三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とします。

■研究支援期間

研究支援決定日から令和5年3月31日（金）（最長）まで

■研究支援の方法

1回につき3時間の研究支援（1回あたりの指導件数は最大6件を目安）×年4回を標準とします。研究支援期間が長期になりますので、計画的に進めていただきますようお願いいたします。支援の方法（対面支援、またはオンライン支援）、および日程は担当教員と直接相談して決めてください。

＜対面支援の場合＞

担当教員が貴施設に出向きますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。

＜オンライン支援の場合＞（Microsoft Teams・ZOOMの場合）

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレット、スマートフォンをご用意ください。

推奨：パソコン（高速インターネット回線に接続しているもの）

マイク・カメラ内蔵型のパソコンまたはパソコンに接続可能なマイク・カメラの準備

2. アプリのダウンロード

Microsoft Teams・ZOOMアプリを使用されるパソコン（スマートフォン可）にダウンロードしてください。

3. 受信希望のメールアドレス（webアドレスに限る）に、E-mailにてお送りします会議用のURLから参加してください。

■ 支援料金について

- ・ 講師料および対面の場合の交通費（本学から会場まで）をご負担いただきます。
- ・ 講師料は、年間 4 回（1 回当たり 3 時間）の支援を標準として算定した額、税別 12 万円（担当教員の職位に関わらず一定額）となります。なお、実際の支援時間が標準支援時間（3 時間）に満たない場合でも講師料は減額しません。

■ ご留意いただきたいこと

- ・ 各研究は、各自もしくは施設にて主体的に進めてください。
- ・ 研究を進めるにあたり、基本的な看護研究の研修を修了した方が望ましいため、看護研究 SEED およびハウツー看護研究の研修をご活用ください。
- ・ 担当教員は、特定の領域に所属しておりすべての看護領域に精通している訳ではありません。担当教員の専門領域でない研究に対しては、対応しかねる場合があります。専門的な研究支援をご希望の場合は、「みかん大リクエスト講座」をご利用ください。
- ・ 担当教員については、ご希望に添えない場合があります。また、本センターの取り決めにより、3 年以上同じ支援担当は継続できませんのでご了承ください。
- ・ ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。
- ・ 支援内容に研究発表会に係る審査および講評は含まれません。
- ・ 申し込み後のキャンセルなどがないよう、十分に検討しお申込みください。

■ お申込み方法

- ・ 所定の申込用紙により本センターまで、E-mail または FAX のいずれかでお申し込みください。申込用紙は、本学ホームページ（三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞施設単位看護研究支援）からもダウンロードできます。
- ・ 申込みの締切期日は、令和 4 年 2 月 25 日（金）とさせていただきます。

■ お申込みから支援終了（料金請求）までの流れ

- ① 申込書に記載のうえ、本センターまでお申し込みください。
- ② 本センターから担当教員決定通知書をお送りします。（4 月末の送付を目途）
- ③ 貴施設と担当教員との間で支援日程等を調整された後、研究支援開始となります。
- ④ すべての支援終了後、本学より講師料と対面の場合の交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払いください。（恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

■ 問い合わせ先・申し込み先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：西川
TEL/FAX：059-233-5610 E-mail：rc@mcn.ac.jp

令和4年度 三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」申込書

申込〆切 : 令和4年 2月25日(金)

施設名						
担当者 連絡先	住所	〒				
	担当者	役職： <div style="text-align: right;">*必ずご記入願います</div>				
	電話		FAX		E-mail	

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、施設単位看護研究支援決定通知書の送付や支援実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

支援を希望する 研究テーマ数	件 (MAX 6 件まで)
<p style="text-align: center;">研究内容</p> <p>(各テーマ名をお書きく ださい。 別途、資料添付可)</p>	
<p>*支援希望教員名 (あればご記入ください)</p>	

*支援希望教員については、ご希望に添えない場合があります。また、3年以上同じ教員は継続できませんのでご了承下さい。

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「施設単位看護研究支援」決定通知書

ご依頼いただきました施設単位看護研究支援について、支援教員を、下記のとおり決定しましたのでお知らせします。

令和 4 年 月 日

決定事項	施設名		
	支援教員名	本学での担当：	教員名：
	支援教員連絡先	TEL：	E-mail：

上記の支援教員にご連絡のうえ、日程、内容、方法等、詳細な打ち合わせを行ってください。
ご不明な点がありましたら下記の連絡先までご連絡ください。

7) 令和4年度「看護研究発表会支援」のご案内

■ 看護研究発表会支援とは

看護研究に取り組んでいる県内医療機関等を対象とした支援で、看護研究発表会における講評・審査を担当します。お申込みのあった県内医療機関等に、本学教員がお伺いし支援します。また、オンラインでの支援や書面での講評も可能です。

■ 目的

三重県内の看護職者の研究意欲を高めるとともに、研究的思考や研究遂行能力を培うことを目的とします。

■ 支援対象

＜対面支援・オンライン支援＞

5題以上の研究発表がある看護研究発表会

＜書面での支援の場合＞

本学教員が研究支援を行っていた看護研究に限る

■ 看護研究発表会支援の方法

＜対面支援＞

担当教員が貴施設に出向きますので、支援場所の設定等の事前調整をお願いします。支援の日程は、担当教員と直接相談して決めてください。

＜オンライン支援＞（Microsoft Teams・ZOOMの場合）

1. 高速インターネット回線につながったパソコン、タブレット、スマートフォンをご用意ください。

推奨：パソコン(高速インターネット回線に接続しているもの)

マイク・カメラ内蔵型のパソコンまたはパソコンに接続可能なマイク・カメラの準備

2. アプリのダウンロード

Microsoft Teams・ZOOM アプリを使用されるパソコン（スマートフォン可）にダウンロードしてください。

3. 支援の日程は、担当教員と打ち合わせして決めてください。

受信希望のメールアドレス（web アドレスに限る）に、お送りします会議用の URL から参加してください。

＜書面での講評＞

事前に発表原稿をお送りいただき、担当教員が書面で講評し、依頼者に返信します。支援の日程は、担当教員と打ち合わせをお願いします。

■ 支援料金について

*講師料は、お問い合わせください。

＜対面支援＞

- ・講師料および対面の場合の交通費（本学から発表会会場まで）をご負担いただきます。
- ・現地宿泊が必要となる場合はお申込者側で宿泊施設を予約ください。なお宿泊料金（素泊まり料金）は、直接宿泊施設にお支払いください。

＜オンライン支援＞

- ・講師料をご負担いただきます。通信にかかる費用は、依頼者のご負担となります。

＜書面での講評＞

- ・講師料をご負担いただきます。

■ ご留意いただきたいこと

＜対面支援・オンライン支援＞

- ・会場の手配、必要物品の準備、参加者への開催周知はお申込者側でお願いします。
なお、本学を会場としてお貸しすることもできます（有料）。
- ・ビデオ・カメラ・携帯電話等での撮影・録音は固くお断りいたします。

■ 申し込み方法

- ・所定の申込用紙により本センターまで、E-mail または FAX のいずれかでお申し込みください。
申込用紙は、本学ホームページ（三重県立看護大学＞地域交流センター＞看護研究支援＞看護研究発表会支援）からもダウンロードできます。
- ・申込みの締切期日は、令和4年11月30日（水）です。開催希望日の60日前までにお申し込みください。

■ 申し込みから支援終了（料金請求）までの流れ

- ① 申込書を記載のうえ、E-mail または FAX にてお申し込みください。
- ② 担当教員決定後、決定通知書をお送りします。
- ③ 詳細については、担当教員と打ち合わせを行ってください（お申し込み内容に大きな変更があった場合は、本センターにもご連絡ください）。
- ④ 対面支援・オンライン支援は、研究抄録を、開催1週間前までに担当教員にお送りください。
- ⑤ 発表会終了後に、本学より講師料と対面支援の場合は交通費を請求いたします。料金は本学指定の口座への振込によりお支払ください（誠に恐れ入りますが振込手数料はご負担願います）。

■ 問い合わせ先・申し込み先

三重県立看護大学 地域交流センター 担当：西川

TEL/FAX：059-233-5610 E-mail：rc@mcn.ac.jp

令和4年度 三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」申込書

申込書記入日 令和4年 月 日

所属機関の名称							
連絡先	所在地	〒					
	担当者氏名	役職： *必ずご記入願います					
	電話		FAX		E-mail		

*申込書にご記入いただいた個人情報につきましては、看護研究発表会支援決定通知書の送付や看護研究発表会実施に向けての打ち合わせに使用させていただくものであり、その他の用途に使用することはありません。

開催希望日時 (第1、第2)	① 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 ② 令和 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分					
発表会の名称						
開催会場名					参加予定人数	人
会場所在地					会場電話番号	
予定発表演題数	□演 () 題、示説 () 題				方法：・対面支援 ・オンライン支援 ・書面講評 (ご希望の方法に○を記載ください) *その他希望がありましたらご記入下さい。	
ご希望される 教員名						
発表演題の分野 (各領域や質や量的 研究など) *別途資料添付可						

以下は地域交流センター使用欄

三重県立看護大学地域交流センター「看護研究発表会支援」決定通知書

ご依頼いただきました看護研究発表会の担当教員について、下記の通り決定しましたのでお知らせします。

令和 4 年 月 日

決定事項	発表会の名称					
	開催日時	令和 年 月 日 ()	時 分 ~	時 分		
	職名・講師氏名		講師連絡先			

上記の講師にご連絡のうえ、詳細な打ち合わせを行ってください。

編集後記

令和4年度三重県立看護大学地域交流センター年報が完成しました。ご協力いただきました皆様に感謝いたします。

今年度も感染予防行動をおこないながら、本学全教員が地域の皆様とともに、多くの事業に取り組んでまいりました。当センターの講師派遣事業は、平成21年度に始まり14年が経過しました。おかげをもちまして、県民の皆様には本事業が周知されてまいりました。事業開始当初は「出前授業」「公開講座講師派遣」「その他の講師派遣」の3事業、平成27年度からは「出前講座」「その他の講師派遣」事業の2事業を展開しており、令和2年度からは「みかん大出前講座」「みかん大リクエスト講座」という名前に変更しました。皆様からの派遣申し込みも年々増加しており、今年度は2事業で89件実施し、教育・研究の成果を地域に還元できていると感じております。

一方「教員提案事業」では、各教員から提案された様々な事業を関係機関と協働し、地域の皆様との交流をとおして進めることができました。

また、看護職を対象とした「看護研究支援事業」「受託事業」など、教育支援事業も充実しております。また、「リカレント教育」事業では、令和4年度から認定看護師教育課程（B課程）「感染管理」を開講し、16名の認定看護師修了生を輩出することができ、令和5年度にも開講予定です。

これらの事業を進めるにあたり関係各位、地域の皆様に多大なご理解・ご協力いただきましたことをここにあらためて感謝申し上げます。

今年度も、各事業内容を「教員提案事業」「卒業生支援事業」「受託事業」「リカレント教育」「地域交流センター企画事業」「連携」の6事業にまとめ、資料と共に本年報に収録いたしました。

本年報を通じて、多くの皆様に当地域交流センターの活動と地域貢献について、さらなるご理解・ご協力をいただければ幸甚です。

（担当：大川）

三重県立看護大学
地域交流センター
令和4年度
Vol.25

編集・発行	三重県立看護大学地域交流センター
住 所	〒514-0116 三重県津市夢が丘1丁目1番地1
発行年月	令和5年5月
